

---

# 銀色世界

レイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀色世界

### 【Nコード】

N2965M

### 【作者名】

レイ

### 【あらすじ】

目が覚めると記憶喪失になっていた少年、白銀才人。強くてクールだった彼は、弱くてヘタレになっていた。

右も左も分からないまま、周りの友人、知人、他人に振り回され、ていく、少し騒がしい平穏な日常。

才人が記憶を失った原因とは。そして失ってしまった記憶の中身とは。

そんな才人の超展開な物語が、今始まる。

完全に自己満足用ですが、それでも楽しんでいただけたら幸いです。

## プロローグ「決意」

馬鹿だ、と思った。

誰が？

自分が。

何故って？

どうしようもなく愚かだからだ。

「ちっ……」

思わず舌打ちをこぼしていた。

自分の愚かさにか、それともまた別の理由か。

自分は一人で何でも出来ると思い込んでいた。

どれほど高い壁があろうと、乗り越えられると思っていた。

不可能な事はないと思っていた。

まだまだ子供だと言う事も知らずに、だ。

人間一人の力なんて、世界全体に比べれば限りなく無いに等しい。

例えば仮に世界のどこかで、誰かが人を殺したとする。

確かにその場合、その人物や周りにとっては大きな変化と感じるかもしれない。

だけど世界全体から見れば、ただ人が一人死んだだけにすぎない。

それで変わる事なんて、それこそ人口の数値ぐらいのものだ。

そう、ただそれだけ。

それほどまでに人間一人の力というものはちつぽけだ。

俺はそれに気付くのが遅すぎたんだ。

それはもうどうしようもなく、取り返しのつかない事だった。

過ぎた時間は、どう足掻いても取り戻す事など、出来はしない。

激しい爆音が俺の鼓膜を震わせる。

直ぐ近くで爆発があったんだろう。

わざわざ眼で確認するまでもなく、火が激しく燃え盛っているのが分かる。

このままだと俺の心の灯さえも巻き込んで、辺り一帯を焼きつくすだろう。

それまでの時間も、おそらくそう長くはない。

ならばどうする。

このまま諦めるのか。

まさか、そんな気は毛頭ない。

自分にはまだやる事がある。

その為ならどんなことだってするつもりだ。

たとえ自分がどうなろうとも。

だからこそ今は、今だけは退こう。

俺はある物に手を伸ばす。

その結果俺がどうなってしまうかは分からない。

運命なんてものを信じているわけじゃないが、今回ばかりはそれに身を委ねるしかなさそうだ。

そうして俺の意識は、白い闇に取り込まれていった。

## 第一話「再生」

目が覚めると、僕はベッドで寝ていた。

どうして寝ていたのか、今の状況を全く把握出来ていない。  
というよりも、多分寝ぼけているだけなんだろう。

いや、そもそも本当に寝ぼけているのなら、寝ぼけているとすら思わないんじゃないか？

どうなんだろうが、よく分からない。

考えても答えが出そうにない事をいつまでも考えている気はなく、  
とりあえず体を起こした。

「どこ、だ？ じじ……」

一人そう呟き、自分の体を見る。

何だ、これ？

来ていたのは病院などで入院患者がよく着ている、薄い水色の服だった。

この格好から察するに、ここは病院。

そして僕は入院患者という事だろうか。

でも何故自分がこんな状況下に置かれているのかが分からず、自分の記憶を思い返す。

が、全く思い出せなかった。

何だ？

何でこんな事になってるんだ？

僕に一体何があった？

「……ぐっ！ あっ……」

分からない。

何があったのか、全く思い出せない。

いくら時間が経っても、何かを思い出せそうにはない。

それどころか考えれば考えるほど、頭が痛くなってくる。

そうなるともう訳が分からなくなる。

とりあえず誰かを呼ぼう、助けてもらおうと思考が働く。

「あ——」

そう思い人を呼ぼうとするも、声がガラガラで大きな声が出せなかった。

自分の喉が水分を欲しているのは分かったが、水なんて一体どこにあるのか。

どこかに水分補給が出来るような物はないか、と辺りを見回す。

僕がいるこの部屋は、一人が過ごすには十分と言えるぐらいの広さだった。

他にベッドはなく、おそらく個室なんだろう。

ベッドの周りには医療器具だと思われる機材がいくつもあった。医療にあまり詳しいわけではないが、漫画やドラマ等で見て知った

のか、その機械が医療関係の物であるという事は分かった。

他には事務用の椅子と机があった。

机の上では様々な物が散らかつて置かれていた。

中でも目に留まったのは、煙草の吸殻がこれ以上は入らないほど入れられている灰皿。

医者に煙草を吸うなと言う気はないけど、流石にこれはどうなんだろうと思わされてしまう。

他にはよく分からない謎の書類があった。

一体何なのか気にはなるものの、勝手に見てはいけない物だと不味いのでやめておこう、と踏みとどまった。

そして最後、最も散らかっていたのが雑誌類だった。

今度は見てはいけない物かもしれない、という抵抗は思いの外なく、どんな雑誌なのか興味を持った。

だから手を伸ばし、取った。

「何、だこれ？ …… うわぁ!？」

手に取った雑誌をパラパラと捲ると、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

雑誌には裸の女性が男を誘惑するポーズを取った写真ばかり載せられていた。

つまり俗に言うエロ本である。

僕自身こういった物にあまり興味はなく、多分これもこの医師の物だろう。

灰皿といい、これといい、ここの医師は大丈夫か？

兎にも角にも誰かが急にここに来て、これを読んでいるところを見られると、色々な方面で不味いので素早く元の場所に戻す。

こんなに散らかっていれば物の場所が多少移動していたとしても気付かれにくいだろう。

と、本を元の場所に戻したところで、あ、と間抜けな声が出た。

喉が渴いている事を忘れていた。

でも部屋を一通り見回しても、水分補給が出来そうな物など一つもなかった。

どうすればいいのか。

そう悩んでいると、「ギィ」と扉が開く音がした。

誰だ？

ひょっとしてここの医師だろうか？

だとしたら色々聞きたい事がある。

「あの――」

「あん？ 何だ、とつくに目え覚ましてやがったか」

「ゴメンナサイゴメンナサイ。何でもないので見逃して下さい！」

開くのを待って、部屋に入って来たのは歳二十代前半ぐらいの外見をした成年だった。

服は全身黒系統の色で揃え、短い黒髪をオールバックにしている。顔もいかつく、体つきもがっしりとしている。

傍から見ると『ヤバイ世界の人』としか思われないだろう。

確かに僕は誰か来てほしい、とは思った。  
でもこんなどう考えても医師でもなければ、下手をすると助けも  
らうどころか、殺されそうな人に来てほしいとは全く思っていない。

「すみません、怖いんで帰ってください」

なんて当然言えるはずもなく、黙っておく事にした。  
誰だって命は大事にしたいだろう。

「何言つてんだ、テメエ？ まあいい。それよりテメエに聞きてえ  
事があるだ」

言いながら黒服の男はズカズカと僕の目の前まで前進してくる。

「え、えつと……何でしょうか……？」

黒服の男は何やら少し怒っている様子で僕に問いかけてくる。  
それに対して僕はおずおずとした態度でしか返せなかった。  
何をされるか分かったものじゃないからだ。

「あそこで何があった？ 詳しく説明しろ」

「は？ あ、あのー何の事をおっしゃっているのかさっぱり……」

「ああ!？」

「ひっ!」

黒服の男の迫力に押され、しどろもどろになる。

彼が一体何を言っているのか、この状況でどんな態度を取ればいいのか全く分からず、僕は困惑する。

「全く……お前はもう少し順序つてものを考えたらどうなんだ」

と、僕でも黒服の男でもない

黒服の男の後ろ側からまた別の誰かの声がした。

見るともう一人、黒服の男と同じぐらいの年齢だと思われる成年がいた。

今度は服を全身白系統の色で揃えており、黒服の男とは真逆の格好であった。

髪は薄い水色の長髪で、後ろ髪をゴムで一纏めにくくっていた。

顔はかなりの美形で、芸能人か何かに間違われてもおかしくなくらいだった。

もしかしたら本当に芸能人なのかもしれないけど、その辺は分からない。

さらに眼鏡をかけていて、美形かつ知的な印象がもたれる。

白服の男はどうやら黒服の男を止めてくれたようだ。

正直困っていたのでありがたい。

地獄に仏とは、まさにこの事だろう。

「いきなりただ質問だけをぶつけて、分かる奴がいるわけがないだろう。それに、詳しくはこちらも知らないが倒れていたんだ。多少は労ってやろうとか思わないのか」

「ああ？ 倒れてた理由なんざどうでもいい。それにあんな事しやがった野郎をわざわざ労わる必要あんのか？」

あんな事？

あんな事って、何だ？

何の事かも分からずただ困惑している中、男達は二人で勝手に話を進めていく。

「その一々突つかかってくる様な喋り方はやめろ、と前々から言ってるだろう……」

「今そんな事は関係ねえだろうが。大体それで相手が喧嘩売ってくるなら買っただけだ」

「その所為で今まで一体どれだけ問題起こしたと思ってるんだ！いい加減学習をしろ！」

「あん？ 何だよテメエ……やんのか？」

「そこでどうやってたら喧嘩に繋がるのか、一度お前の頭の中を覗いてみたいな」

段々と険悪な雰囲気になっていく中、僕はどうしようもなく慌てふためく事しか出来なかった。

ど、どうしよう！？

何かないか！？

……うん、何もない！  
って何もなかったら困るんだよ！

流石にこんな状況を放っておく事は出来ず、何か解決策はないか探してみる。  
が、馬鹿みたいな自問自答をただけで何も見つからなかった。

「あ、あのう……喧嘩は止した方が――」

「ああ!?!」「あん?」

「なっ、ナンデモナイデス!」

とりあえず制止の声をかけてみるも、二人の威圧感に押され直ぐに引き下がってしまう。

もしこの一部始終を見ていた人がいて、ヘタレと言われたとしても、こんな雰囲気の中で堂々と出ていけるわけがない。

そうこう僕が悩んでいるうちにも、二人は益々険悪な雰囲気になっていくだけだった。

一体どうすればいいのか。

もしこんな状況を救ってくれる救世主様とかがいるなら是非お願いしたい。

助けてください、お願いします!

「おい、お前ら……何、俺の職場で騒いでるんだ?」

僕の願いが通じたのか、突然扉の方から声がした。

自分を含め、三人ともが声のした方に顔を向ける。

するとまた新たに一人、男性が立っていた。

その男性は目が隠れるほどの長さをした白髪で、そしてかなり汚れた白衣を着ていた。

しかもその白衣すらちゃんと着ているわけではなく、ただ上に羽織っているだけで、かなりずばらな格好をしていた。

その姿からはとても想像できないが、白衣を着ていて、「自分の職

場」と言ったのだから多分この医師なんだろう。

願いが通じてやって来たのがこんな医師だなんて……神様ももう少し気を利かせてくれてもよかったんじゃないかと思う。

「……何でお前、そんな残念そうな顔しながら溜息ついてるんだ……？」

あなたが残念な医師だからです。

「いえ、別に……」

「まあいい、とりあえずそのシロクロコンビ。何があつたかは知らんがそいつは一応ここの患者なんだ。あんまり刺激するような事は控えてくれ。後、うるさい」

「「シロクロコンビ言っくな！」「」」

白髪の男の発言に二人が強く反応する。

「ブッ！？——シロ、クロ——コンビって——クッ、クッ——」

確かに狙い澄ましたかのように上手く分かれている。その事実に耐え切れず少し吹きだしてしまう。

「笑っくな！」「笑っくんじゃねえ！」

シロクロコンビは声を荒げて言ってくるが、言われたからって簡単に笑いが治まるわけでもない。

「だから前々から言ってるだろう？ そんなに色んな奴らにシロクロコンビって言われたくないならその格好をやめろ、って」

白髪の男の言う通りだと思う。

ここまで正反対の格好をしていると、誰が見ても狙ってやっている  
とは思われないだろう。

しかしそれより皆にも言われている事の方が気になる。

果たして突っ込んでいいのやら……

「「だつたらコイツがこの格好をやめればいいだろ！」「」

どこまで息ピッタリなんだろう、この人達は。

もしかしたら漫才とかしたら人気になれるんじゃないか？

「ま、お前らの事なんかどうでもいいんだ。それより——」

「「どうでもよくない！」「どうでもよくねえ！」

「あゝ、分かった、分かった。分かったから静かにしてろ、やかましい」

騒ぐシロクロコンビを余所に、白髪の男は僕の方を見る。

そして机の上にあつた何かの書類を手に取り、それを見ながら僕に話しかけてくる。

「え——つと？ 才人って言うんだな。才人、何でお前がここで寝  
ているか、分かるか？ 後、体のどこかに異常はないか？」

「さい、と？」

白髪の男の言葉が理解出来なかった。

才人って……誰だ？

大体僕の名前は……あ、あれ？

僕の名前って……何だ？

「ん、どうした？ 才人ってお前の——おい、まさか……」

どこか様子がおかしいと感じたのか、白髪の男は僕に更に何かを言おうとした。

そしてその途中で何かに察したかの様に言葉を止める。

「まさかお前、記憶がないのか!？」

白髪の男の言葉に、僕もようやく納得がいった。

記憶が、ない？

つまりは記憶喪失……なの、か？

ああそうか、だから色々思い出せなかったのか……

「……はい、そうみたいです」

記憶喪失と知った割に、僕の頭はとても落ち着いていた。

何となくそうなんじゃないかと思っていたからだろうか？

それともあまりに突発すぎて実感が湧いてこないからだろうか？

何にせよ僕が記憶を失った事は変わりようのない事実だ。  
これから僕がどうなるかは分からないけど、とりあえず、

拝啓、もはや僕の記憶にないお父様、お母様、僕は――記憶喪失に  
なっただけです。

## 第二話「自堕落な医師」

「記憶喪失!?!」

白髪の子との会話の中、白髪の子の発言にシロクロコンビが声を揃えて驚く。

おそらく考えもしていなかったんだろう。

二人は「そんな馬鹿な」と今にも言っしまいそうな顔をしている。僕だっけこうやってシロクロコンビの様子を冷静に観察してはいるものの、心の中はざわついている。

記憶喪失と知った事自体には不思議とそれほど驚かなかった。でも記憶を失って、今後どうすればいいのか全くわからない事に一抹の不安を覚える。

そんな事を考えているのが分かったのか、分かっているのか、白髪の子は、

「記憶喪失とは言っても、おそらく一時的なものだろう。遅かれ早かれいつかは記憶も元通りになるさ」

と、励ましに近い言葉をくれた。どっちなのかは定かではないが、少なくとも悪い人ではないと、そう感じる事は出来た。

「いつかはって、どうにかして戻す方法とかはないのか? 流石にこのままだと色々な都合で困る事が多いんだが」

シロクロコンビのシロの方が白髪の方に問う。

確かに記憶を戻す方法があるなら是非それを試したい。  
こんな何も分からないまま生活していくのはあまり良い気分じゃない。

「そんな都合の良い方法があったら苦労はせんさ。だがまあ、あえて言うとならば才人が記憶を失った原因さえ分かればどうにかなるかもしれないんだが……その肝心の才人が居た場所がなあ……」

白髪の方が溜息と共に吐き捨てる。  
何か問題があるんだろうか？

「あの、何か問題があるんですか？ その……僕が居たらしい場所って」

「問題も問題。大問題。問題があり過ぎて放っておきたくないよ」

「えっ！？ それってどういう事ですか!？」

予想以上の発言に僕は動揺を隠せないでいる。

記憶喪失になってしまいう状況になるような場所なんだから、多少の問題くらいはあるだろうと思っていた。でもまさかここまで言わせてしまうとは、一体どんな場所なんだろうか。

「お前が居た場所は元々は研究所でな、医療について研究されていたんだ。そこは十数年ほど前に謎の爆発が起きて研究が打ち切りになったのさ。以来そこは誰にも使われていない。まあ実際は医療につ

いてじゃなく、人体実験とか怪しい研究をしていたとかいう噂だけどな。真偽のほどは分からん」

「えっと……何でそんな場所に僕が？」

「さてね。以前のお前が何を考えていたかまでは知らん。とにかくお前はそこに一人で行って、そこで倒れていたって事さ。それで、だ。ここまではいい。これだけならまだお前が何で記憶を失ったかの原因も、調べれば分かったかもしれない」

「じゃあ、一体何が問題だって言うんですか？」

あまりに焦らされ続けていく内に、自分の中で苛立ちを感じ始めているのが分かる。

白髪の男にとってはどうでもいい、他人事かもしれないけど、僕にとっては重要な事だから急かさずにはいられない。

「そう急かすな。焦ったところで良い事なんて何もないぞ？ 焦らなくても説明ぐらいしてやるさ。お前は患者なんだからな、知る権利はある」

僕が苛立っている事を分かっておきながらも尚、白髪の男はいつもの調子で喋り続ける。

僕を落ち着かせようとしているのか、元からこういう人なのか。ともかく何を言っても無駄だと言う事は分かった。

「倒れているお前を見つけた時、研究所はそれこそ原型がないくらいに思いつきり破壊されていたんだ。いやむしろ、研究所で爆発が起きたって報告を近隣住民から聞いて、そこに向かったらお前が倒

れていたって言う方が正しいな」

「な、何で!？」

「分からん。近くに誰かが居た痕跡もなかったし、警察はお前がやったんじゃないかって思っている。ただ謎なのが、あれだけ建物が倒壊したのにも関わらず、倒れていたお前が何故か無傷だったって事と、何で大した外傷もないのにお前は記憶を失ったのかって事だな」

「……」

絶句。

今の状態は正にそれだった。

全く声が出なかった。

自分がどういふ存在か、何で記憶を失っているから知るはずもなく、むしろそれを知りたいと今僕は思っている。

ただ白髪の人から聞いている限りだと、自分は普通の日常とは遠く懸け離れている人間なんだって分かった。

自分について少しは知る事が出来たと言うのに、素直に喜ぶなんて出来やしない。

自分は何かヤバイ所に足を踏み込んでいるんじゃないか。

そついう不安が胸を煽る。

「さらに追い打ちをかける様で悪いが、あそこは立ち入り禁止になっている。建物も破壊して、つまりよほどの理由がなければお前は犯罪者になって逮捕されかねない。ただ、流石に記憶を失ってる奴をいきなり逮捕するってのはないだろう。良かったな」

何が悪かったと言っただろう。

記憶を失って自分が何なのか全く分からない。  
そんな状態で過ごしていかなければならない。

かと言って、記憶が戻ったら戻ったで逮捕されてしまうかもしれない。

こんな状況でどこが悪かったと言えるんだ。

これならいつそ研究所が倒壊した時に、僕も一緒に死んでしまっていた方がよかったんじゃないか？

「僕は……僕に、一体どうしろって言っんですか？」

「そんなの俺に聞かなくて。それを決めるのはあくまでお前だ」

「僕には、どうしたらいいか分かりません」

何て情けないんだろう。

最早自分の事でさえ他人に任せてしまっている。

「そんなに気にするな。お前は深く考え過ぎなんだ。確かにお前がやってないって証拠はないが、逆にお前がやったって証拠もないんだ。大した外傷もないって事はおそらく精神的ショックによる記憶喪失なんだろう。だとしたらお前はあの研究所で何か嫌なものでも見ただけかもしれない。建物の倒壊による近隣住民の被害もなかったわけだし、そこまで気にする事じゃないさ」

「気にしたところで何も変わらない、って事ですか？」

「そうだ。だから堂々とお前のやりたい事をしていればいい」

「そう、ですね。確かに言う通りかもしれませんが。ありがとうございます」

「おいおい、そんな礼を言われる程の事じゃないぞ」

彼にとってはそんなのかもしれない。

けど少なくとも僕にとっては今の言葉はかなり救われた。  
だから礼を言わずにはいられなかった。

この人は格好がだらしないし、態度もあまり良いとは言えないけど、  
本当はとても良い人なんだな。

初対面の僕ですら、こんな短時間でそう感じられるのだから、おそらくこの人の知り合いは全員そう思っているだろう。

「あー、何だ。とりあえず、もういいか？」

白髪の男との話が一段落ついて終わったと思ったんだろう。黒服の男が割って入ってくる。

そういえばこの二人居たな。

自分の事で頭の中が一杯だった所為か、忘れていた。

「ああスマンスマン。存在を忘れていた」

「「おい!!」」

「そう怒るなって。多分才人もそうだったぞ」

「「そうなのか!?!」」

「え!?! い、いや、そんな事ありませんって! ちゃんと覚えてました!」

ゴメンナサイ。

本当は忘れてました。

「ほおー……」

「……何ですか?」

これは多分、信じてないな。

まあ事実嘘ですけど。

「いや、何でもない。で、結局何なんだ? 用もなく会話に入ってきたりはしないだろ?」

「当たり前だ。こいつが今後どうしてえかはともかく、俺らはこいつをどうすりゃいいんだ? このまま自由にさせておくわけにもいかねえんだろ?」

「ああ、当然だ。とりあえずは今から今後どうするか決める為にこっちで色々調べるさ。ってなわけでこっからは個人情報とかに関わってくるから、シロクロコンビはさっさと出ていけ」

「「だからシロクロコンビ言っくな!?!」」

最後までシロクロコンビは息ピッタリと文句を吐き捨てながら出て

いった。

あの格好をやめるだけで呼ばれなくなりそうなのに、どうしてやめないんだろう？

シロクロコンビが出ていった事によって部屋には僕と白髪の男の二人きりとなった。

これが女性との二人きりなら多少は意識するかもしれないけど、男だから別段そういう事はない。

それはともかく、これでもう盗聴器が仕掛けられていたりしない限りは誰にも聞かれる事はないだろう。

まあ聞かれて困るような事があるのかは知らないけれど。

「さて、と。あいつらもいなくなつたし今から調査を始めるか……っと、そういえば自己紹介がまだだつたな。俺の名前はパスティア・ミザリー。一応ここで医者をやっている」

言われてようやくまだ名前を知っていなかった事に気が付いた。そういえばシロクロコンビの名前もまだ知らないな。後で会つたら聞いておこう。

「えっと、はい、よろしくお願いします。ミザリーさん」

「名字で呼ぶな、名字は嫌いなんだ。パスティでいい。まあ大抵はこう言つても、そのまま『パスティア』って呼ぶ奴ばかりだけどな」

「え！？ あのー……僕も『パスティア』さんじゃ、駄目ですかね？」

「嫌なら無理にとは言わないさ。お前の勝手にすればいい」

「じゃ、じゃあよろしくお願いします。パステイアさん」

「パステイア『さん』ねえ……。まあいい、ああよろしく」

パステイアさんはまだ何か言いたげな、そんな顔をしている。

ただどいきなり下の名前、しかも愛称で呼ばそれそうになったこっちの身にもなつてほしい。

「じゃあ才人、今から俺は幾つか質問をする。それに出来る限り全部に答えてくれ」

「はい、分かりました。それで、一体何を質問するんですか？」

「なに、お前が覚えている事と忘れた事をいくらか調査するだけだ。忘れたやつによっては説明とかしておく必要があるからな」

パステイアさんが散らかりきった机から紙とペンを取りだした。おそらく今からする質問の答えを紙に書き込んでいくんだろつ。

ただ、あんなに散らかりきっているのに直ぐに取り出せた事に驚いた。

直ぐに質問してくるかと思えば、それより先にさっきまで持っていた何かの書類を、机に無造作に放り投げる。

そんな事をしているから机が散らかるんですよ、と言ってしまいたかった。

だが今それを言うのはやめておいた。

それよりも先に、自分の事を早く知りたいからだ。

「さて、始めるか。まずお前は自分の名前すら忘れていたわけだが、他人の名前や容姿は覚えているか？」

「いえ、一人も……」

「ふむ、対人関係は全く覚えていない、か」

パスティアさんは僕の返答を聞きながら紙に書きとめている。

いきなり全部忘れていると言うとても幸先の悪い調査が始まった。何か段々不安になってきた。

「じゃあ日常生活で行うような事はどうな？ 例えば鉛筆、ペンの使い方。他にも食事の仕方や携帯電話の使い方とかだ」

「あ、その辺はちゃんと覚えてます」

そんな事まで忘れてしまっていたら、僕はただの駄目人間だろう。今でも既に相当な駄目人間になっているんだけど、それは気にしないでおう。

パスティアさんの言った通り。

「その辺も全部忘れていたら楽しい事になってただろうに……残念だ」

「今何か酷い事呟きませんでした！？」

「気の所為だ、じゃあ続けるぞ？」

何か別の意味で不安になってきた。

### 第三話「自分調査」

結局、不安でいながらも調査は続いていく。

あれからも幾つか質問をされけれど、常識的な事は割と覚えていた。

「結果からすると、自分の事は全部忘れているのか？ 過去の記憶や、自分がどんな感じの人間だったか、とかは全く覚えていないのか？」

「はい。自分がどういう人間で、一体何をしていたのか、全く覚えていません。そもそも今僕のこの性格ですら以前の僕と一緒にだったのか分かりません……」

「ふむ……なのに常識的な事は覚えている、か」

パステイアさんは下を向き、考え込んだ。

そして数分後、改めて僕に向き直った。

「成程な。記憶喪失は身体や精神に強いショックを受け、気を失った時に本人が『忘りたい』、と願った事を忘れるケースが多いが、おそらくお前もそのケースだろう」

「それって、つまり記憶を失う前の僕は自分に関わる人達の事を忘れたって願ったって事ですか？」

「そうとは言い切れないが、多分そうだろう。ま、以前のお前がさらに自殺志願者だったら、記憶喪失も研究所が破壊された理由も説明つくんだけどな」

「あの、記憶喪失が説明つく、って言うのは分かるんですけど、何で破壊された理由も説明つくんですか？」

「『研究所を破壊してその瓦礫に埋もれて死にたい』って考えてたなら、説明つくだろ？」

「……いや、確かにつきはしますけど、わざわざ死ぬ為だけにそんな事普通しませんって……」

「いーや、分からんぞ？ 今のお前ならあり得ないとしても、以前のお前が相当なキ。ガイだった可能性もある。どうだ？ 説明つくだろ？」

「何でそんなに自信満々なんですか……。忘れているからハッキリとは言い切れませんが、以前のお前でも流石にそれはないと思います……」

いくらなんでも以前の僕がそこまでのキ。ガイであるはずがない。というかそうではないと信じたい。心の底から。

それよりさっきから『今の僕』や『以前の僕』って一々面倒くさいな、もう！

「そうか？ 十分あり得そうな理由だが……。まあいい。結局のところ記憶喪失の理由で、今思いつくのはこれぐらいだ。あえて他にあるかと言えば、魔法で消されたぐらいだろうな」

魔法。

その単語を聞いた途端、僕の胸の中がざわつく。

「ぐっ……！」

「おい、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です。気にしないで下さい」

どうしてこんなに苦しいのかは分からない。

と言うより覚えていないが、魔法についてはある程度覚えていたみたいだ。

魔法、それは今でも解明されきつてはいない、人の持つ不思議な力。色々種類はあるけれど、術みたいなものだと思えばいいだろう。

人が持つているとは言っても、全員が全員使えるわけじゃない。

世界の人口の半数は使えるが、それでも半数は使えない。

だからその所為だろうか。

魔法を使える者を『マジシャン』、使えない者を『ルーザー』と呼び、マジシャンにはルーザーを『敗者』と罵る者が少なくない。

そう、マジシャンとルーザーの間では差別意識が強く生まれているんだ。

だから差別の原因となる魔法があまり好きじゃない。

少なくとも今の僕は。

「そう言えば、お前魔法については覚えているのか？」

「はい、覚えていたみたいです」

「そうか。それはよかったな。マジシャンが魔法を使えないとただの出来損ないだな。それに困るだろう。俺はルーザーだが普段出来た事が出来なくなる事の辛さはよく分かる。で、お前はどんな魔法が使えるんだ？」

「パスティアさんは「特技は何ですか？」程度の感覚で聞いたんだろう。」

「……え？ えゝと、僕ってマジシャン何ですか？」

「あ？」

⌋  
⋮  
⌋

⌋  
⋮  
⌋

⌋  
⋮  
⌋

「……お前、まさか……」

「……はい。魔法、使えません」

何という事でしょう。自分の事に関しては本当に綺麗さっぱり忘れてるじゃないですか。

「……出来損ないが一人、ここに出来あがった」

[illegible]

何てことだ……。

パスティアさんに出来損ないとして認識されてしまった。

いや、パスティアさんだけならまだいい。

ただもしかすると一般人にも出来損ない認定されてしまいそうで怖い。

「い、いや、今のは俺が悪かった。スマン……」

「そんな素直に謝らないで！ 後可哀想な人を見る眼で僕を見ないで！ 泣きそう……」

素直に謝ると言う事は、本気でそう思ったと言う事だ。  
馬鹿にする為に言った言葉とかではなく、本気で。

「ま、まあ一応お前はマジシャンだ。ただこうなるとルーザーと大して変わらないな……」

「……そうですね……」

僕が謎の水分で自分の目の前を見えにくくしていると、ふと何かに気付いたのか、パスティアさんの顔がハツとなる。

「しかしそれはちょっと不味いな。魔法が使えないとなると、アモスで働けるか微妙だぞ……」

「……はい？ アモス、って何ですか？」

「何だ？ 魔法については覚えているくせに、アモスは覚えていないのか」

「スイマセン……」

出来るだけ早く答えを聞きたかった。

だからあえて知らないといったけれど、アモス自体を全く覚えていないわけじゃない。

記憶が正しければ、確か旧約聖書に出てくる社会正義を説いた預言者のはずだ。

ただ、何で今その単語が出てくるんだ？

僕の知っているアモスとはまた別なのか？

「アモスって言うのは、『対魔法犯罪特殊部隊』Anti Magic Offender Special Unit、A・M・O・S・U、で通称アモスだ。アモスのスペル自体違っていれば、名称だって無茶苦茶だ。馬鹿なお偉いさんが『何かいい名前はないか』って考えた末に無理矢理付けられたふざけた名前だよ」

「えっと、アモスって単語が出てくる理由は分かったんですけど、今度はその、対魔法犯罪特殊部隊？　ってというのが分かりません……」

「分からないも何も、名前の通りだ。魔法を使う犯罪者への対策として、政府が作った『軍』みたいなものだ。魔法は強力な上に危険だ。それを犯罪者が使っていると警察じゃ手に負えなくなる事も出てくる。警察の中にはルーザーもいるからな。だからこそそれに対抗出来るような奴らを集めたのがこの特殊部隊ってわけだ。そしてお前も、それに所属している」

「はあ、そうなんですか……」

凄い事を言われている気はしなくてもないのだけれど、今一実感が湧かない。

これはとどのつまり、僕は凄い人、って事でいいんだろうか？  
いや、流石にそれは自惚れすぎか……。

「因みに、今お前がいるここも、アモス本部に大量にある医務室の一つだ。アモスの人間だけが使うわけじゃあないんだが、説明が面倒くさいからそういう事しておくぞ。ただ言っておくと、医務室が大量にあるように、当然俺以外の医者もたくさんいる」

「そりゃあ、そうでそうねえ……」

そんな重要な特殊部隊の隊員の健康管理を、こんないかにも「藪医者です」、って格好をしている人一人だけでやっていけるわけがない。

「まあ俺以外にも医者がいるとはいえ、そうそう他の医者と知り合わない事を願うんだな。お前だって怪我や入院はそう何度もしたくないだろ？」

「そりゃあ当然、そうですね」

「さて、と。これぐらい調べればもういいだろう。面倒くさいが前のカルテを書かなきゃならんな……」

「それ面倒くさがるって、医者としてどうなんですか……」

「いいんだよ。一々気にしてたら禿げるぞ」

「……それは嫌ですね」

「だろう？ ま、それはともかく、いい加減書き始めるか……」

「ん？ あの、その書類って一体何なんですか？」

パステイアさんは未だ散らかっている机に向き直り、カルテを書き始めた。

そして調査を始めた時、机に放り投げていた書類をまた拾い上げて、それを見ながらカルテを書いている。

僕が聞いたのはその書類の事だ。

「ん？ ああ、これか。これはお前の個人情報がそれはもうたつぷりと載っている、いわゆる履歴書だ」

「……すいません。それ、渡してもらえませんか？」

わざと個人情報載っている事を強調して言ってくるのが腹立たしい。

そんな物があつたのなら最初から渡してほしい……。

いや、ワザとか。

この人絶対ワザと渡さなかったな！

「ほう、そんなに欲しいか？ ほわ、受け取れ」

そう言ってニヤニヤしながら履歴書が無造作に放り投げてくる。

「うわっ！？ ——つと、ふう……。存外に扱わないで下さい！」

僕が怒鳴りつけてもなお、ニヤニヤしながら見てくる。  
本当に嫌な人だな……。

良い人だけど意地悪なだけなのか、ただの嫌な人なのか全く判別がつかない。

いつまでも怒っていて仕方がない。  
とりあえず書類に目を通そう。

履歴書によると、僕の名前は白銀しろがね 才人さいと。  
年齢は十七歳。

当然分かつてはいたけれど、男性。

と、ここまで読み上げたふと違和感を感じた。

「あの、僕まだ未成年みたいなんですけど、ここで働いていてもいいんですか？」

確かに未成年で就職する人だっている。

だとしても、危険な仕事を未成年にやらしてもいいんだろうか？  
そういうのは、偉い人とかが黙っていないんじゃないか？

「ああ、アモスへの入隊条件はやる気と実力だけだ。それ以外は過去の経歴とか、年齢とか、あまり気にしないいい加減な部隊だからな」

「それって……」

「おっと待て、お前の言いたい事は分かるぞ。確かにこれだと一見問題はありそうだが、強者しか求めない分、そう簡単に入ればしな

い。それに、そもそも強者揃いのところにわざわざスパイしに来る奴はいないだろう。そういう考えから、基本そういうのは気にしない事になったんだ」

それでいいのか、日本政府。

心配な事には変わりなかったが、今は自分の事の方が重要なのでそれ以上突っ込まない事にした。

そして僕は続きを読む。

どうやらイギリス人と日本人のハーフみたいで、髪は銀髪。

さつきから微妙に目に入ってくるこの髪、銀髪だったのか。

白髪じゃなくて本当に良かった。

別に白髪が特別嫌いってわけじゃないけれど、この歳で髪が白髪になるほどの苦勞をしていたくはない。

瞳の色はコバルトブルー。

顔立ちは多分悪くはないと思う、思いたい。

日本人とのハーフの割にはあんまり日本人らしい特徴が見当たらないな。

あえていうなら顔立ちや、骨格がどちらかと言えば日本人寄りな気がする。

家族は良心が既に他界していて、妹が一人いるみたいだ。

一応は妹と二人暮らしらしいけど、親戚とかはいないんだろうか？  
後で調べておくか……。

学歴は、中学校までが最終学歴で、高校には通っていないらしい。

特にといった怪我や病気もない健康体。

アモスに志願した理由は「魔法を犯罪に使う人達が許せないから」か。

かなり嘘っぽく思えるくらいベタだな。

これで大体一通り見終わった。

とりあえず今一番思っている事は、

自分の事なのに、履歴書を通して知るのが何故か虚しい……。

#### 第四話「シロクロコンビの苦難」

一通り見終わつたのだと、様子で察したんだろう。  
タイミング良くパスティアさんが尋ねてくる。

「こっちは大体知りたい事は知つたわけだが、お前の方は他に何か知っておきたい事はないか？」

「これを見て、自分がどういう人物なのかも多少ですけど分かりましたし、聞きたい事は今のところありませんね」

「そうか、ならもう家に帰ってもいいぞ」

言つて、最早僕に対して興味がなくなつたのか、パスティアさんは煙草を吸い、机にあつた雑誌を読み始めた。  
内容は、言つまでもないだろう。

反応に困るからそういつた本を堂々と読まないで欲しい。  
後もう少しまともな扱いをしてほしい……。

文句の一つでも言おうかと思つたが、あくまで仕事上、僕と付き合いつていただけであつて、親密と言える程の仲でもない。  
それどころか今日偶々知り合つただけの、初対面なんだからそこまでおかしい事じゃない。

「そうですか。ありがとうございました」

とりあえず礼だけは言つておいた。  
なんだかんだ助けてもらつたわけだし。

この後どうするかはまたその時考えるとして、まずはこの部屋から出よう。

そう思い立つ。

「うつ……」

が、足元がふらついて上手く立ちあがる事が出来ない。  
全く立てないわけでもなければ、歩く事が出来ないわけでもない。  
でも今この状態で家まで帰るのは流石に無理だ。

「何だ、まだ体調が戻っていないのか。全くだらしないな」

「あの……ぼくどれぐらいここで寝ていたんですか？」

「丸々一日、しか寝てないな」

…… たった今、非常に嫌な言葉を聞いた。  
もしかしたら僕の聞き間違いかもしれない。

いや、そうだ。

聞き間違いだ。

そうに違いない。

「すみません。ちょっと聞き間違えかもしれないんで、もう一度確認しますけど、一日『しか』寝てないって、言いました？」

「ああ言った。一日『しか』寝ていない」

聞き間違いであってほしかった……。

「すみません、ちょっと聞き間違えたかもしれませんが確認しますけど、一日『しか』寝てないって、言いました？」

「ああ言った。一日『しか』寝ていない」

……聞き間違いであってほしかった。

「じゃあ質問を変えます。僕はどれくらい休む必要があるんですか？」

「なに、そんなに長く休む必要はないさ。お前はあくまで精神的な疲労をしているだけだからな。そうだなあ……長くても精々一週間、それくらい休んでいれば問題ないさ」

「それって、逆に一週間ぐらい休まないと問題あるって事ですよね？」

「だな」

「……もう少し——」

「駄目だ」

「まだ全部言っていないのに!？」

「俺はこう見えても忙しいんだ。とてもじゃないが、お前に構っている暇何てないんだ」

どう見ても見た目通り暇そうにしか見えませんが？

こんなやり取りをしている最中でも、まだ雑誌読んでるし、これを忙しそうに見えると言う人がいたら、真っ先に眼科を勧めるね。

「いくらなんでも、こんな状態で家に帰るのは不味いと思うんですが？」

「わざわざここで寝てなくてもいつかは治る。それだったらまだ落ち着ける家の方が、休むには適切だろう？」

「もし倒れたりしたらあなたの責任になりかねませんが？」

「その時はお前が勝手な判断で、無茶してぶっ倒れたとでも言うておくさ。大丈夫だ、流石にそうそう死にはしない。死にかけはするかもしれないけどな」

「それ十分問題あるでしょ!？」

酷い、何て酷い！

この人の頭の中は一体どうなっているんだ。

こんな人を雇っているこの病院もどうなっているんだ。  
絶対クレームとか来るだろう……。

「はあ……分かりました。分かりましたとも……」

最終的に、僕の方が折れる形となった。

倒れて具合が悪くならないか心配だ。

それとも本当にわざわざ休む必要はないんだろうか？

どちらにしろ、本気でここに置いておく気はないみたいだし、諦め

るしかない。

でも流石にこのままの状態で帰る気はなく、どこか別の所で休んでから帰る事にした。

幸い履歴書に住所が書いてあった。

勿論それを一字一句間違はなく暗記しておいた。

だから誰かに道を聞くなりすれば帰れないなんて事はないだろう。

「そつえば才人」

と、今まさに部屋を出ていこうとした僕を、パスティアさんが呼びとめた。

「何ですか？」

「お前アモスでの仕事はどうするつもりだ？　しばらく休暇をもらいたいって言うのならそれでも構わないぞ。俺から上に言っておいてやる。やめたいって言うのなら、それでもいい。お前が選んだ選択肢だ。誰もとやかく言わないだろうさ」

言われて初めて気付いた。

そう言われればその事については全く考えていなかった。

言われてから気付くなんて、馬鹿か僕は。

ほとんど何も分かってない状態で、アモスで仕事をしていくのは危険な気がする。

でも活動をしていく中で記憶を取り戻す手掛かりが見つかるかもしれない。

それならば、僕は多少危険でも元に戻りやすい方を選ぶ。

「とりあえずしばらくは休ませてもらいます。それで休んだ後は、一度仕事の説明を受けてからまだやっていこうと思います。出来れば記憶は元通りになってほしいですから、少しでも可能性のある方を選びます」

「それならそれでいいが、場所が場所脱し大した成果が得られるとは思えんな。はっきり言って、何もないところから探し出す事になるが、それでもいいのか？」

そう、まさに暗中模索。

パスティアさんの言った通り、何も手掛かりがない状態から探し始めるんだ。

でも何もやらずにただ待っているよりは断然いい。

僕は質問に対して、無言で頷く。

「そうか、じゃあこれ以上何も言つまい。俺も少しぐらいなら手助けしてやらんでもないし、精々頑張るんだな」

「はい、ありがとうございます」

「で、最後に一つ。あんまり怪我して俺の仕事を増やすなよ？」

「……善処します」

苦笑いを浮かべながら、今度こそ部屋を出て言った。

この病室の外に行くというのは、記憶がない僕にとっては見知らぬ、

新たな世界に行くような感覚だった。

おそらくこのままでは、これからもこんな感覚を何度も味わうんだろう。

新鮮と言えば聞こえはいいかもしれないが、はっきり言って何処へ行っても迷子なだけと言ってもいい。そう思うとあまり良い気はしない。

「なんか、普通の病院だな……」

だからと言って、その新たな世界での第一声がこれとは、如何なものか。

実は色々と期待していた。

アモス本部の病院とか言うぐらいだから、もう少しこう……実は世間にも公開されていないような、特殊な機械や設備があるんじゃないかって思っていた。

しかし現実には期待なんて裏切りまくって、至って普通、一般の国立病院みたいな感じだった。

そりゃあ確かに他の病院と比べたら綺麗で、設備も最新鋭なのかもしれないけど、それだけだった。

別にこの病院が飛んで移動したり、変形合体するロボットだったり、全国にある病院全部に同じ顔の女医さんがいたりはしないだろう。いや、むしろそうだったら困る。

大体同じ顔の女医さんが全国にいたら、同じ顔の女性の巡査さんもある事になる。

怪我や病人、パステイアさん以外の医者らしき人達が建物内を歩い

ているのがちらほら見える、どこからどう見ても普通の病院だった。

「ここは確かにアモスであってはいるが、その中でも医療関係が集まった別館だ。アモスの本部自体は別にある。しかもこの別館は一般人にも通常の国立病院として開放されているんだ。むしろ普通じゃないと困る」

声がした方を見ると、シロクロコンビのシロがいた。呟いていたのが聞こえたんだろう。

「待っていてくれたんですか？」

「記憶喪失になったのだから当然覚えていないだろうが、聞きはしたよな？ 研究所が酷い有様になっていたところに、お前は倒れていた。ならお前は何か知っているだろうろ俺の上司が、『一体何があつたのか本人から聞いてきて。君達なら歳も近い彼とも話しやすいだろうから』って言うてきたんだ。だが、肝心のお前が記憶喪失になった事で、完全な骨折り損になったわけだが……」

シロは疲れ果てているんだろう。

「やれやれ」といった感じで説明する。

シロの上司も研究所には何か気になる事でもあるんだろうか。やっぱり一度研究所には行ってみるべきかもしれない。

「あ、自己紹介まだでしたよね？」

「ああ、そうだったな。俺の名前は柏<sup>かしわ</sup> 誠<sup>まこと</sup>、マジシャンだ。白銀の事については、少なくとも今の白銀よりは知っているつもりだ。だから自己紹介はいい」

「分かりました。よろしく願いします、柏さん」

「誠でいい。白銀が今後どうする気なのかによつては、共に行動する事も多くなりそうだからな。おそらく恭介も同じ事を言うだろう」

「じゃあ僕も才人でいいです。それで恭介って、もしかしてさつき一緒にいた人ですか？」

「ああそうだ。あいつの名前はたまき鏝きんづけ 恭介、ルーザーではあるが、少なくともその辺の一般マジシャンにやられるほど弱くはない。そもそも一般マジシャンにやられるようじゃアモスに入る事自体が無理だけだな」

「そうなんですか。で、その恭介さんはどこに行つたんですか？」

見渡す限り近くにはいなさそうだ。

別にずっと一緒にいるなんて事はないのかもしれないけど、二人の息の合い様を見ていると、普段から一緒にいるように思える。

「恭介はさつきうちの上司に才人の事を報告しにいったはずだ。うちの上司が何を考えているかは知らないが、妙にお前の事が気になるようだな」

特に気にされる理由は思い浮かばない。

そもそも記憶喪失だから忘れていただけなのかもしれないけど。

「そろそろ帰つて来てもいいと思うが……ん？ 来たな」

誠さんが向いた方と同じ方向を見ると、確かにさつき出会ったシロ

クロコンビのクロがそこにはいた。

服装や顔も然る事ながら、歩き方まで普通の人には全く見えない。

こんな人がアモスに入るのをよく周りは許可したな……。

面接とかあれば面接室に入った瞬間に落とされるだろう。

あれ？

それってつまり面接はなかったのか？

面接もなしに入れていいのか……？

「恭介、お前の事は才人にもう紹介しておいたぞ。それで、あいつは何て言っていた？」

上司の事「あいつ」呼ばわりしていいんですか、誠さん……。

「あん？ もう終ってんのなら楽でいいか。あの野郎が何言ったか話す前に、まず確認する事がある。おい才人、パスティアとの話が終わったんなら、大体はもう理解してんだろ？ お前は今後どうすんだ？」

どうでもいいけどいきなり話振って来ないで下さい。

あなたの場合心臓に悪いです。

怖くて言えないけど……。

そしてあなたも上司を「あの野郎」呼ばわりですか……。  
出来ればその上司とは一生会いたくない気がしてきた。

「とりあえずしばらく休暇はもらいますけど、アモスでの活動は続けていくつもりです。だからその為にも、仕事に関する事とか教えてくれるとありがたいです」

「なら話は早え。あの野郎、『才人がもし今後もアモスで活動が続けていくつもりなら、俺達でサポートしてあげよう。彼を上手く利用すれば俺が伸し上がっていくのにかなり役立つだろうしね』とか言いやがった！　ったくあの野郎、面倒事はいつもこっちに押しつけやがる！」

「そのくせ、評価されるのはいつもあいつだからな」

「いや待ってください。僕を利用すれば、ってそれ本人に言っていないですか！？」

「ああ？　別にあの野郎はそんな事気にしねえよ。こういう事は堂々と言いやがるから尚更性質がわりい……」

「何て言うか……凄い上司ですね」

色んな意味で。

「「やっぱりそう思うか？」」

この二人も苦勞しているんだな……。

## 第五話「誠のトラウマ」

尚も誠さんは喋り続ける。

「……まあ、性格は酷いが一応信用は出来る。信頼を得る為に提供しておいた方がいい情報はしっかり話してくるからな。だから俺たちは未だにあいつの部下なわけだし。ただ、あくまで話すのは最低限なんだが……」

説明しているようよりは、愚痴をこぼしているだけなんだろう。僕が聞いているかどうかなんて、おそらく気にしていない。

「へえ、二人はどれくらいアモスにいるんですか？」

「まだ大体三年程だな。俺も恭介も、……後一人いるんだが、三人全員と一緒にアモスに入ったんだ。その時から上司は一緒に、つまり上司とは三年の付き合いになるな」

何故か最後の一人の時だけ、妙に口を濁した。

その一人の事をあまり話したくないというのは、誠さんの雰囲気に分かる。

それでも好奇心には負ける。

「その後一人って、どんな人なんですか？」

「あー……いや、その……何だ？」

「いや、何って言われても困るんですけど……」

余程その人の事を話したくないのか、先程までの口数が驚く位になくなった。

苦手な人なのか、容易に人に話してはいけない人なのか、いやもしかして、

「あつ、もしかしてその人……故人、なんですか？」

だとすれば迂闊だった。

軍のような存在のアモス。

そんなアモスで仕事をしていたら死んでしまう人がいたっておかしくはない。

そもそも口を濁した時点でその可能性も考えるべきだった。

今更ながら聞いてしまった事に後悔する。

「いや、それはない」

しかし僕の予想は大きく外れていた。  
シロクロコンビが同時に否定する。

「えー……」

「あいつはそう簡単に死ぬ奴じゃねえ。あいつが死ぬくらいなら、先に俺達の方が死ぬ」

「ああ、それには同意するしかない。珍しく気が合うな」

かなり酷い事を言っている気がするけど、それぐらい凄まじい人なんだろう。

というかあなた達思ったより仲いいですね。

シロクロコンビの話を聞く限り、後一人は二人よりも色々と凄い人らしい。

二人の上司といい、その後一人といい、シロクロコンビも相当凄い人達だと思うけど、更にその上がいるなんて、アモスで働く人達はヤバイ人ばかりのようだ。

今のところ僕の知り合いには凄まじい人しかない気がする。個人的にはもう少し平々凡々な方と知り合いたい。

「とりあえず後一人についての説明は勘弁してくれ。下手な事言つと殺されかねないんだ……」

冗談ではなく、本気でそう思っているのは誠さんの疲弊しきつた顔を見ればよく分かる。

第一印象はクールで冷静な人だと思っていたけど、あまりそうでもないみたいだ。

それとも上司とその人だけが例外何だろうか？

「別に俺らから説明する必要はねえんじゃねえか？」

誠さんに助け船を出すかの様に、恭介さんが口を挟む。

説明する必要がないって、どういう事だ？

「だってよ、俺らがサポートするって言っても、助けれんのは精々仕事とかぐれえで、生活面とかまでは無理だ」

「まあ、そうですね」

「だから記憶喪失になる前の才人とも面識があつたあいつが、その辺をサポートする事になった。つまり遅かれ早かれ才人、お前はそいつと知り合う事になるってこつた」

「そうなんですか!？」

そんな重要な事をサラッと話さないでほしい。  
以前の僕を知っている人物に会えるとなると、当然以前の僕について聞けば色々分かるはずだ。

「ああ、だから知りたかつたら本人に会って話すのが、一番早いってわけだ」

「確かに、それなら別に話してもらう必要はないですね。それで、僕はいつその人と会えばいいんですか？」

「あー……すまねえが、今からだ」

「「今からあ!？」」

近いうちに会うだろうとは思つた。

でもまさか今からとは、当然僕と誠さんは驚きを隠せないでいる。誠さんに至っては、この世の終わりの様な顔をしている。

そんなに苦手なのか……。

「ああ、今からだよ。葵って名前の奴だ。後でここに来るみてえだからそんな時にでも本人について聞いとけ」

「はあ、分かりました……。ところで、恭介さんはその、葵さんって人、苦手じゃないんですか？」

葵と言う人の話の時、誠さんほど嫌そうな顔をしていなかった。だから少し気になった。

「あ？ あー……苦手っちゃ苦手なんだけどよお、こいつ程じゃないわ」

そう言って恭介さんは先程からブツブツと暗い顔で何か呟いてる誠さんを指差す。

「俺が二人と知り合っただのは高校の頃なんだがよお、こいつらは家が近くの幼馴染らしいんだ。で、出会った頃から既に苦手意識持ってたやがったな」

「そうなんですか……」

勝手に過去の話とかをされているにも関わらず、相変わらず誠さんはブツブツと何か呟いたままだ。

誠さん、一体何があなたをそうさせたんですか……。

「苦手な理由は一応分かるんだが、それについては言わねえでおくわ。知らねえ方がいい」

「はい、僕もあまり知りたくないです……」

「ともかく、俺もあいつには出来るだけ会いたくねえんだ。ってなわけで俺は行く！」

言っただけで恭介さんはそそくさとどこかへ行ってしまった。一人で رفتったので、誠さんは置いてけぼりにされている。

「はっ！？　そうか、あいつが来るのか！？　おい馬鹿、俺を置いて先に行くな！　悪い、才人。聞きたい事があつたらまた今度聞いてくれ！」

そして誠さんも颯爽といなくなってしまった。

あんな態度を見せられたら僕も会うのが怖くなってくる……。

勿論そんな我儘が言える立場なわけでもなく、僕はただ待つ事しか出来ない。

ただ、いつ来るのかも分からないのに、ずっと立って待つのは辛いものがある。

だから直ぐ近くなったベンチに腰掛けて、葵さんを待つ事にした。

ふと、病院が異様な位に静かな事に気が付いた。

さっきまではちらひらとあつた人影が、今は全くと言っていいほどない。

何事かと気になってので、少し近くをフラフラうついてみると、時計が目に入った。

見ると、今の時刻は大体十二時。

今は深夜ではないので、正午という事になる。

そうか、昼食時だから人がほとんどいないのか……ん？

それって葵さんも昼食でしばらく来ないという事では？

恭介談も『今すぐ』、ではなくて『後で』、ここに来るって言うていたし。

そう考えた途端、時間の立つ速さが急に遅くなったように感じた。更には空腹が激しく自己主張し始めるようにもなった。

ただ来るまで待つだけならば大して苦ではない。  
だけど、そこに空腹も混じるとなれば話は別だ。  
人間は楽しい時間程短く感じ、苦しい時間程長く感じる事が多いけれど、今の僕がまさにそれだった。

一分経つのがあまりにも遅く感じる。

出来る事なら僕も昼食を取りたい。

でもいつ来るか分からないから下手に動けない上に、そもそも食事を取る手段もない。

つまり僕はここで葵さんが来るまでひたすら待つという選択肢しか選べないというわけだ。

「誰かー、せめて水……」

そんな事をほざいてみても、誰も来るわけがなかった。

もし今ここで僕に食事をくれる女性がいたら、思わず惚れてしまいそうだった。

結局、この時間僕はベンチに戻って、まぬけとも言える腹の演奏を聞きながら。休憩し続けるしかなかったという……。

一時間ほど経つただろうか。

いい加減空腹にも慣れた。

でも喉の渇きは慣れるはずがなく、既に喉はカラカラだが、どうしようもないので諦めた。

そして特にやる事も無く、僕は暇を持て余していた。

何かあればまだ暇を潰す事も出来たかもしれないのに、本当に何も無い。

何も持っていないからただブーツとしているしかなかった。

すると、一人の女性が近づいてきた。

最初は勘違いかとも思っただけで、目線が合うと迷わず僕の方へと歩いてきた。

青いショートヘアに黒いスーツ、年齢はシロクロコンビと同じくらいだろう。

スレンダーな体型で、仕事の出来る女性というのが第一印象が。

「久しぶりね、才人。とは言ってもあなたは忘れているみたいだから、一応『初めまして』にしておくわね」

女性は僕の目の前まで来ると、明るく話しかけてきた。

つまりこの人がシロクロコンビの言っていた、葵さん、で間違いなはずだ。

「えっと、葵さん、ですか？」

「ええそうよ」

ビンゴ。

この人が葵さんみたいだ。

「よ、よかった……」

「ちょ、ちょっと！ どうしたのよ!？」

安心して気が抜けたのか、さっきまで感じなくなっていた空腹が急に耐えられなくなった。

「すいません、ご飯。それでなくとも水を……」

「そんな事言われても、今何も持っていないわよ！？ え〜と……分かった。直ぐ自販機で買ってくるわ、何がいい？」

「あ、出来ればカフェ・オレで……」

「了解。ちょっと待ってなさい」

そして葵さんは行ってしまった。

会っていきなり図々しいとは思ったが、そんな事を気にしている余裕は今の僕にはない。

しかし本格的にヤバイ。一体いつから僕は食べてないんだ？それも記憶がないから分からない。

ただ言える事、それは、

「葵さん無理です。もう持ちません……」

そう言ったのを最後、僕は完全に崩れた。

## 第六話「才人と葵」

「いやあ、助かりました」

「こっちはいきなり倒れそうって状態だったから、焦ったわよ。一体何時から食べてないのよ……？」

「分かりません……」

「あゝそっか、そういえば記憶喪失なのよね」

そう、今の僕は記憶喪失だ。

何も覚えていない。

何時から食っていないのか等、分かるはずがない。

だからと言って、会っていきなり、しかも女性に奢ってもらうと言うのはなんとも情けない。

本人は気にしていなさそうだけど、いつかお礼をした方がいいだろう。

「さてと、その話はもうこれで終わりにして、改めて自己紹介。私の名前は梶本<sup>かじもと</sup>葵<sup>あおい</sup>、記憶喪失になる前のあなたとは、それなりに親しい仲だったのよ。まあ私が一方的にそう思っただけかもしれないけどね」

「よろしく願います、葵さん」

この梶本葵と名乗る女性がシロクロコンビ、特に誠さんに恐れられている人物のようだけど、別に恐れられるような感じの人ではない

気がする。

「それにしても、随分と印象が変わったわねえ。以前のあなたと比べると別人のようにしか思えないわ」

「以前の僕って、どんな感じだったんですか？」

記憶喪失によって性格が変わっている可能性自体は予想していたけど、出来ればあまり変わって欲しくはない。

だから葵さんの言葉には少なからずショックを受けている。

「以前のあなたなら、私に敬語を使うなんてもつての外。それどころか、かなり無愛想だったわよ？ そうねえ、偉そうな一匹狼？ そんな感じだった気がするわ」

「そうなんですか！？」

思わず大声を上げてしまう。

でも驚くのも仕方がない。

自分で言うなという感じだけど、今の僕は流石に偉そうではないと思っている。

「そんなに違うんですか……？」

「本当にね。私もあなたに会ってビックリしたわよ。まさか敬語を使ってくるか思いもしなかったわ」

それはむしろ以前の僕が失礼すぎるだろう。

おそらく葵さん以外にも、そういった態度を取っていたんだと思う。それなりに親しい仲だった相手にすらそんな態度なのに、他の人に

は紳士的に接するなんてことはないだろう。

「まあそんなに気にする事じゃないわ。生まれ変わったとしても思っておけばいいのよ。私もそう思う事にするわ」

「そう言ってくれると助かります。ありがとうございます」

「どういたしまして」

と、笑いながら葵さんは言う。

全く、こんな良い人に対しても無愛想だなんて、以前の僕はなんて酷いやつなんだ。

少し懲らしめる意味で殴ってやろうか？

……いや、それだと僕が痛いだけだし、やめておこう。

「ともかく、あなたの事はある程度知っているし、力にもなれると思うわ。知りたい事があつたら協力してあげる。だから聞きたい事があつたら是非聞いて！」

そう言つて「エッヘン」と胸を張る。

本当ならかなり頼もしく見えるはずなのに、無意識でやっているのか、とても大きいとは言えない胸を強調するかの様に胸を張っているの、何だか妙に締まらない。

「……ナニカイッタカシラ？」

「いいえ、何も言つてません！！」

寿命が縮んだ。

縮んだなんてものじゃないな、刈り取られそうになった。少しでも返答が遅かったら、間違いなく殺られていた……。

何で心の中が読めるのかとかこの際関係無い。

今後は絶対胸については触れない事にしよう……。

どうして恐れられているのか、少し分かった気がする。

「……まあいいわ、ともかく一度あなたの家まで送るわ。あなたしばらく家に帰ってないみたいだし、良い機会でしょ」

「そう、なんですか」

家にすら帰っていない。

以前の僕はとことん不可解な行動が多いな。知れば知るほど分からなくなっていく。

「このまま直ぐ出発するんですか？」

「いえ、その前に先にあなたの荷物を取りに行きましょう。付いてきて」

「あ、はい分かりました」

葵さんは僕に背を向け、歩き始めた。

僕もその後を追う。

それにしても、荷物って一体何があるんだろう？

出来れば役立つ物がいいな。

例えば携帯電話とか。

病院内をしばらく移動していると、別の建物へと繋がる渡り廊下があった。

その建物はとても大きく、見上げてても屋上が見えない。  
今いるこの病院も十分広かったが、その非じゃなかった。

「あれ、何ですか？」

「あれがアモス本部よ。一応警察署でもあるけどね。元々からここまで大きかったわけじゃなくて、アモスが出来てからこの大きさになっただけいわ」

「それにしても少し大きすぎませんか？」

「アモスはちよつと特別なのよ。民間人を守るのは警察の仕事だけど、アモスは民間人を支配しているの」

「え！？ 支配ってどういう事ですか！？」

「知らないなら驚くのも無理ないかもね。分かりやすく言うと、アモスは王様みたいなものよ。それなら納得出来る？」

「あ、それなら一応……」

流石にビックリした。

支配なんて言うから、てつきりもつと酷い事をしているのかと思った。

「王様なんて言っても、権限があるのは実質上にいる極少数のお偉いさんだけ。私達は王様に従う兵士よ。まあそれでも医者や弁護士

よりもなるのが難しいし、たとえ末端でもなれたら勝ち組扱いよ」

「は、はあ……」

「因みに、アモスの一番上ともなると、総理大臣や大統領より偉いわよ？」

「確かにそれならここまで大きいのも納得です……」

と言うよりは、納得するしかなかった。

アモスが凄いところだというのは聞いていたけど、スケールがでかすぎて、あまりに予想外だった。

葵さんの話を聞く限りだと、僕やシロクロコンビ、そして葵さんもいわゆるエリートという事になる。

ただシロクロコンビの様子を見る限り、そこまで偉いとも思えない……。

「さてと、アモスについては大体分かったみたいだし、そろそろ行くわよ」

「あ、はい」

葵さんはアモス本部まで橋らしき道を歩いて行く。

途中、警備員であろう人に何かカードの様なものを見せてから通してもらった。

多分関係者以外は原則立ち入り禁止になっているんだろう。

葵さんに聞くと、先程見せたカードはどうやらアモスのメンバーである事を示す物らしい。

葵さんの話とは打って変わって中は病院の時と同じく、特別何か感激したりする事もなく、普通だった。

「普通にどこかの会社みたいですわね」

「下の方はね。上の方になると訓練スペースや居住スペースがあるわ」

説明を受けながら、葵さんと共にエレベーターに乗る。

どの階に行けばいいのかわからないので、それは葵さんに任せ、僕はボーツとしていた。

エレベーターの扉が開いた。

エレベーターを出て、見渡すと、長い一本の廊下があり、その壁にいくつもの部屋がある。

その様子はホテルを連想させた。

ただそんな事を思ってみても、わざわざ口に出す事もない。

葵さんの後をただひたすらに付いていっていると、葵さんが急に一つの扉の前で立ち止まった。

「着いたわ、ここがあなたの部屋よ」

そう説明を受け、僕は扉を開けた。

鍵がかかっているのではないかと少し心配もしたけど、どうやらその必要はなかったみたいだ。

中を見渡すと、殺風景という言葉がよく似合う光景が、そこにはあった。

あると言えば、大きいわけでもない、大人の男性一人が寝たら占領出来てしまうであろうベッド。

これ以上は入らないという程に本の入れられた割と大きな本棚が一つ。

服の着替え等が入っているとされるタンス。

何の変哲もない、どこにでもあるようなただの事務用の机と椅子。

そしてその直ぐ近くの床に、黒いシヨルダーバッグが置かれているだけだった。

部屋自体は綺麗だ。

けどあまりに物が少なくて、綺麗な部屋という印象は持てそうにない。

「相変わらず、何もない部屋ねえ……」

「確かに何もありませんね……」

娯楽になりそうな物なんてないと言ってもいいだろう。

本棚に入っているのは何かの資料ばかりだ。

小説も少しはあるみたいだけど、本当に少しだった。

バッグの中に何か入っている可能性もなくはないが、部屋の様子からして望みは薄そうだ。

僕はいつもこんな部屋で過ごしていたのか。

寂しくなったりはしないんだろうか？

以前の僕が全く理解できない。

「とりあえずこの部屋から必要そうな物だけ、あのバッグに入れて持っていきなさい」

そうですね、と相槌を打ちながら僕はバッグの中身を見た。

予想通り中に娯楽の為の物なんてなかった。

ただ娯楽道具がなかっただけで、中身自体は思った以上に入っていた。

その中でも僕は、特に必要だと思われる、携帯電話に財布、アモスのメンバーである事を示すカードをとりあえず取り出した。カードはさつき葵さんが警備員の人に見せていたのと同じ種類の物だから、多分間違いない。

他に大体いると思える物はなく、とりあえず全て机の上に置いておいた。

ただ一つ、何なのか分からない物があつた。

「あの、葵さん。これって何か分かりますか？」

「ん、どれ？」

僕が手に取って見せたのは、謎の棒状の物だった。

片手で持てるぐらいの太さと長さで、何かの柄のようにも見える。

「ああ、それで。それはあなたが使っていた『剣』よ」

何もおかしいところはないといった感じで言われたが、僕からすれば気になる点が多すぎる。

「色々聞きたい事はあるんですけど……まずこれが仮に剣だったとして、持っていていいんですか？」

僕の疑問は至極普通な物だと思う。

僕が知る限り『剣』というのは刃物であり、凶器だ。

もしこれがその『剣』なんだとしたら、銃刀法違反で捕まってもおかしくないはずだ。

いやそれとも、刃渡りの関係でセーフなのか？

「アモスは軍みたいなものよ。軍人が武器を持つ事がおかしいかしら？ 犯罪者の中には武器とか強力な魔法を使ってくる奴もいるわけだから、こつちも武器を使わないと対抗出来なかつたりするのよ。それに、ちゃんと規定では普段は携帯のみ許可されていて、使つちや駄目つて事になつてゐるから大丈夫よ」

「持つていても良いのか、つて事については分かりましたけど、これが何で剣なんですか？」

ただの剣の柄、と言われれば何故こんな物を持つてゐるのかつて疑問が湧きこそするけれど、まだ納得出来る。

でも葵さんは確かにこれを『剣』と言い切つた。  
一体どういつ事なんだ？

「んゝ、才人、『魔具』つて分かる？」

「いえ、分かりません」

「魔具つていうのは、元々それ自体に能力があつて、マジシャンじゃなくても使える代物なの。まあ魔具自体が相当レアだから、ルーザーで持つてゐる人なんてほとんどいないけどね」

「はあ……」

「で、それがその魔具つてわけ。その剣には元々刃がないの。名前は『魔法剣グロウシェイド』つて言つて、力を解放する事で刃が出るはずよ」

「それで、その力を解放する方法つて、どうするんですか？」

「……念じれば何とかなるんじゃない？」

「多分何とかありませんよ、それ！？」

「仕方ないじゃない。私魔具なんて持つてないんだから。今度持つてる人にでも聞いておくわ」

「お願いします……」

魔具まで使えなければ、僕がここで働くのは不可能になってしまいそうだ。

「えっと、確か才人は魔法使えなくなったのよね？」

「ええ、まあ……」

「じゃあ魔具ぐらいは使えておかないと、とてもアモスの仕事なんてこなせそうにないわね」

「やっぱり、そうですか……」

「というわけで、今度仕事の説明とかも兼ねて、魔具の使い方や、出来るか分からないけど魔法の使い方、知りたいなら教えてあげ

るけど、どうする?」

「本当ですか!?!」

「ええ、私から教えて上げれる事は少ないと思うけど」

「全然構わないです。是非お願いします!」

願ってもいなかった事だ。

自力でどうにか解決するつもりだったので、この提案は非常にありがたい。

これでさらに我儘なんて言ったら罰が当たるだろう。

話は終わり、荷物整理を再開する。

とりあえずグロウシェイドとか言う名前の魔具以外は、最初と持っていく物は変わらなかった。

本等はまだここに来た時にでも読むなり、家に持って帰るなりすればいいだろう。

「——しょ、っと。これぐらい、ですかね。もういいですよ」

持って帰る物をバッグに詰め、葵さんにそう言った。

すると葵さんはあきれ果てた顔しながら溜息をついた。

「あなたねえ……その格好で外、出歩く気?」

「え? ……あ!」

自分の格好を見ると、起きた時に来ていた服のままだった。つまりは患者用の服。

確かにこの格好で出歩くのは不味い。

道行く人に注目されるだろう。

ましてや家に帰って来た時にこんな格好をしていたら、妹にいらぬ心配をかけてしまう事になる。

「す、すいません。今すぐ着替えます」

「じゃあ私は部屋の外で待ってるから、着替えたら教えてね」

そして葵さんは部屋を出ていった。

あまり待たせるのも悪いし、さっさと着替えよう。

タンスを開け、中にあった服を適当に見繕い、それに着替え、そして部屋の外へ出た。

一分も掛からなかっただろう。

「着替え終わりました。待たせてすいません……」

「待つも何も、さっき部屋でたばかりなんだけど、気にしないでおくわ……。よし、じゃあ今度こそ家まで送ってあげるわ」

そしてまた移動を開始した。

未だ思い出せないたった一人の妹を想像しながら、僕はその後を付いていく。

## 第七話「いざ、我が家へ」

服を着替えて部屋を出た後、僕と葵さんはアモス本部を出て、近くの駐車場へと向かった。

そこで葵さんの白色の軽自動車に載せてもらった。

彼女曰く、「白い車は可愛いので好きだ」との事らしい。

そんな何の変哲もない普通の会話をしながら、車は僕の家まで出発した。

車が出発してから数分後、会話もなくなり、二人共無言になっていた。

別にこういう静かな空間が嫌いなわけでも、苦手なわけでもない。ただ折角ある時間を、無駄に過ごすというのは勿体無い気がする。特に今の僕の場合は……。

だからこそ、このまま黙って家に着くのを待つぐらいなら、今の間に聞きたい事を聞いてしまおうと思った。

「あの——」

「ねえ、才人？」

「はいっ!？」

「な、何!？ 急に大声だして……」

「あ、いや、何でも……ありません」

まさかこのタイミングで、葵さんの方から話しかけてくるとは思わ

なかったから、驚いただけだ。

「それで、今何言おうとしたんですか？」

「ああそうそう、そういえば家族には記憶喪失の事、説明するのかなあ？　って思っただけよ」

「それは……一応隠し通せるなら、隠し通してたいです。あんまり心配は掛けたくないですから」

「それはそれでいいけど、上手く隠し通せる自信、あるの？　漢族なんだし、いえ、家族だからこそ話して、頼ってもいいと思うわ」

「確かに、言う通りかもしれません……」

「だったら——」

「でもそういう訳にも、いかないんです」

「……どういう事？」

葵さんの言いたい事は分かるし、それも正論だと思う。でもそれはあくまで、普通の家庭ならば、という話だ。

僕の今の家族は、妹一人だけ。

逆に、妹の家族も僕一人だけだ。

そのたった一人しかない家族が自分の事を忘れたと知ったら、どう思うだろうか？

それは妹が本当の意味で『一人』になると言っても、過言じゃないだろう。

だからこそ僕は妹を『一人』にしない為にも、記憶喪失の事は話してはいけないと思う。

たとえば自分が、記憶のない偽りの『兄』だったとしても。

僕の考えを葵さんに話すと、少し何か言いたげな態度こそ取ったものの、最終的には納得してくれた。

「けどどうするの？　一緒に暮らすってなれば、隠し通すのは至難の業よ？」

「そう、ですよ……誰か一人ぐらい、協力してくれる人がいればいいんですけど……」

そこが問題だ。

協力してくれる人は、以前の僕とも、妹ともある程度親密な仲の方が良いだろう。

でもそんな人が都合よくいるわけがないのは百も承知だ。

「それはどうにかするしかないわね。また今度考えましょう」

そしてまた無言。

今度は何か聞いておこうという気にはなれなかった。

このまま家に着くのを待っていようと、そう思った。

それからまたしばらく時間が経ち、車が止まる。

「着いたわ。ここがあなたの家よ」

窓から覗くと、綺麗な一軒家があった。

妹と二人で住むには大きすぎる気がするし、大体そんな金があると

も思えない。

という事は元々は両親も住んでいたか、それでなければどこかの家庭に居候しているというのが妥当だろう。

「これが、僕の家……」

思わず声が出た。

何故かは分からない。

ただ記憶喪失で右も左も分からない状態で、混乱していた自分に、帰る場所があったという事実に少し泣きたくなっただのは確かだ。情けない話だけど、心のどこかでまだ怯えていたんだろう。

「じゃあ私はまだ用事もあるし、アモスに戻るわ。家にはここに来る前に電話しといたから、あなたが帰ってくる事は知ってるはずよ。かなり嬉しそうにしてたわ。記憶が戻った時に為に言っとくけど、これからはちゃんと家に帰りなさい！」

「何から何まですいません。多分ですけど、これからは記憶取り戻した後も家に帰ると思います。いえ、そうするようにします」

「それならよし！ 後、そういう時は『ありがとう』って言うものよ」

ウインクをしながら言う葵さんが、何故だか妙に可笑しくて、自然と笑顔が出てくる。

「はい、ありがとうございます」

車を出て、礼を言う。

葵さんはそれで納得したようで、車を走らせて行ってしまった。

車が見えなくなり、改めて自分の家を見る。

この家に妹がいる。

僕のたった一人の家族。

妹との思い出は全部忘れてしまったから、正直どう接すればいいのか分からない。

それでも出来る限り努力はする、悲しませないと決めたのだから。

「さて、じゃあ入るか」

別に誰かに聞かれたかったわけではない、けれど声に出す。

自分の考えていた事が少しくさいと感じて、これ以上考えないようになしようと思ったからだ。

妹を大切にしようとは思うけど、それを人前で堂々と言える程の勇氣はない。

照れ隠しで行った言葉だとしても、嘘ではない。

僕が玄関のドアノブに手を掛ける。

まだ、緊張しているな……。

そんな事を思いながら、僕はドアを開けた。  
そして言おう、家族に、たった一人の妹に。

「ただい——ゲフツ!？」

「やっと帰ってきたー!」

激しいタックルを食らった。

しかもみぞおちに、狙い澄ましたかの様に思いきり。

かなり痛い、足の小指をタンスの角にぶつけたぐらいに痛い。

感動の再開になるはずが、タックルを食らうという展開になるなんて、誰も予想していなかっただろう。

こんな脚本を書く奴がいるとすれば、そいつは相当そのキャラの事が嫌いなんだろう。

「おかえり、お兄ちゃん！ もう、全然家に帰って来ないから、心配したんだからね！？ あんまり心配掛けさせないで、ちゃんと帰って来なさい！！」

僕の事を『お兄ちゃん』と呼ぶ人物はかなりご立腹みたいだ。しかしいくら怒っていても、帰って来ていきなりタックルはかまさないでほしい。

例え罰にしても、重すぎる。

「ああ、ごめん、ごめん」

タックルがみぞおちに入った所為で、かなり痛い。

しかも軽い呼吸困難に陥ってしまって、声が出しづらい。

けれどとりあえず相槌は打っておく。

そうでなきゃこのまま追撃が来てもおかしくない。

僕にタックルをかましてくれた人物は、僕と同じ銀髪だ。

髪にはウェーブがかかっており、背中まで伸びている、

歳は十四、だけどその割には低い身長。

目はクルツとしていて、色は瑠璃色。

見る限り彼女はかなり可愛い部類に入るだろう。

それこそアイドルとかやっていてもおかしくないぐらいだ。

病院で葵さんから妹の事を聞いておいた。

彼女は葵さんが言っていた情報と一つも違わず、全く一緒の外見をしている。

という事は彼女が僕の妹で、名前は、

「ただいま——瑠璃」

「おかえり、お兄ちゃん！」

そう、このとても可愛らしい笑顔を見せてくれる彼女の名前は、白<sup>しろ</sup>銀<sup>がね</sup>瑠璃<sup>るり</sup>。

正真正銘僕の妹だ。

元々可愛い外見に、さらに可愛らしい笑顔。

僕の妹にするには勿体無い位の可愛さだ。

……今のは本当に可愛かったから、純粋にそう思っただけで、僕は決してシスコンじゃないぞ？ 本当だからな！？

「ん〜？」

瑠璃が訝しげに僕を見る。

僕は現在、体が痛いのと、瑠璃と身長差がある理由で俯いている状態だ。

となると瑠璃が僕の顔を見るには下から覗きこんで上目づかいで見る事になる。

その姿がなんとも可愛くて、抱きしめたくなくなってしまふ。

……僕はシスコンじゃない、はず……いや、待て？

もしかしたら僕はシスコンじゃなくてロリコンなのかもしれない。

そうか、僕はロリコンなのか！

……余計駄目じゃないか！！

「お、お兄ちゃん……？」

「え、な、何？」

あまりにも馬鹿げた事を考えていたのが、態度にも出ていたんだろうか。

瑠璃は若干引き気味の様子で僕に呼びかけてきた。

いけない、いけない、あんまり変な態度ばかり取っていたら、流石に怪しまれてしまう。

「えーと、どうかした？」

「お兄ちゃん、雰囲気とか何か前と変わったね、ちょっと別人みたい。向こうで何かあったの？」

「えっ！？ キ、キノセイダヨ！！」

「そう？」

「そう！ そうー！！」

まさか既に疑われていたとは……しかもこんな会ったばかりの時点で。

これは対策を考えておいた方がよさそうだ。

悩んでいる僕を余所に、瑠璃は部屋の奥へと入って行った。

「お姉ちゃん、お兄ちゃん帰って来たよー」

………はい？

今、瑠璃は確かにお姉ちゃんと言った。

でも、お姉ちゃんって誰だ？

履歴書にも、家族は瑠璃だけと書かれていたはずだし、葵さんにも僕に姉がいるなんて話は聞いていない。

「あれ？ いないのかな……お姉ちゃん？」

瑠璃は先程から『お姉ちゃん』とやらを探しているが、僕には誰の事なのか全く心当たりがない。

誰、って聞くわけにもいかないし、どうすれば……。

「っ！？」

突如、どこからか凄まじい気配を感じた。

「気配を感じ取れるのか？」と聞かれれば、答えは「YES」だ。  
おそらくだけど、以前の僕は気配を感じ取る事が出来て、それを体が覚えていたんだと思う。

だからと言って、あくまで体が覚えていただけだからか、ハッキリと感じ取る事は出来ない。

どこだ、どこにいる！？」

汗が頬を伝っていくのが分かる。

僕が感じ取った気配は、殺気という感じではなかった。

だが理由が何にせよ、僕は今狙われている。

自分の家だと思って少し気を抜きすぎたのかもしれない。

記憶を失っていつ、どこで気をつけなければいけないのかが分から

ない以上、常に気を付けておくべきだったかもしれない。

今更後悔しても仕方がない。

まずはこの気配の元がどこからなのか、ハッキリと感じ取るのが最優先だ。

落ち着いて気配を感じ取ろうとすれば、そこまで難しい事じゃないはず。

ゆっくりと目を閉じ、気配の元を感じ取る。

気配の場所は――

「そこだ！」

後ろへ振り向く。

正解だった。

明らかに後ろに誰がいる。

そして僕が後ろへと振りむいた次の瞬間、

「サーーーーーく~~~~~~~~ん」

「ぶっ!？」

誰かに顔面に何かを押しつけられ、思いきりその何かで締め付けられた。

視界が闇に染まる。

おそらく声からして女性だと思われる。

そしてこれは、多分、抱きしめられているんだと思う。

い、息が……。

女性はこれでもかと言う位に、強く抱きしめてきて、とてもじゃない

いがまともに呼吸できる状態ではなくなった。

さっきの瑠璃のタツクルといい、これといい、どうして続けて呼吸困難に陥らなきゃいけないんだ!!」

「寂しかったよ、サーくん。どうして今までお家に帰って来てくれなかったの? お姉ちゃん寂しかったよ」

「んー! んー!! (死ぬ! 死ぬから!!)」

女性は僕の状態に気付いていないんだろう。

僕が何を言っているか聞きもせず、更にきつく抱き、縛り付けてくる。

このままだとやばい。

とにかく抱きついていて人物を引き剥がそうと、手で押し返してみると、フニユと何か柔らかい物に僕の手が埋もれる。

「あん。もう、サーくんのエッチ。そんな事してると、女の子に嫌われちゃうぞ?」

「■ @〒! ￥ ● !! (意味分かんないって! ってか息が、息が!!)」

最早人語とも言えない声、声にすらならない悲鳴を上げる。

やばい——死ぬ……。

人は死にかけると、走馬灯を見ると言う。

しかし記憶を失くしたからか、僕には別段思い出す思い出はなかった。

た。

過去を振り返らず、今の天国へ一直線の状況を受け入れるしかない  
というのか、神様の馬鹿野郎。

「お姉ちゃん、何やってるの！？ お兄ちゃんが死んじゃうよ！？」

僕の意識が完全に遠のき、なくなりそうになったその直前、瑠璃が  
慌ててこちらに向かって来ているのが、感じ取れた。  
しかしもう間に合って、助かりそうにもなかった。

ごめん、瑠璃。

本当に、本当に短い間だったけど、楽しかった、よ……。

「あれ？ サークンどうしたの？ お顔真っ青だよ？」

「きゃあああああ！ お兄ちゃんが……！！」

その後、瑠璃が必死になりながら窒息死しかけた僕を助けてく  
れたのは、言うまでもない。

そして僕を殺しかけてくれた女性は、終始不思議そうに眺めていた  
だけだったらしい……。

## 第八話「『姉』と言う名の絶滅危惧種」

ふと気が付くと、僕は綺麗な花の園にいた。  
そこはとても心地よく、心が穏やかになる。  
どうして僕がこんな所にいるのか、そんな事はこの気持ちよさの中  
では、どうでもいいと感じてしまう。

近くに人の気配がする。

気配の方を向いてみると、そこには死んだはずの父さんと、母さん  
がいた。

「父さん、母さん、どうして……？」

「それはね才人、ここは天国なの。あなたが死んだから私達、また  
会えたのよ」

「なーんだ、そっか」

それなら納得だ。

そうかそうか、僕は死んじゃったのか……。

「つて、そんな事なつてたまるかあああああー！」

勢いよく起き上がる。

また天国に行ってしまったように。

起きてみると、今度は変わらず家にいた。

どうやら臨死体験をしただけだったらしい。

そもそも、親の顔なんて忘れているのだから、誰が父さんと母さん

なのか、見ただけで分かるわけがない。

「あ、お兄ちゃん！ よかった」

瑠璃は心底安心した様子で、こちらを見ていた。

あれからどれだけの時間が経ったのかは定かでないけれど、後少しでも瑠璃の救出が遅ければ、僕は確実に天国へ住み着いていただろう。

「ごめんね、サーくん。大丈夫だった？」

先程僕を絞め殺しかけた女性が、本当にすまなかったという顔で謝罪をしてくる。

どうやら本人に悪気があったわけではないようだ。

あっても困るのだけだ。

僕の事を『サーくん』と呼ぶこの女性は、黒く長い髪が、整った顔立ちによく似合い、典型的な和風美人という印象が持たれる。

年齢は、おそらく二十代前半かと思われるが、あまり詮索するのは止しておこう。

そして何よりも特徴的なのが、僕を絞め殺す凶器になりかけていた、例えるならメロン程の、大きな胸。

あんな大きな物で圧迫されたら、呼吸なんて出来なくなって当然だ。本来男ならそういう時喜ぶんだらうけど、流石に僕の命を奪いかけたものなので、素直に喜べない。むしろ怖い。

瑠璃はこの女性を『お姉ちゃん』と呼んだけれど、果たしてこの女性には本当に僕の『姉』なんだらうか。

「大丈夫、です。全然問題ないですから、気にしないで下さい」

本当は、全く大丈夫じゃないです、と言いたい気持ちを必死に抑える。

この人だって悪気があったわけじゃないのだから、責めるのは酷い話だ。

「嘔吐き、余所余所しくしてるじゃない！　ほんとごめん、つてば」

「じよ、冗談だよ、冗談。軽いジョーク！　本当に怒ってないよ」

「……ほんと？」

「ほんと、ほんと！　もうぜんぜん、怒ってないよ」

こんな子犬の様な目で、しかも涙ながらに見つめられたら、許すしかないじゃないか。

しかしまあ、何とか誤魔化す事が出来たけど、非常に危なかった。相手に対する口調とかにまで気を使わないといけないなんて、全く考えていなかった。

ここまで苦勞するようなら、いつそ「記憶喪失です」と明かしてしまいたいくらいだ。

「うわーん、サーくんありがとう！　ごめんね」

「んぐっ！？」

感激のあまりか、姉は再び抱き締めてくる。

すると僕はまた、呼吸が出来なくなるわけで……。

「お姉ちゃん！ だからお兄ちゃんが死んじゃうってば……！」

「あつ、ごめーん」

「ぜえ、ぜえ……はあ」

瑠璃の言葉でまた助けられた。

この人、本当はこっそり僕を殺そうとしているんじゃないか……？

この人が一体何者か分からない所為で、迂闊な行動は出来ない。  
せめて名前だけでも知れたら、どうにかなりそうなものの、その方法も思いつかない。

瑠璃に聞くのは不味いし、本人に聞くわけにもいかない……ん？

「あつ！」

「え、何、お兄ちゃん？」

「え？ あ、いや、ゴメン何でもない」

思わず声に出て焦る。

でももしかしたら良い事に気付いたかもしれない。

それこそ声に出てしまうくらいに。

今までの様子から考えるに、この女性は以前の僕とも、それに瑠璃とも親密な仲に違いない。

これはつまり、先程葵さんと話していた時に言った『協力してくれ

る人』の条件にぴったりじゃないか。

それに僕はこの人の事は綺麗サッパリ忘れている。周りから聞く事が出来ない以上、やはり本人に聞くしか方法が見つからない。

そう決定するが早く、早速行動に移った。

「あの、姉……さん？　ちょっと二人きりで話したい事があるんだけど……」

以前にどう接していたのか分からないから、一文字一文字、慎重になって話す必要がある。さつさと話してしまえば楽なんだろうけど、瑠璃がいるこの状況では、言う事が出来ない。

「いいよ、何？」

「あ、じゃあ私は席外すね」

「うん、ありがとう」

わざわざ気を使ってくたんだろう。本当にありがたい。

「姉さん……」

類がリビングから出ていくのを確認し、話し始める。

「姉さんに、話しておきたい事があるんだ」

そうして僕は記憶喪失になった事、それを瑠璃には知られたくないという事、そしてそれに協力してくれる人を必要としている事、包み隠さず全て話した。

自分に説明出来る事は全て。

姉さんは最初僕が記憶喪失になったと聞いた時、驚き、悲しみ、そしてほんの少し、泣いていた。

どんな理由があつたにせよ、泣かしてしまった自分が許せなかった。自分には慰める資格すらない。

「ごめん……」

何に謝っているのかも分からない。

泣かせてしまった事が、記憶喪失になってしまった事が、それともただ謝る事で、罪の意識から逃げたかっただけなのか。

今無性に自分を殴りたい、

でもそれをしてしまうと、姉さんにまた心配をかけてしまいそうで、出来なかった。

「うっん、いいの。一番辛いのはサーくんだもんね」

「僕は――」

自分が記憶喪失になった事よりも、それによって姉さんを悲しませた事の方が辛い、と言いたかった、

けれどそんな事を言って、何になるのか。

言っても無駄だ。

「気にしててもしかたないもんね。じゃあ私、サーくんに協力する

から、サーさんの記憶が戻るまでずっと！　よし、『瑠璃ちゃんを悲しませない作戦』がんばろー！！」

「……うん！」

その通りだ、確かにくよくよしていても何も変わらない。  
今は僕に出来る事を精一杯やればいい。

「じゃあ、まず自己紹介からするね。私の名前は天壤てんじょう 優衣ゆうい。サーくんや瑠璃ちゃんとは幼馴染で、小さい頃からよく遊んでたの。だから『お姉ちゃん』って呼ばれてるんだよ」

成程、それなら納得だ。

従兄弟や近所の年上の人を、『兄』や『姉』と呼ぶ事は、そこまで珍しいわけじゃない。

「えっと——じゃあ、姉さん、って呼べばいいのかな……？」

さつき瑠璃の前で『姉さん』と呼んだ時には特に怪しまれてはいなかった。

とすると多分以前もそう呼んでいたんだと思う。

「うーん、私は『お姉ちゃん』って呼ばれたんだけどな？　ねえ、『お姉ちゃん』って言うてよ」

「え！？　流石にそれは……」

照れくさいと言うか、何と言うか……ともかく言うのには抵抗がある。

「むゝ、ケチゝ」

……この人は本当に年上か？

先程からずっと思っていた事ではあるけど、態度や仕草が、自分よりも年上だとは到底思えない。

これなら瑠璃が年上の方がまだ納得出来るくらいだ。

「姉さん、嫌なら答えなくてもいいんだけど、姉さんっていくつ？」

「私？ 私はねゝ、今年で二十二歳だよゝ」

「……」

「ああ！！ サークン、今私の事バカにしたでしょゝ！？」

「イヤ、ソナコトナイヨ？」

「嘘！ 棒読みになつてるもん！！」

姉さんはまるで、幼い子供のように拗ねる。

姉さんはもしかして生まれてくるのが早すぎたんじゃないか？

……いや、もう考えるのはよそう。

姉さんがきつとこういう人なんだ、それで納得しよう。

「そ、それに急に呼び方変わったりしたら、瑠璃の変に思うしさ。だから以前と同じ呼び方にしないと！」

我ながらよくこんなに言葉がすらすらと出てくるもんだな。

「ちえゝ、いいもん！ いつか『姉さん』じゃなくて『お姉ちゃん』」

って呼びたくなるような人になるもん!!」

それが一体どんな人なのか、かなり聞きたい衝動に駆られたけど、やめておこう。

多分答えられなくて、泣かれる。

そしてそこに瑠璃が来て僕が怒られる羽目になるだろうから。

「ねえ、サーくん。記憶喪失の事は瑠璃ちゃんには内緒にするって言ってたけど、どうして？」

「瑠璃を悲しませたくないから、かな。大丈夫、記憶が戻った時にはちゃんと話すよ」

「ンフフ、やっぱりサーくんは優しいね」

「いい子、いい子」と姉さんは僕の頭を撫でる。

正直かなり気恥ずかしいのだが、撫でられて嫌な気分がするわけではないから、おとなしく撫でられたままにしておく。

「そつえば姉さん。一つ聞きたいんだけど……」

「ん、なに？」

「僕が帰って来た時、姉さん隠れてたよね？ 何で？」

あの時、気配は感じられたものの、姿は簡単に見つける事が出来なかった。

意図的に隠れていたりしない限り、あまりあり得ない事だ。

「あああれね、サーくんをビックリさせようと思ったの。さぶら

いずってやつ？」

「そ、そうか、サプライズか、それならいいや……」

そんな人を殺しかけるサプライズ、初めて聞いたよ……。

「あ、もうこんな時間！ ゴメンね、サーくん。もつと話たいんだけど、そろそろ夕飯の支度しなくちゃいけないの」

窓から外を見ると、確かに薄暗くなっている。

僕が最後に時計を見た時は正午だった。

あれからもうこんなに時間が経っていたのか、全く気が付かなかったな。

「支度するのはいいけど、姉さん料理出来るの？」

とてもじゃないが、家事や仕事をそつなくこなすイメージではない。むしとドジを踏みまくって失敗しそうなイメージだ。

「フフ、サーくんってば信じてないね？ 私はお姉さんなんだから、家事くらい出来て当然なんだよ？」

姉さんは自信満々だと言う風に胸を張る。

姉である事と家事が出来る事は全く関係ないというのは、言わないであげた方がいいだろう。

本当に出来るかどうかはかなり疑わしいけれど、胸を張る姿は葵さんよりもよっぽど様に――、

ナニカイッタカシラ？

「ひっ!？」

い、今幻聴が!？

……もしかして、幻聴じゃない……のか？

「サーくん!？ どうしたの？ お顔真っ青だけど、大丈夫？」

「な、なんでもないよ。それよりさつさと支度した方がいいんじゃないかな？」

「うん、じゃあ準備してくるね。サーくんは瑠璃ちゃん呼んできて」

「了解……」

そうして姉さんはキッチンまで向かった。  
心配な事も多いけど、任せる事にしよう。

しかし何故だろう、ただ普通に会話をしていただけなのに、死にかけた気がする。

でも気にしちやいけない気もする。

ともかく今の事は忘れよう、そうしよう。

「あ、姉さん」

リビングへと向かって行った姉さん呼び止める。

「瑠璃の部屋って、どこ？」

家の構造も忘れていたのだから、瑠璃の部屋が分かるわけがなかった。

「瑠璃ちゃんの部屋なら、階段を上がって、一番近くの部屋だよ」

「うん、わかった。ありがとう」

姉さんに部屋の位置を聞き、二階へ上がる。

二階へ上がり、辺りを見回す。

部屋は見渡す限り四つ。

僕と瑠璃の部屋が別々なら、この四つの部屋は両親と僕と瑠璃、それぞれの部屋という事だろう。

姉さんに聞いた通り、迷わず一番近くの部屋へ向かい、扉の前で立ち止まる。

そして一度深呼吸をし、コンコンコン、とノックをする。

『はい？』

瑠璃の可愛らしい声がする。

部屋の中で一体何をしているのか、気になるが勝手に入るわけにもいけないので、我慢する。

『何？』

「ああ、ごめん。姉さんがそろそろ夕飯だから呼んできてって」

と、姉さんからの伝言を出来るだけ、簡潔に言う。

下手な事を言って、ボロを出してしまいたくないからだ。

『うん、わかったー。ちょっと待ってて』

言われた通り少しの間待っていると、瑠璃は直ぐ部屋から出てきた。

「お待たせ、ちょっとやっておきたかった事があって……」

「それはいいけど、何かしていたの？」

「うん、ちょっと学校の予習や復習をね」

「へえ、偉いね」

ただでさえ可愛いのに、その上真面目だなんて、まさしく非の打ちどころが無い。

シスコンだとか関係なく、皆が皆、良い子だって思うだろう。

だから僕は断じてシスコンなんかじゃない、ロリコンでもない！

「あゝあ、私のお兄ちゃんみたいに頭よかったらなあ……」

「え、僕そんなに頭いいかな？」

「小学校はともかく、中学校もずっと学年一位だったのに、それで頭よくなかったら他の人達はどうなのよ……」

「あー、うん、そうだね……」

そんな事を言われても、忘れてるんだから仕様がなない。

こつこつ事も姉さんに聞いておかないと、このままじゃいつ気付か

れるか不安だ……。

「じゃあ行こっか、お姉ちゃんドジだからまた失敗してそうだし」

「うん、そうだね」

やっぱりドジだったのか。

まさか予想通りだとは思っていなかった。  
心配だ、任せなければよかった。

瑠璃と一緒にリビングへ行く。

そこには姉さんがドジを踏んで起こした惨状が……なかった。  
別段困った様子もなく、姉さんは落ち着いて料理をしていた。  
どうやら心配するだけ損だったみたいだ。

「あ、サーくん、瑠璃ちゃん。もうすぐ出来るから食器とか出して  
準備しといてね」

「う、うん、お姉ちゃん今日の夕飯、何？」

「聞いて驚け、何と、オムライスなのだ！」

どこに驚く要素があるのか。

しかしオムライスか、オムライスなら確かに失敗する事もあまりないだろうし、安心だ。

「お姉ちゃん失敗しなかったんだ、珍しい……」

ボソッと姉さんには聞こえないように、瑠璃が呟いた。  
瑠璃、いくらなんでもそれは酷いと思うぞ。

僕も多少心配はしていたけど、珍しい、って言われる程ドジする人なんて、そうそう――

「あゝ！？ ご飯炊くの忘れちゃったゝ！」

どうやらいたらしい。

いや待て、ドジの踏み方があまりにベタ過ぎて狙っているとは思えない。

それ以前に何で先にオムレツの方を作っているのが謎すぎる。普通チキンライスからだろう。

もしかすると、姉さんのドジや性格は実は演技で、本当は凄く賢い――

「お米買つのも忘れちゃったゝ！！」

人かとも思っただが、そんな事はなかった。

「あゝん、オムレツも焦げちゃったゝ！」

「……」

最早僕だけでなく、瑠璃も呆れている。

ただ、姉さんについて一つ分かった。

姉さんは一つドジをすると、連鎖反応の様に続けてドジを踏む。

つまり最初は大きく酷くないドジも、最終的にはかなり酷くなるという事だ。

……絶滅危惧種認定されてしまいそうな人だな。

## 第九話「弱点は女性」

色々大変な事にはなったものの、どうにか夕食にありつく事が出来た。

夕食を食べ終わり、しばらく休憩した後、僕は自分の部屋へと向かった。

部屋の中を調べて、出来る限り自分について知るためだ。

部屋の位置については、休憩している間に姉さんから聞いておいた。流石に記憶を取り戻す手掛かりがあるとは思えないけど、自分について少しでも知れるのならそれで十分だ。

階段を上がり、部屋の中へと入る。

僕の部屋は洋風の部屋で、広さは大体畳八畳分くらいだった。

一人で使う部屋としては十分すぎる広さだ。

部屋は 全体的に片付けられていて、埃が全く見当たらない。

以前の僕はずっとアモスの方で過ごしていたのだから、家に帰っているはずがない。

それなのにこれだけ綺麗に掃除されているという事は、瑠璃か姉さんが、小まめに掃除してくれたんだろう。

部屋の中はタンスやテレビ、机に本棚など、極々普通の物ばかりで、他には何もなかった。

アモスでもそうだったが、僕に趣味とかはなかったんだろうか？

ただアモスの時とは違い、意外と物寂しくは感じなかった。

あそこは僕が『過ごしている』場所だが、ここは僕が『住んでいる』場所だからだろう。

「さて、と。じゃあ始めるとしますか」

そう考えると、不思議とやる気が出てきた。

結構単純というか分かりやすいというか、自分でも少し呆れる。

それでも嫌な気は全くしないわけで、むしろ嬉しく思う。

そうして気分が高調になったところで、僕は部屋の探索を開始した。

優衣

「うー、また失敗しちゃった……」

夕食が終わり、サーくん和瑠璃ちゃんがリビングから出ていった後、私はソファに崩れる様に寝転がり、落ち込んだ。

夕食の準備で、またドジを踏んでしまったからだ。

お米の準備を忘れたりする人なんて、そうそういない。

しかもこういった失敗がよくあるとなれば、尚更落ち込んでしまう。二人共何も言ってこなかったけど、確実に呆れていた。

あゝあ、何でこんなに失敗しちゃうのかな……？

こんなじゃ「白銀一家のお姉ちゃんです！」って胸張れないよお……。

白銀兄妹は幼い頃に両親を亡くしている。

他に身内も居ず、二人は路頭に迷っていた。

だから私が彼らの保護者になって、せめて、せめて成人するまでは私が守っていかう、とそう考えている。

そのはずなんだけど、

「は、もう私がいなくてもいいのかな……？」

あまりに落ち込んでいたのか、つい声に出してしまった。

とは言っても、二人共今頃自分の部屋に戻っているはずだから、聞かれる心配はないはずだ。

それにサーくんに至っては、聞いたところでどういう意味か理解出来ないだろう。

記憶喪失で忘れている上に、教えてもないのだから。

サーくんから記憶喪失の話を聞かされた時は、目の前が真っ暗になつて、そのまま気を失つてしまひそうになった。

自分の事を忘れられた事も十分に悲しかった。

でもそれ以上に、サーくんが今まで過ごしてきた思い出すら、全部忘れてしまったのが一番可哀想で、悲しくて仕方がなかった。

「一番辛いのは、サーくんの方だよね」と言った時、サーくんは何て言いかけたのか。

別に辛くないよ？

僕よりも姉さんの方が辛い？

分からない、分からないけど、きっと自分の事よりも、私や瑠璃ちゃんの事を考えていたに違いない。

サーくんは優しいから。

それに比べて、私はドジばかり踏んで、二人を守るところか逆に困らせている。

サーくんとは大違いだ。

そう思うとまた、「はあ」と溜息をついてしまう。

本当に今日は落ち込んでばかりだ。

サーくんの記憶喪失でまだ動揺しているからかもしれない。

こんな事になるなら、サーくんがアモスに入るのを反対しておけば、良かったかもしれない。

そもそも、私は元からサーくんがアモスに入る事に対して、あまり乗り気ではなかった。

サーくんには普通に高校に入って、普通に大学に進学して、そして普通に就職してほしかった。

勿論これはあくまで、私個人の意見であって、どうするかを決めるのはサーくん自身だから、何も言えなかったのだけど。

でももしちゃんと反対していれば、そうすればサーくんはアモスに入るのをやめて、記憶喪失にならずに済んだかもしれないのに。

入らないとまではいなくても、傍にいて守ってあげればよかった。

後悔しても、し足りない。

こういう時サーくんなら「姉さんの所為じゃないよ」と言ってくれるんだろう。

でも、私は……。

激しい眠気が私を襲い、少しずつ意識が遠のいていく。

ガチャとお風呂場の方で音が鳴る。

瑠璃ちゃんかサーくんがお風呂に入ったのかな？

そんな事を考えながら私は目を瞑る、そしてそのまま深い眠りにつく——筈だった。

才人

「はあ〜」

深い溜息をつき、僕は椅子に座る。

たった今ようやく部屋の探索、もとい結果的に掃除になってしまった作業を、一通り終え、休憩する。

探索し始めたばかりの時は、これは何だろう、じゃあこれは何だ、といった具合に物を一つ一つ確かめていた。

だけど何となく、手掛かりになりそうな物はないと察した辺りから、部屋の探索から掃除へと作業が移っていた。

で、結果として、何も成果は得られなかったわけだ。

「はあ……風呂でも入って、スッキリするかな……」

今度は軽い溜息をつき、風呂場まで向かう。

今日は本当に疲れた。

こんなに内容の濃い一日なんて、普通ないんじゃないか？

こんなに疲れた日は、風呂に入ってゆっくりして、そして布団でグッスリ寝るのが一番だ！

「よし、じゃあ入るか——」

「え！？ お兄ちゃん、まっ——！」

風呂場だと思わしき場所のドアを開ける。

そこは予想通り風呂場だった。

そして誰もいない風呂で、一人ゆっくりと湯船に浸かり、鼻歌でも

歌う予定だった。

だがそこには瑠璃が居た。

いや、居る事自体は別にいい。

僕はまだ服を着ている。

ただ瑠璃が、下着だけという、大抵の女性なら恥じらうのであろう姿だった。

一糸まとわぬ姿ではなかっただけ、まだマシとも言えそうだが、下着だけでも十分問題だった。

「……」

「……」

僕も瑠璃も、何も言わず固まっている。

そりゃあそうだろう、こんな状況を全く予想していなかったのだから。

「——っ」

この静寂が、まだしばらく続くかと思われたその瞬間、

「き、きゃあああああああああああああああ——！」

それは瑠璃の叫び声によってかき消された。

瑠璃

私は叫んだ。

それはもうこれでもかと言っぐらいに思い切り。

叫び声は近所の家まで、響き渡っていると思う。  
意識して叫んだのではなく、反射的によるものだった。

もしかしたらお姉ちゃんが来てしまつかもしれない。  
でも今は、出来れば来ないでほしい。

今の状況を見られると、私はともかく、お兄ちゃんが不味い。

お兄ちゃんの性格からして、偶然こうなってしまった事は分かる。  
それは分かるけど、やっぱり私は恥ずかしいし、お兄ちゃんの事を  
知らない人が見たら、間違いなくお兄ちゃんを変態呼ばわりするだ  
ろう。

それだけは避けなければならない。  
折角久々に会えたというのに、こんな事になるなんて本当に困った。  
しばらく家には私とお姉ちゃんしかいなかったから、油断していた  
のかもしれない。

突然の事態に困惑している私。

一方お兄ちゃんはと言うと、私と顔を合わせた時から、ずっと立つ  
たまま硬直している。

お兄ちゃんは女性とどう接すればいいかよく分からないらしく、あ  
る程度仲の良い女性じゃないと上手く話せないらしい。

「はっ！？ あ、あれ……？」

兄はようやく我に返ったみたいで、まだ下着姿のままの私を、改め  
て見直す。

そして――物凄い量の鼻血を噴き出し、倒れた。

「きゃあああああああああああああ！？」

再び叫ぶ、しかしさつきとは別の理由で。

お兄ちゃんが女性に苦手意識を持っていたのは知っていたし、ある程度の理解もあった。

それでも、流石にここまで酷いとは思っていなかった。

そ、そういえばお兄ちゃんの部屋を掃除した時も、裸の女性に移ってる本とか、全くなかった……。

お兄ちゃんが家に帰って来なくなってから、部屋の掃除は主に私がしていた。

その時にお兄ちゃんの部屋を散々漁っても、それらしき物は出てこなかった。

あの時はしばらく家に帰らないから、見つからないように処分したんじゃないかと、疑っていたけど、元から持っていなかったのだと、今ようやく確信が持てた。

お兄ちゃんの鼻血がようやく止まった。

気付けばお兄ちゃんは既に気絶している。

風呂場全体が血の紅に染まっている。

ここで何か火曜サスペンスみたいな惨劇があったんじゃないかなと思わされてしまう。

私の下着や、脱いで畳んでおいた服も、血で染まっており、簡単には落ちそうにない。

はあ、これお気に入りだったのに……。

「瑠璃ちゃんどうしたの!? こ、これは一体何!?」

落ち込んでいるところに、リビングの方からお姉ちゃんが慌ててや

つて来た。

髪がよれよれで、顔も寝ぼけ眼になっている。

さっきまで寝ていたのかな？

お姉ちゃんはこの状況を見て、私かお兄ちゃんが怪我をしたと思ったのか、激しく困惑している。

「な、なんでもないよ、お姉ちゃん。ちょっとお兄ちゃんが……」

お兄ちゃんが……何て言ったらいいだろう？

兄が妹の下着姿を見て鼻血を噴き出しましたとも言えいいのか、それだとどう考えてもただの変態だ。

上手く言葉が出てこず、黙っているしかなかった。

お姉ちゃんは心配そうに私とお兄ちゃんを交互に見ている。

この状況は、流石にお姉ちゃんでもどうしたらいいか、皆目見当がつかないようで、アタフタとしているだけだった。

「とりあえず、お兄ちゃんをソファまで運ぼう。その後こ二人で掃除しよう」

「そ、そうね。とりあえずサーくんをソファまで運んで、その後ここを掃除しましょう」

お姉ちゃんが私の言った事を、そのまま復唱する。  
誰が見ても混乱しているのが分かる。

しかもちよつと口調、変になってるし……。

その後私とお姉ちゃんは、先程言った事をそのまま実行した。  
風呂場は酷い有様で、お風呂になどとても入れそうにはなかった。

今日の惨劇は、そのまま夢に出てきそうぞ、今日は少し眠りたくなかった。

## 第十話「彼女との出会い」

「ん——」

眩しい、眼が覚め、最初に感じたのはそれだった。

そしてそれは、窓から差し込んできた朝日が原因だと、直ぐに把握した。

「まぶしっ——」

率直な感想を吐きながら起き上がる。

自分の寝ていた場所を見ると、どうやら僕はリビングのソファで寝ていたらしい。

けれど、何故なのか思い出せない。

「うーん、何だったかな？ 何かあった気がするんだけど……」

口に出しながら考えてみるが、結局思い出す事は出来なかった。

「あ、起きた？ お兄ちゃん、おはよ」

「ん？ ああ、おはよう……」

「朝ご飯どうする？ パン、それともご飯？」

「あゝ、パンでお願い」

「うん、分かった。じゃあ出来るまで待ってて」

「ん、了解……」

寝起きの所為か上手く喋れなかったが、伝わったみたいなのでよしとしよう。

壁に掛けられている時計に目を移す。

現在、時計の針は七時三十分を指している。

早いとも遅いとも言えない時間帯、ただ二度寝はしないでおう。

とりあえず顔を洗い、目を覚まそうと思い、ソファから立ち上がって洗面台まで向かう。

「ふあ、ふあーぶん、ふおふああふおー（あ、サーくん。おはよー）」

「うん、おはよう。でも別に磨き終わってからでいいよ」

洗面台に向かうと、姉さんが歯を磨いていた。

姉さんは僕と瑠璃の世話をする為に、この家で一緒に生活してくれている。

姉さんの話だと、姉さんの両親は仕事が忙しくて、ほとんど家に帰ってこないらしい。

だから姉さんの家には普段誰もいないわけで、ここで過ごしているのも大丈夫みたいだ。

それでも一応、偶には家に帰っているらしいけど。

「姉さん、顔洗いたいから洗面台借りていい？」

「ふおうふおー（どうぞー）」

姉さんに許可を貰い、顔を洗う。  
それと同時に姉さんも歯を磨き終わったらしく、今度は口を濯いでいる。

「そうだ、姉さん。実は昨日の記憶が曖昧なんだけどさ、どうして僕ソファで寝てたのか、分かる？」

「えっ、——ゲホッゲホッ!!」

「ちょ、姉さん大丈夫!？」

「ぼ、僕今何か不味い事言ったか？  
突然むせるなんて、予想してないぞ。」

「うん——大丈夫、大丈夫。もうまんだいだよ」

「そ、そう？　ならいいんだけどさ……それで、何で寝てたのか分かる？」

「いや、お姉ちゃん分かんないな……」

「そう、本当何で寝てたんだろう……」

そう言いながらリビングへ戻る。

「昨日の事、覚えてないんだ……瑠璃ちゃんの為にも黙っておいた方がいいよね……」

僕の後ろで姉さんが何か呟いていたが、僕にはそれを聞き取る事は出来なかった。

「ご馳走様でした」

瑠璃の作った朝食を美味しく頂き、そう言った。  
昨日食べた姉さんの料理と言い、今の瑠璃の料理といい、二人共料理は上手いみたいだ。

僕はどうかろう？

簡単な料理なら出来そうだ。

料理が出来るに越した事はないし、今度してみよう。

「ご馳走様、と。じゃあそろそろ時間だし、行ってきまーす」

と、少し急ぎながら瑠璃は家を出ていく。

こんな朝早くから、一体どこに出掛けるのだろうか。

「はい、いつてらっしや〜い」

「姉さん、瑠璃はこんな朝早くからどこに？」

「中学校だよ」

「あ……」

学校、言われてハッとなる。

確かに今よくよく思い返すと、瑠璃は制服を着ていた。  
馬鹿だる僕……。

「あれ？　と言う事は今日平日？」

「うん、そつだよ。どうかしたの？」

「平日なら、僕も出掛けようかと思ってさ」

「えゝ、折角サーくん家に帰ってきたから、いっぱいお話しようと思つたのにゝ。どこ行くのゝ？」

「とりあえずまたアモスに行こうと思つて、まだ知りたい事もあるしね」

平日には大抵の人が働いている。

なら葵さんもきつとアモスにいるだろう。

行動は早い方がいい、折角だし今日にでも魔法の使い方等を教えてもらおう。

わざわざ休日と呼んで教えてもらうのも気が引けるし。

「昼食は財布の中に金がいくつか入ってたから、自分でなんとかするよ」

自分の財布をパンパンと軽く叩きながら言う。

そして僕は出掛ける準備をする。

財布は勿論、魔具であるグロウシェイドや、他に必要な物を一通り持つ。

「よし、大体こんなものかな。これからちゃんと家に帰ってくるつもりだし、話すのはまた今度しようか」

「そう？　ならいいかな、いつてらっしやゝい。気をつけてねゝ」

「うん、行つてきます」

姉さんにそう言い、家を出る。

本当に魔法がまた使えるのか、アモスで働いていけるのか。  
一抹の不安が残りながらも、僕はアモスへと向かった。

「…………迷った…………」

人々が大勢行き交う道の中、僕は一人そう呟いた。

僕が家を出た時、腕時計は八時ピッタリを指していた。  
しかし今は十時を指している。  
つまりあれから二時間ほど経った現在、僕は道に迷っていた。

葵さんに車で送ってもらっていた時に、中から道を見て、ある程度  
覚えたし多分大丈夫だろうと思ってしまったのが、失敗だったみた  
いだ。

あまり近辺の建物に詳しくないから、どれがどれだか分からなくな  
ってしまった。

こういう時、大抵は交番に行つて、道を聞くのが普通で、妥当な判  
断だろう。

だけど、アモスは警察署としての役割もはたしてある。  
その近くに交番があるとも考えにくい。

仮にあっても、交番の場所すら分からないのでどうしようもない。

本当にしまった。

こんなことならせめて地図を見るくらいはしておけばよかったと思  
う。

誰かに道を聞こうか、と悩みながら辺りをうろつく。

その辺の人に聞いてもいいのだけど、「記憶喪失で場所が分かりません」なんていきなり言われても困るだろう。

気が付くと現在時刻はおよそ十時二〇分。

あれから更に二〇分もたってしまったらしい。

というかこのままじゃ下手すると家にも帰れないんじゃないか？

このまま悩み続けても埒が明かない。

誰でもいいから聞こうと決心し、誰がいいかと思渡していると、ふと何やら小さな人混みを見つけた。どうやら何か揉めているらしい。

「あの、どうかしたんですか？」

人混みへ近づき、直ぐ近くの二つか三つほど年上であろう青年に、事情を聞いてみる。単なる好奇心だ。

「ん？ ああ、ヤクザがチンピラが分かんないけど、オジサンに因縁付けてるんだ」

「ヤクザ、ですか……」

そんなのは恭介さんだけで十分だ。

小さな人混みを軽やかき分けて、原因となっている人物達を見つけた。

因縁をつけているらしいのは二人組で、片やスキンヘッド、片やオールバックと、あまりにも分かりやすすぎるチンピラだった。

逆に因縁をつけられているらしい人物は、小太りな体型に白髪、そして眼鏡、とチンピラにとっては恰好の獲物になりそうな見た目だった。

「一体どうしてくれんじゃ、ワレエ!？」

スキンヘッドの男が、台本でも用意しているのかと思うぐらいベタなセリフを吐き、小太りな男性を威嚇している。

「いえ、本当にスイマセン、スイマセン!」

ただひたすらに謝る小太りな男性。

あまりにも情けない姿かもしれないが、相手が相手だけに誰も非難等出来ないだろう。

チンピラの方はそのあまりに情けない姿が癪に障ったのか、益々声を荒げて怒鳴りつける。

流石に不味いな、このままだと暴力に発展しかねない。

いい加減止めに入るべきかと思い、足を進める。

が、僕よりも先に、別の人物が先に割って入って行った。

そこには、この状況にはあまりにも似つかわしくない、美少女がいた。

完璧に作り上げられたかのような、白く透き通った肌、闇に晒せば、何よりも美しく光り輝いてしまいそうな金色の髪、そしてそれらに勝るとも劣らない、整った顔立ち。

瑠璃以上の美少女だった。

自分と同じ年くらいかと思ったが、そのあまりの美しさに、もっと年上かとも思われる。

最初は割って入られた事に、チンピラ二人共癪癪を立てたが、少女の顔を見るなり、下種な笑みを浮かべる。

「おう、嬢ちゃん、何か用かい？」

小太りな男性の時とは大きく態度を変え、今度はオールバックの男が、あくまで表面上は紳士的に話しかける。

「いい加減飽きたんじゃないの？ そろそろ見逃してあげたら？」

一方少女は、チンピラ如きに物怖じする様子もなく、冷静だ。

「おいおい、先にそのおっさんがぶつかってきて、俺のスーツ汚してくれたんだぜ？ クリーニング代は払って貰って当然だろ？」

するとオールバックはほら、と何かの液体で汚れた自分の来ているスーツを見せてきた。

男の片手には缶ビールがある。

おそらくあれを飲みながら歩いている時に、ぶつかって零したんだろう。

もしそうなのだとしたら、確かに小太りな男性にも責任はあるが、ハッキリ言って自業自得だ。

「だからクリーニング代は払います、って言ってるじゃないですか……！」

小太りな男性は涙目になりながら訴える。

「ああ？ じゃあしめて十万円、払ってくれるのかい？」

「何で、そんなに……」

そんなにも払えないと、言葉にせずとも態度で分かる。確かに、数千円程度ならば、まだ納得もいくだろう。

でもクリーニングをするだけでそんなにも金を必要とするわけがない。

「あなた達の言っている額は明らかにおかしいわ。どう考えても高すぎよ」

「別に高くはねえだろ、十万円くれたら、それで綺麗サッパリ忘れてやるって言ってるんだぜ、なあ？」

と、オールバックは、隣のスキンヘッドに同意を求める。

「ああ、それとも何か？ 嬢ちゃんが代わりに体で払ってくれるってのかい？ だったら大歓迎だぜ」

「あなたみたいなハゲ男なんかお断りよ」

「なんだと、テメエ！？」

ハゲという単語にスキンヘッドは激しく反応する。

言われたくないのなら、そもそもスキンヘッドにしなければいいのでは、と思うが、そんな事を言っても無駄だろう。

というかあれぐらいの挑発で簡単に怒るか、普通？

ただ心配な事があるとすれば、少女の方だ。

何か理由があって挑発したんだと思いたい。

何の作戦もなくただ挑発しただけなら、少女が危険だ。

嫌な予感ハ的中しスキンヘッドが少女に掴みかかるうとする。

「あの、待ってください！」

流石にこれ以上、黙って見ているわけにはいかない。

僕はスキンヘッドを呼びとめ、少女の前に立つ。

するとスキンヘッドは、また割って入られた事が気に喰わないのか、僕の話の聞こえもせず、拳を振るう。

「うわっ!？」

寸前のところで体を左に動かす事で避ける事が出来た。

ただそれで安心する事は出来ず、スキンヘッドは続けざまに拳を振るってくる。

「いやっ、ちよつと、タンマ!!」

制止の声を呼び掛けてみるも、当然受け入れてはもらえなかった。右に、左にと、素早く体を動かす事でどうにか避ける事が出来る。

男の拳は、格闘技でもやっていたのか、無駄な動きが少なく、速い。ただそれを僕は全て見切る事が出来ている。

これもやはり体が覚えていたんだろう。

「危ないっ！」

少女の声がし、後ろを振り返ると、オールバックがどこから持ってきたのか、鉄パイプを持って殴りかかってきた。

これは避けられない。

そう判断するが速く、僕の右手は鉄パイプを受け止めていた。

「っ……！」

だが衝撃を完全には消せていらず、右手から激しい激痛が走る。右手が痺れて上手く動かせない。

「オラッ！ これで終わりだ……！」

チャンスと見たのか、スキンヘッドが大きく拳を振り上げ、明らかに今までよりも強く振るってくる。

「ヤバッ……！」

激しい痛みを覚悟し、目を瞑る。

だがそれと同時に、意図せず無我夢中で振るった僕の拳が、スキンヘッドの顎に直撃する。

「ぐおっ……！」

スキンヘッドは呻き声を上げ、地面に倒れ、そしてそのまま気絶した。

「あ、あれ……？」

「なっ！？ テメエ……！」

予想外の事態にオールバックは驚きながらも、再び鉄パイプを振り上げる。

だがその隙は大きかった。

僕は素早く男の足をすくう様に蹴り、転ばせる。

「うおっ!？」

オールバックは仰向けの形で、地面に倒れる。

「こ、の野郎……」

頭を手で押さえながら、オールバックは立ち上がる。そしてこのまま仕掛けて来るかと思われた、その時、

「こら、君達！ 何をしている!？」

少し離れた場所から、警官の姿が見えた。

いい加減誰かが呼んできてくれたんだろうか。

「や、やつべ!？」

オールバックは気絶しているスキンヘッドを担ぎ、そのままそそくさと逃げて行った。

「ふう、行っただか……」

安堵の息を吐き、呟く。

そしてそのまま地面に座り込もうと思ったが、突如何者かに右手を引っ張られる。

「いたたたたた！？」

未だジンジンと痺れている右手は、引っ張られる事で更に激しい痛みを訴える。

「何してるの！ 私達もさっさと逃げるわよ！！」

引っ張っていた人物は、先程の美少女だった。

少し焦りながら僕の右手を引っ張り、走る。

その所為で右手がかなり痛いのだが、今はそんな事より、

「え……何で？」

「何で、ってあなたね……警察に事情聴取されたら面倒くさいでしょ？ それとも警察の人達と延々と話していたいの？」

「うっ、それはちょっと、嫌かな……」

一応警察署、というかアモスには行きたいのだから、警察の人達に連れて行ってもらえば楽かもしれない。

でもその結果何十分、下手すると何時間も事情聴取されて、それで葵さんに魔法を教わる事が出来なかったら本末転倒だ。

「でしょ？ じゃあさっさと行くわよ」

「いたたたたた！？ 行くのはいいけど引っ張るならせめて左手に  
して！！」

「全く、うるさいわね……ほら、これでいい？」

「う、うん。どうも……」

引っ張られる手が右手から左手に変わりようやく痛みが治まった。そして気付いたのだが、僕は今とんでもない美少女と手を繋いでいる、恋人でもないのに。

そう思うと何だか急に気恥ずかしくなり、普通に喋っていられなくなった。

だけれど、このまま黙っていると余計恥ずかしさが増してしまう。

「あー、あのさ。僕の名前は才人って言うんだけど、君の名前は？」

とにかく何か話していないと恥ずかしさで死んでしまいそうだった。

「……アシュリー」

「へえ、アシュリーって言うんだ。よ、よろしく……」

そしてそのまま、無言。

男女が手を繋いで走っている、しかも繋いでいるのが美少女ともなれば、嫌でも人の注目を浴びてしまう。

無言で手を繋ぎ、それを周りに見られている。

このあまりにも恥ずかしい状況を、僕はただひたすらに、耐えるしかなかった。

## 第十一話「デート 地獄」

あれからさらに移動し、最早警官どころか、あの状況に居合わせた人すら、一人もいないだろう。

「ここまで来れば、大丈夫ね」

そう言うてようやく止まり、手が離される。  
うわっ、凄い汗掻いてるし……。

気持ち悪いとか思われてないかな……？

「ふう……」

「何？ 私といるの、嫌だったわけ？」

「い、いや、そんな事はない！」

ただ恥ずかしくて辛かっただけだ。

女性と手を繋ぐのがあんなに恥ずかしいものだったとは……。

こんなじゃ彼女が出来たりなんて事はないんだろうな。

というか記憶喪失というこの現状で、彼女を作る余裕等あるわけがないから、結局は出来ないだろう。

まあ特別欲しいとは思っていないのだけれど。

「ふうん……まあいいわ。それで、あなたはどうするつもり？」

「あゝ、実を言うと、アモスに行きたいんだけど、道が分からないんだ」

「分からない？ あなた、この辺の人じゃないの？」

「そういうわけじゃないんだけど、道にはあんまり詳しくなくて……」

流石に記憶喪失とは言えない。

相手も困るだろうし、それに、話す事でそれが瑠璃の耳に入らないという可能性が、ないとは言い切れない。

彼女と瑠璃が知り合いという可能性も、あるのだから。

「アモスなら一応場所教えて上げられるけど、知りたい？」

「是非」

意外なところから救いの手が。

もし教えてくれるなら、それは願ってもない事だ。

「じゃあ教えてあげる、その代わり！」

「そ、その代わり……？」

今まで出会った人達が、人達なので、無茶な要求をされないか不安で仕方がなかった。

激しく心配だ。

もしかしてアモスに連れて行く代わりに、「私を甲子園に連れてって」とか言わないだろうな？

……阿呆だろ、僕。

「しばらく私に付き合ってくれない？ 今直ぐ行かないと駄目なわけじゃないんでしょ？」

「あ、それなら別に」

思ったよりも普通の要求で、心底安心した。

確かに今直ぐ行かなければならないわけじゃない。

もし今直ぐ行かなければならないのなら、こんなところで喋っている暇なんて、あるわけがない。

アシュリーも、それを分かって言ったんだろう。

「じゃあ決まりね。ただその前に、ちょっと小腹も空いたし、昼食にしない？」

言われて時計を見る。

時刻は十一時過ぎ。

昼食にするには少し早すぎる気もするが、店が混むより前に食べておいた方が楽と言えば楽だ。

それに、先程のチンピラ達との喧嘩で動いた所為か、僕も小腹が空いていた。

「そう、だね。僕もちょっとお腹空いたし、少し早いけど昼食にしますか」

そして僕とアシュリーは辺りをうろつき、適当な店を見つけて入った。

店は落ち着いた雰囲気のレストランで、メニューを選び、料理が来るのを待った。

その間特に喋る事もなく、二人共静かに店の音楽に聞き入っていた。

こんなに落ちつけるのは、記憶をなくしてからだと、初めてかもしれない。

今まで明るい雰囲気等はあったが、皆が皆、元氣過ぎて落ち着く余裕等はほとんどなかったと思う。

そしてそんな落ち着いた雰囲気の中だと、ついつい余計な事を考えてしまう。

彼女は何者なのか、どうして僕を付き合わせたのか、そもそも警察が来た時、どうして僕を放っておかなかったのか。

別にそれは全部彼女の意思だし、無理に知る必要は全くないのだ。だと言うのに、気になってしまう。

「あの、さ……」

「……何？」

「その、どうして僕を付き合わせたのかなあ？ って、気になったり、しなかったり……いや、なんでもないです……」

あそこまで言うておいて、最後まで聞かないとはなんて情けないんだ。

やっぱり迷惑かと思って止めたものの、あんな変に止めたら余計迷惑だったかもしれない。

アシュリーの様子をおおずと窺ってみると、怒った様子も、鬱陶しいといった感じの様子もなかった。  
そして少し無言の時間が続き、

「別に……」

アシュリーが口を開く。

「別に、大した意味はないわ。ただ庇ってもらったわけだし、折角だからこの辺の事を教えてあげようかなって、そういうただのお節介よ」

庇ってもらったと言うのは、チンピラ達の事だろう。

アシユリーが出て来なくとも、止めには入るつもりだった。

だからそこまでして貰う必要は全くないのだが、どうせならその好意に甘えさせてもらう。

知れる事は何でも知っておきたいからだ。

「そうなんだ、ありがとう」

「別に、礼を言われる程の事じゃないわ……」

素っ気ない態度を見せてはいるが、頬がほんのり赤くなっている。照れているんだろうか、元から可愛い事もあって、かなり可愛く見える。

「……何、その顔？ 何か腹立つんだけど」

「え、僕変な顔してた？」

「ええ、とつても気持ち悪い顔していたわ」

「ひどっ!？」

あまりに容赦が無い。

そりゃあ確かに、少しはニヤニヤしていたかも、という自覚はあるが、あそこまで言われると流石に傷つく。

「お待たせしました」

と、ウェイトレスの人が来て、頼んでいたメニューを一つずつ順々に、テーブルへと並べていく。

「ご注文はこれでよろしいでしょうか？」

メニューを一通り並べ終え、ウェイトレスが確認の言葉を入れる。

「はい、大丈夫です」

「かしこまりました。それにしてもお二人共、素敵ですね。とてもお似合いですよ」

「……は？」

ウェイトレスの女性が、輝かしい笑顔で、何やら謎の言葉を置いて、行ってしまった。

お似合い？

誰と誰が？

あまりにも突拍子な言葉で、二人共直ぐには反応出来ずにいた。

いや、待て、冷静に考える。

ここにその言葉を置いて行ったという事は、つまりお似合いなのは僕とアシュリーが、と言う事だ。

そしてこの場合のお似合いという意味は、おそらく……。

カップル、と言う事だろう。

「「……」」

アシュリーと顔を見合わせる。

アシュリーも言葉の意味を理解したのか、かなり面倒くさそうな顔をしている。

「え、えーと……」

何を言っているのか分からない。

「と、とにかく食べちゃおうか！ 冷めると困るし」

「そうね」

短い返事だけをし、アシュリーは黙々と食べ始める。

僕も一応食べはするが、微妙に気まずい所為で美味しく味わえずにいる。

な、何だ、この状況？

落ち着いた雰囲気が良いとは言ったけど、これは流石に辛いぞ。

しかも二人共無言で静かな所為で、周りの声がよく聞こえてしまう。

「ねえねえ、あそこのカップル、両方とも超美形じゃない？」

「ホントホント」。ああ、私もあんな彼氏ほしいな」

「ちっ、可愛い彼女連れやがって」

「爆発しろ」

少し物騒な声が聞こえた気もするが、気にしない事にしよう。  
ただ聞く限り、大半の人達が僕達をカップルだと認識してしまっている。

そう勘違いされる事は、僕自体は構わないのだが、アシユリーの機嫌が益々悪くなっていくので、あまり口には出さないでほしい。

「……僕らってさ」

「……何？」

「割とお似合いみたいだね、ハハハ」

「寝言は寝てから言いなさい」

「ゴメンナサイ……」

ただ冗談を言っただけでも怒られるこの状況。  
逃げたい。

一刻も早くこの空間から逃げ出したい！

どうしてただ昼食を取るだけでこんな思いをしなくちゃならないんだ！？

これも全部、あのウェイトレスさんの所為だ！

文句を言ってやろうか……あ、これ美味しい、何も文句なんてないです、はい。

「ご馳走様」

馬鹿な事を考えている間に、アシュリーは食べ終わったみたいだ。あまり待たせるのも良くないので、僕も急いで食べ終わる。

「ご馳走様、じゃ、じゃあ行こうか」

ようやくこの空間から逃げ出せる。

その事実が僕を救ってくれる。

「そうね、行きましょう。どれだけ食べたかよく分からないし、割り勘でいいわよね？」

「あ、いや、僕が全部出すよ」

女性に払わせるのもどうかと思うし、この辺を案内してくれるお礼の意味でもある。

幸い、財布には今日一日では、流石に使いきらないぐらいのお金が入っている。

「お金もちゃんと払ってあげるんだ。ホントあんな彼氏ほし」

「羨ましいわ」

「ちっ、貧乏人の癖に変に格好つけやがつて……」

「爆発しろ」

「……」

どうしてだろう、好意のはずが逆効果な気がするの。

「あなた、それワザとやってない？」

それとは、カップルに見られてしまう様な行為という事だろう。

「いやいやいや！ そんな事ないから、本当にただの好意だから！  
」

弁明してみるも、全部は信じてもらえなかったようで、未だ疑いの目をしている。

「うう、本当なのに……」

ただでさえ辛いこの状況に、自分の言っている事が信じて貰えない事に、少し涙が出た。

これ以上ここにいると、精神的にもちそうにないので、さっさとお金を払って店を出た。

外に出て、空気を吸う。

生き返ったと言っているほど、気持ちいい。

ようやく解放された、本当に助かった。

「それで、どこへ行く？ どこか行きたいところ、ある？」

アシュリーは一刻も早くこの場所から離れたいのか、早速次はどこへ行くか、の決断を、僕に求めてくる。

「特にはない、かな」

「そう、それなら私が行きたいところ行ってもいいかしら？」

「うん、別にいいよ」

とりあえずどこでもいいから、僕もここから離れたい。

全く皆カップルだなんて、ただ普通に話したり、一緒に食事したり、一緒にその辺歩きまわったりしているだけじゃないか。

……あれ？

確かにこれ、デートだ……。

本人達にその気はなくても、傍から見たら普通にカップルが行うと言われる、デートだった。

「じゃあ早速行くわよ」

「了解、それでどこへ？」

「行つてからのお楽しみつて事にしておくわ」

と、アシュリーは悪戯つ児の様な笑顔を見せる。  
一体何処なんだろうか。

アシュリーの少し楽しそうな様子からして、僕にとってもつまらない場所ではなさそうだ。

その事に少し期待を覚え、僕は彼女の後を付いていく。

「そういえば、一つ聞いてもいいかしら？」

歩いている途中、アシュリーがふと思ひ出し様に聞いてきた。

「いいけど、何？」

「あなた、どうしてアモスに行きたいの？」

「あ、ああ、それね。えーと……」

さて、どう言い訳したらいいものか。

確かにアモスに行くのなら、何か理由ぐらいあつて当然だ。

あり得るとしたら、家族に忘れものか何かを届けに行く、とかだろ  
うけど、詮索されると直ぐにボロがでそうだな。

それならば、言いたくない事は避ける形で、本当の事を言った方が  
いいだろう。

「僕実はさ、アモスに所属しているんだけど、方向音痴な所為で、  
まだ道覚えていないんだ」

よし、嘘は言ってないはずだ。

不自然な事は言っていないはずだ。

その確認として、アシュリーの顔をチラリと横目で見る。  
だがアシュリーは、心底驚いた顔で、こちらを見ていた。  
もしかして、何か変な事言ったのか……？

「嘘……あなた、アモスに入ってるの!？」

「え？ うん、そうだけど……？」

な、何なんだ？

入っていたら何か不味いのか？

一体どうしてあんな顔をされているのか分からず、僕はただただ、  
相手の言葉を待つしかなかった。

「だってアモスって言ったら、相当な実力がないと入れないのよ？」

「あ、あれ？ そうだっけ？」

そういえばそんな事を葵さんだか、パスティアさんだか、誰かが言っていたような気がする。

自分が強いという自覚がないからか、そんな話はとうの昔に忘れていた。

「そうだっけ、ってあなたねえ……。よくそんな調子で入れたわね……」

「いやあ、僕にもどうして入れたのか、よく分からないんだ」

忘れましたから。

「全国の実力家を、的に回した気がするわ……」

「うん、本当に回してそれで怖い……」

なあ以前の僕。

君は一生懸命努力した結果、アモスに入れたんだよね？

そうであってくれ、でないとたくさんの人に妬まれる。

「しかしどおりで、馬鹿相手に冷静に戦えたわけよね。普通あんなに攻撃かわしたりなんて出来ないわ」

そう言われてみると、確かに僕はまともな攻撃は食らっていない。精々挙げるとしたら、鉄パイプを右手で受け止めた時くらいだが、それでも少し負傷しただけに過ぎない。

これも体が覚えていた、と言いたいが、体が覚えていただけであそこまで出来るものだろうか？

分らない、が、何となくただの記憶喪失ではない、そういう気がした。

「何はともあれ、これで色々と納得言っただわ」

「そ、そう？ 良かった……」

どうにか誤魔化す事が出来たみたいだ。

「何か言った？」

「いいや、何も」

「そう、ならさっさと行きましょうか」

そして先程よりも、少し早く歩きだす。

当然付いていけない速さではないので、僕も普通にその後を追う。

この傍から見たらデートに見えてしまう行為を、僕は一体どれだけ満喫する事が出来るのだろうか。

## 第十二話「再びアモスへ」

「疲れた……」

あの後、ゲームセンターや、動物園や、とにかく色々な場所に連れまわされた。

そしてそのことごとくを僕が奢っていき、結果的に分厚かった財布は、二分の一ぐらいまで薄くなってしまった。

自分から進んでした事とはいえ、財布が薄くなる事には流石に目尻が熱くなってしまう。

「あらそう？ 私は楽しかったけど？」

僕は疲労困憊しているというのに、一方のアシユリーは何事もなかったかのように平然としている。

女性が幸せを感じている時の体力は、無尽蔵なんじゃないかと思えてならない。

「というか、行きたいところがある、って言った割には普通の場所ばかりだったね」

そう、今まで行ったところは、最近の若者ならよく訪れる様な場所ばかりだった。

別にそこへ行きたいと思うのは自由だが、行く度々の反応が、新鮮味を感じさせられるというか、あまり慣れていないような感じだった。

まあ、こんな金髪美少女がゲームセンターとかで遊びまくっている姿など、想像出来ないのだけだ。

「仕方ないじゃない。今まで行った事なかったんだから……」

僕の言葉がお気に召さなかったのか、少しふて腐れる。

「行った事ないって、何で？」

「家が許してくれないのよ。だから今日はこっそり抜け出てきたわけ」

「え、っていうことはアシユリーってもしかして……お嬢様!？」

「そうよ、何か悪い？」

「い、いや、別に何も悪くないけど……」

確かにお嬢様と言われれば、納得するしかない。

仕草の一つ一つが一般人のそれとは違うし、それらしき風格もある。だとしても、今の今まで一緒に過ごしていた人物がお嬢様だと知って、驚かない人物がいるだろうか？

お嬢様みたいな自分に取ってあまりに上過ぎる立場の人と過ごすなんて、創作上の世界でしかハッキリ言ってあり得ない事だ。

「さてと、時間も時間だし、そろそろアモスまで送ってあげる」

「ありがとう、でももう少しぐらいなら普通に付き合えるけど？」

時計は四時を指しているが、時間的には十分余裕がある。

家の位置自体は把握しているから、迷わず帰る事も出来る。

「別にいいわ。十分楽しんだし、何より、あまり遅くなると家がう

るさいのよ……」

「ああ、成程」

やはりお嬢様っていうのも、大変なんだな。

家が裕福で生活に何一つ不自由が無い代わりに、自由が少ない。

その点で考えると、ある意味一般人よりも不自由だ。

適度に裕福な家の方が自由もあつて一番いいんだろう。

僕の家はどう考えても貧乏だけど。

「とりあえず早く行きましょう。ここからだちょっと遠いのよ」

そして僕はようやく、アモスへと向かう。

アモスへ行く時も葵さんに案内してもらったわけだが、今のところ僕が率先して歩いていたら事はない。

記憶を失ったから仕方が無い、と言われればそれで終わりなのだが、こつも小判鮫のように付いて行っているだけでは、流石に自分が情けなく思えてしまう。

あれからまた、二十分程歩いた。

記憶喪失を知った時から、未だ少し疲労しているこの体に、今日歩いた距離は流石に辛いものがあつた。

精神的な疲労とはいえ、疲労には変わりがない。

態度には出さないものの、もうこれ以上長い距離を歩ける気がしない。

「はい、着いたわ」

着いた場所を見ると、そこには確かに、以前見たままのアモスがあ

った。

何度見てもその大きさに圧倒されてしまう。

「じゃあ私はさっさと帰るわね」

「いや、ちよつと待って」

アモスに着くなり、直ぐに帰ろうとするアシュリーを呼び止める。

「何、まだ何か用事あるの？ 言っとくけど、携帯は持ってないからアドレスとかは交換出来ないわよ」

「何だ、それ……。それはどうでもいいんだけどさ、ただお礼がしたくてさ」

「お礼？ お礼なら色々奢ってもらったりしたじゃない」

「それは僕も楽しませてもらったから、そのお礼、かな」

「一々律儀ねえ……」

「いいんだよ。恩知らずよりは律儀の方が。ともかくこれ、特に大切な物でもないだろうし、上げるよ」

僕が渡したのは、家で自分の部屋を漁った時に見つけた、謎の指輪だった。

姉さんや、疑われないか心配だったが瑠璃にも聞いてみたが、誰に知らなかった。

一応葵さんにも聞いてみようかと、思っただけで来たのだが、特別必要そうな物ではないのでアシュリーに上げる事にした。

「…………何これ？」

「指輪、なんだけど…………？」

「それは分かってるわよ。私が言いたいののは、男性から女性に指輪を送るのが、どういう意味か知っているのかって事」

「あ…………」

「あなたねえ…………」

「ゴゴゴゴ、ゴメン！　そういう意図は全く無かったんだ、決してこれっぽっちも！！」

つくづく僕は間拔けた。

カップルに見られるような行動に加え、プロポーズしているように見えてしまう行動までしてしまっている。

こんなの、彼女に気があるようにしか思えない。

「…………まあいいわ。一応貰っておく、ありがとう」

僕から指輪を受け取るなり、アシュリーは指輪をはめた。

左手の薬指に。

「ぶっ！？」

「冗談よ」

僕があまりの事に仰天したのを確認すると、指輪は直ぐに外された。

……もしかして、仕返しされたのか？

「それで、今度こそ用事はこれで終わりよね？」

「あ、うん……」

「そう、今度こそさようなら」

「さ、さようなら……」

そしてアシュリーはゆっくりと去っていく。

僕はそんな彼女を、見えなくなるまで見つめていた……。

アシュリーが見えなくなった後、僕は早速アモスに入り、受け付けで葵さんと呼んでもらった。

アモスのカードを見せると、何も聞かれず普通に呼んでもらえた。やはりアモスのメンバーはそれだけ特別なのだろうか。

「どうかした？ 何か顔色悪いじゃない」

因みに現在、魔法の使い方を教えてもらう為に、訓練場に向かっている。

ついでに以前の実力を取り戻す為の訓練もつけてくれるとの事だ。葵さん曰く、「本当なら訓練なんていらなぐらいの実力」らしい。それなのに訓練をするという事は、それだけ弱くなっているという事だろう。

確かにチンピラ達と喧嘩をした時、かわす事は出来たものの、ま

もに攻撃が出来ずにいた。

チンピラ達がそれだけ強かったという可能性もあるが、それでも僕は弱くなっているんだろう。

「いえ、さっきまでちよつとある女の子に、付き合わされていたんですから。まあ僕も割と楽しんだんですけどね」

僕は何気なく言っただが、葵さんはそれを聞くと目を光らせた。

「へえ、誰？ 才人の知り合い？」

「いえ、赤の他人ですけど……？」

そう言つと葵さんはますます目を明るく光らせた。  
何をそこまで目を光らせる事が、あるんだろうか？

「へー、じゃあ知らない子に声掛けられたわけ？」

「いえ、チンピラに絡まれていたところを助けたんですけど、そのお礼として辺りや、アモスまでの案内をもらっただけです」

本当に絡まれたのはオジサンなのだが、面倒くさいので省く事にした。

オジサン、スイマセン……。

「へえー、ふーん、そっか。助けてあげたんだ」

「……何ニヤニヤしながら一人で納得してるんですか……？」

「いやーやつぱり才人ってモテるんだな、って思っただけよ？」

「別にモテてるわけじゃないでしょう……。本当にただのお礼ですって」

「いやいや、普通なら助けてもらったらお礼だけしか言わないわよ？ ま、私の場合は、助けられる前に大抵私が潰してるけどね」

「潰すって……」

アモスに入れる程の実力なのだから、襲われた場合確かにそういう結果になりそうだが、あまりに男の出番がなさすぎる……。

葵さんは先程からずっとニヤニヤとこちらを見ている。

本当にただのお礼だと、経緯を最初から最後まで言えば信じてもらえるだろう。

だけどその場合、手を繋いだ事等も話す事になるかもしれないので、やっぱり話さない事にした。

「大体、もし僕がモテるんでしたら、彼女の一人や二人ぐらい、いるでしょうが。いや、二股する気はありませんけど」

こんな事を言っても、まだからかってくるかと思っていた。しかし葵さんは急に困った顔をして、

「あーうん、そう……ね」

と口籠ってしまった。

「そこそハッキリと否定してくださいよ！？ 流石に傷つきますよ！？」

「いえ、今のあなたなら別にいいのよ？ 普通に彼女ぐらい出来そうだね。でもね、以前のあなたは、性格がちよつと……」

「……」

葵さんにそう言われ、僕も納得した。

昨日葵さんに、僕はどんな人物だったか、と聞いた時、葵さんは「一匹狼みたいだった」と答えた。

つまりはそう言う事だ。

僕は仲間や親友どころか、女性と関係を持つ事もあり得なかったらしい。

「いくらなんでも今の僕と違い過ぎませんか、正確」

「多分今のあなたが歪んで育った結果が、以前のあなたなのよ……」

「歪んで育ったって、本人の前で言いますか……。記憶取り戻した後どうなっても知りませんよ？ 自分の事ですけれど……」

そんな事を話しながら歩いているうちに、僕と葵さんは一つの部屋の前に到着した。

「ここ、ですか？」

「そうよ、この先が訓練スペースになっているわ」

扉自体は普通の、白く汚れない、どこにでもあるような扉だった。ただ何故だろうか、一目見た時から、何とも言えない、『ズレ』みたいなものを感じる。

「あの、葵さん。この扉、何か変じゃありません?」

「あら、気が付いた? 記憶を失くしてても、感じとれるものなのね」

「へ?」

意味が分かっていない僕を放置し、葵さんは近くにあった機械にカードキーを通し、扉を開け、中に入る。  
僕も続いて入ったのだが――

そこは、明らかに建物よりも広い空間が広がっていた。

「な、なんですか、これ!？」

「やっぱり最初は驚くわよねえ。これも魔法の力よ」

「これも、ですか……?」

部屋の内装はある程度予想した通りだった。

白い壁や天井に囲まれ、そして何一つ無駄な構造になっていない。訓練にはもってこいの空間だった。

ただ広さが、学校によって違うが、大体グラウンド程の広さはゆうにあるだろう。

「どうなってるんですか、これ?」

「空間をちょっと弄ってるのよ、魔法でね。外側からだとも何も変化が無いから、気分的には私達が小さくなっているようなものよ」

「あゝ、それなら何となく、納得です」

納得ではあるのだが、魔法は一体どこまで活躍の幅が広いんだ。空間を弄る魔法なんて、使いようによってはあまりにも強力すぎるじゃないか。

「こんな魔法、一体誰が使っているんですか？」

人によつて使える魔法は元から、それこそ生まれた時から決まっている。

魔法何て呼ぶより、超能力と呼んだ方が分かりやすいし、良い気もするのだが、それを変える事なんて僕には出来ない。

ただ超能力だとか魔法だとかはどうでもよく、空間を弄れる力があるというのが、驚きだ。

「誰だつたかしら……？　かなり上の立場だつて事は確かだけど、よく覚えていないわ」

「やっぱり上の人なんですか」

こんな強力な力を持っていたら、上の立場のいるのも納得だ。

「後一つ心配な事があるんですけど、魔法が切れたりとか、しないんですか？」

「ああそれなら大丈夫よ。この空間は弄られた今の形で固定されて、使用者の支配からはもう抜けているもの。それにもし切れても、元の空間に私達が戻る事になるだけよ。まあその場合、部屋があまり

に狭くてぎゅうぎゅう詰めになるでしょうけど」

「そうなんですか、それなら安心です」

もし魔法の効力が切れた時、その空間の中に居た僕達は消滅してしまうんじゃないか、と不安に駆られてしまった。

「安心したならそれでいいとして、そろそろ始めましょうか」

「そうですね、それで、何からするんですか？」

「そうねえ、あなた、今魔法についてどこまで覚えてるわけ？」

どこまで、その質問に僕は悩まざるを得なかった。

魔法の存在自体は覚えていた。

人によって使える魔法が違う事も覚えている。

なら一体僕は何を忘れたというのか。

忘れているのだから普通、何を忘れているというのは分からない。  
分かる限りだと、魔法の使い方と、僕はどいつた魔法を使えるか、  
だ。

しかし一体どういう事だろう？

魔法の存在全てを忘れているなら、まだ何となく分かる。

でも自分についての魔法だけ忘れているのだとすれば、何か意味があるんだろうか？

「多分、ですけど、魔法の使い方とかぐらしか忘れてないと思います」

「それだと説明少なくて済むわね」

と、葵さん安心したような顔を見せるものの、それは直ぐに暗くな  
った。

「あゝでも、無理っぽいわね……。だって魔法の使い方なんて、説  
明出来るものじゃないもの」

「どういう事ですか？」

「凄い分かりやすく言うと……。あなた、空気を吸ったり吐いたりす  
る方法説明出来る？」

「えつと……。無理、ですね。そもそもその行為を説明する事自体に、  
吸ったり吐いたり出来る事を前提として話さないといけませんし」

「そういうわけなのよ。何て言うのかしら、こう、気を溜めて放出  
する？　みたいな感じなんだけど、それで分かるわけないわよね」

「すみません、分かりません……」

なんという事だろう。

この時点で魔法をまた使えるようになるのは、ほとんど無理だとい  
う事を悟ってしまった。

記憶が戻れば使えるだろうが、それがいつか分からない以上、魔法  
は使えないものと判断するしかない。

「「はあ……」」

結局は二人して落ち込んでしまう。  
もしかしたらここに来たのは失敗だったかもしれない……。

### 第十三話「上には上がいる」

「魔法については教えれそうにないし、諦めるとして、最悪魔具ぐらいは使えた方がいいわよね」

「そうですね……」

「というかそもそも、魔具すら使えなかったら、ここでまとも働いていける自信がない。」

「でも葵さん。魔具の使い方、以前は知らないとか言っていますでしたっけ？」

「それなら大丈夫。使い方は既に知り合いから聞いてあるわ」

「そうなんですか」

「そうよ、だからほら、さっさと魔具出しなさい」

葵さんに言われた通り、魔具であるグロウシェイドを、ポケットの中から取り出す。

「それで、えーと、ちょっと待ってね……」

葵さんがどこからか紙を取り出し、何かを確認する。

「まずそれを持って……」

紙を見ながら話しているという事は、あれは魔具の使い方をメモし

た紙という事でいいだろう。

メモするぐらいならその知り合い本人を連れてきた方がいい気がする。

忙しいから連れて来られなかったのかもしれないが、時間がかかってまどろっこしく感じる。

「いや、あの、その紙渡してくれれば自分でしますよ?」

「そう?　ありがと、なんか説明しにくくて、わけわかんないのよ」

助かったという表情で葵さんは僕に紙を差し出してくる。  
僕はそれを受け取り、内容を確認する。

「え〜と?　まず、これを持って……?」

紙に書かれている内容に従い、行動する。

「次に、魔具に力を解放するように念じる、って言われてもなあ……」

念じるだけというのは簡単だが、表現が曖昧な所為か、どうすればいいか実感が湧かない。

ただそれでも一応、書いてある通りに念じてみる。

「念じるって、これでいいのかな?　お、出た——って、うわああっ!？」

念じるだけで確かに刃は出た。

ただ持ち方が逆だったみたいで、手よりも上側に出るかと思われた

刃が、下側から出てきた、危うく僕の腹を突き刺しかける状況へと陥った。

「ちょっと、大丈夫!？」

「だ、大丈夫です」

流星にこれには葵さんも驚いた様で、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしている。

剣を正しく持ち直し、改めて出てきた刃を見る。

「これが、グロウシェイドの、刃……」

形状としては刀に似ている。

だが刀のそれよりも大きく、刀背の部分は刀に比べて全く異質で、そして歪な形をしている。

その所為もあってか、より鋭く研ぎ澄まされている様に見える。

「何かこう、ゲームで言う聖剣みたいなのをイメージしていたんですけど、これだとむしろ魔剣ですね……」

大抵の人は、聖剣と聞くと白く、美しい装飾の施された剣を思い浮かべるだろう。

だがこの剣は、見ていると飲み込まれてしまいそうな、深い蒼。施されているのは蛇のように波打って描かれている、黒い線のみ。

以前の僕は一体どうしてこんな剣を、好き好んで使っていたのか皆目見当がつかない。

「その剣が作られたのは大分昔だし、感性が違っていたのかしらね。まあ人生そうそう美味しい事にならないと思って、諦めなさいな」

「うう、格好いい剣で皆を救って、ヒーローみたいになれると思うたのに……」

馬鹿みたいだが、誰だって一度くらいはそういう事を考えるだろう？

「見た目については諦めますけど、この剣ってどうしたらいいんですか？」

「どうしたらって？」

「魔具って言うからには、他に何かあるんでしょう？」

まさか、ないとか言わないよな？

今のところこの魔具の特徴は、好きな時に刃を出す事が出来るだけだ。

それだけでも確かに凄いと思うが、それだったら拳銃の方がよっぽどいい。

「ええ勿論。魔具には必ずと言っていいほど、能力の一つや二つぐらいあるわ」

「そりやそうですね。それで、どんな能力があるんですか？」

「知らない」

「……え？」

数秒の沈黙。

その間の僕の思考は、完全にフリーズしていた。

「ええええええええええええ！？」

知らない、葵さんはそう言った。

葵さんの物ではない以上、葵さんが知らない可能性は確かにある。あるのだが、だからと言って、それではいそひですかと、納得出来るかと言われれば、出来るわけではない。

「知らないって、どうしてですか!？」

「そんな事言われても、以前のあなたが私に何も教えてくれなかったんだからしょうがないじゃない」

以前の僕、あまりにも役立たず過ぎるぞ！

いくら他者と関わりたくないからって、それぐらい知られていてもいいじゃないか！

誰にも何も教えないから、結果として今の僕は大大分困っているんだぞ！？

心の中で、叫び続けた。

以前の僕に対して罵詈雑言を浴び続けた。

そして浴びせられているのは、結局僕だという事に気付き、泣いた。

「それじゃあ一体、どうすればいいんですか……？」

「確かに。魔法も駄目、魔具も駄目、身体能力も落ちている、となればここでは働いていけないわよねえ」

「そんな……」

ここで働いていく事が、僕の記憶を取り戻す手掛かりを見つける可能性が最も高い。

それなのにそれが出来なくなると、記憶が戻る可能性はより低くなってしまう。

「だ、大丈夫よ！　うちの上司に言っとけば多分なんとかしてくれるわよ、多分！」

「多分じゃ心配なんですけど……」

だが他に何か方法があるわけでもなく、それに頼るしかない事も事実。不安は残るものの、とりあえず葵さんをお願いした。

「ちょっと待ってて、電話するから」

と言って、葵さんは携帯を取り出し耳にあてる。そして僕より少し離れた場所に移動した。

葵さんは少し話した後、直ぐに戻ってきた。

「『俺の部下になるならいいよ』ってさ」

「毎度思ってますけど、葵さん達の上司って、正直と言うか何と云うか、建前とか全く使いませんよね……」

「まあそういう人だし、気にしてもしょうがないわよ。それよりあなたはどうするの？」

「条件としては十分良いですけど、部下になった後僕何させられるんですか……？」

人が人なだけに、怯えずにはいられない。

だってシロクロコンビや葵さんの上司だぞ？

部下になったら何されてもおかしくなさそうで怖い。

「とりあえず私や馬鹿達のサポートをしていればいいらしいわよ」

馬鹿達って、シロクロコンビの事ですか……？

「それなら何とか出来ると思いますけど、そもそも何で僕を助ける気になったんですか？」

「それは私も謎なのよね……。多分記憶喪失になる前のあなたを必要としてるんでしょうけど、ホント謎だわ」

「……」

以前の僕にはやはり何かある。

とんでもない秘密を抱えている。

これは最早予想などではなく、確信を持ってそう言える。

「……分かりました。部下になるって、伝えておいて下さい」

この決断は間違えていないはずだ。

今の僕にとって、記憶を取り戻す事が最優先である以上、協力してくれると言っのなら、それに甘えさせてもらう。

「オツケー。後で伝えとくわ」

葵さんは明るい笑顔で応えた。

「さてと、魔法は無理だったし、魔具も微妙、となれば……」

と、先程までの明るい笑顔が、一気に怖く感じられるようになった。

な、何だ？

何やらよく分からないけど、寒気が……。

「身体を鍛えなおすしか——ないわよね？」

「ひいつ!？」

どうしてそんなに嬉しそうなんですか!？

「そういえば最近体動かしてないのよ。久々に腕になるわぁ……」

いえ、ならさなくていいです、本当に。

「さ、才人も準備なさい。あ、勿論魔具は禁止ね」

ね が全く可愛く思えないのは、何故だろう……。

魔具は使っても使わなくても、結果が変わらない気がするのも、何故だろう……。

僕はガタガタ震えながらも、一応構えを取った。

持っていた荷物は念のため、先に避難させておいた。

「あの、もう色々教えてもらったし、別にいいですよ……」

「安心しなさい。魔法は使わないであげるわ」

あ、駄目だ。

人の話聞いてない。

「さあ、いくわ——よっ！」

その後、訓練室から謎の悲鳴を聞いたという噂が、短い間アモスの間で流れたという。

「い、生きてた……」

これほどまでに生きている事に感謝したのは、初めてかもしれない。姉さんの胸に圧迫された時は、何が何だか分からない状況だった上に、気を失ったので、死への恐怖を感じる余裕はなかった。

だが今回は、本当に死ぬかと思った。

葵さんは容赦なく僕に対して攻撃を仕掛けてきた。

それはあのチンピラ達の比じゃなく、避け続ける事は不可能だった。そして一撃食らってみると、これが痛いなんの。

攻撃を食らう度に口から何かが出そうになった。

やられてばかりじゃこちらの身が持たないので、一応反撃してみても、全部いなされてしまった。

あまりにも強すぎて、本当に人間かと疑ってしまう程だ。

魔法も使わずこの実力って、もしかしてシロクロコンビよりも強いんじゃないか？

「だらしないわねえ。ま、私にとっては良いダイエットになったけど」

葵さんは手を上に上げ、体を伸ばしている。  
ほんの少し、軽い運動でもしたような態度だった。

「ダイエットって……十分細いじゃないですか」

そう、全体的に細くて、スレンダーだ……胸も。

「あら、まだ訓練続ける？」

「ごめんなさい！ 勘弁してください！！」

相変わらず胸については何故か心を読まれてしまう。  
今この状態であんな事を考えるなんて、迂闊すぎるぞ、僕……。

「さ、今日はこれぐらいでいいわね」

「今日はって、次もあるんですか！？」

「何言ってるの、当たり前じゃない」

こんなハードな訓練を何回もだなんて、生きていられる気がしない。

「訓練って、どれぐらいの頻度でやるんですか……？」

毎日とかはやめてください、お願いします。

必死の祈りが届いたのかどうかは知らないが、葵さんの返答は予想

外のものだっただ。

「ああうん、また今度来た時でいいわよ？」

「……へ？　また今度つて、何時になるか分かりませんか？」

「いいわよ、別に。それに私だって多少は忙しいんだから、毎日とか毎週とかは無理よ」

また今度来た時、と言う事は、一生来なければ一生しなくてもいいつて事だ。

とはいえ、勿論そんな事を実際にするわけがない。  
ハードでも何でも、訓練が必要な事は分かっているから、時間があればこれからも当然通うつもりだ。

「えっと、じゃあいつになるかは分かりませんが、また来ます」

「あら、もう帰るの？」

「いえ、その前にちょっと葵さんをお願いがあるんですけど」

「お願いって？」

「その、僕が倒れていたらしい研究所に……行きたいんです」

と、前々から考えていた事を、葵さんに伝える。

「行きたいって、あなたねえ……」

葵さんの表情が、困惑したものへと変わる。

「それ、本気で言ってるの？」

葵さんの言いたい事は分かる。

記憶喪失の原因となった場所に行けば、何か思い出すかもしれない。だがそれはつまり、もしその場所へ行っただとして、何が起きるか分からないという事だ。

ついこの間目覚め、まだまだ精神的に疲労している現状では、どちらかと言うと反対なんだろう。

「はい……」

だがそれでも、僕は行きたいと、そう伝えた。

「はあ、しょうがないわね。ドクターストップが掛かってるわけでもないし、私に止める権利はないわ」

「すみません……ありがとうございます」

迷惑を掛けている事を詫び、そして付き合ってくれる事に礼を言う。

「距離ちよつと離れてるし、来るまで行くわよ」

「はい！」

そうして僕は、研究所へ向かった。

たった二日間の出来事とは思えないほどに、僕は動き回っていた。

## 第十四話「未知なる研究所」

再び葵さんに車で、今度は研究所まで送ってもらった。

葵さんは不服を唱えてこないが、こうもタクシーの様に扱っていると、罪悪感にさいなまれてしまう。

「ほら、着いたわよ」

「着いたって、何もないんですけど？」

研究所らしき建物など、どこにも見当たらない。

「あのねえ、倒壊したのにあるわけないでしょ……」

葵さんは僕の反応に呆れ、溜息をついた。

「あ……」

僕はとことん人の話を忘れるみたいだ。

いや、正確には目の前しか見えていない、といったところだろうか。まあ今周りを見ていられる程の精神的余裕などあるわけがないが。

確かに目の前に建物は存在しない。

だが建物が倒壊した跡のようなものはある。

それを見た時点でどうして思い出せなかったのか。

自分の間抜けぶりに恥ずかしくなりながらも、研究所だった建物のところまで進む。

途中、立ち入り禁止の意味で張られている、トラテープがあったが、

アモスのメンバーなら入ってもいいとの事なので、躊躇なくテープの先へと行く。

研究所の前まで着くと、立ち止まり、研究所の瓦礫を見降ろした。パステイアさんの言っていた通り、本当に原型を留めてはいなかった。

ここが研究所だったなど、言われでもしない限り分からないだろう。ただそんな事よりも、

「どう、何か思い出した？」

そう、こちらの方が重要だ。  
その為にここまで来たのだから。

「いえ、何も……」

だがその甲斐はなく、脳は何の反応も示す事はなかった。

「ま、そりゃそうよね。それで、どうする？ もう帰る？」

「もう少し、もう少しだけ探索させてください」

おそらく反対される事はないだろうと、そう判断し、返事を聞く前に瓦礫を掻き分け、奥の方を探索する。

「探索するのはいいけど、私は手伝わないわよ。車の前で待ってるから、満足したら帰ってきなさい」

「はい、分かりました！」

葵さんは車の所まで戻り、僕はそのまま探索を再開する。

瓦礫を掻き分けていくと、元々研究所にあったまま、放置されていただろー機材等を発見した。

そのどれもやはり原型は留めておらず、元がどういった物だったのか全く分からない。

もつとも、原型を留めていても現状では何なのか分からなさそうだ。

「ふう……」

探索を開始する事、十分ほど。

手作業で瓦礫を掻き分けていく作業は、流石に体力を浪費した。頬を垂れる汗を拭い、一度瓦礫の上に座り込み、小休止する。

「何も、ないなあ……」

愚痴を溢す。

記憶を取り戻す手掛かりになりそうな物は何も見つかっていない。その事実、落胆を隠せないでいた。

出来る事ならまだまだ探索をしたいというのが本音だ。

だが葵さんを待たせている以上、それは出来ない。

そんな事は十二分に分かっている。

いい加減諦め、戻ろーかと考え始めたその時、一冊の本を瓦礫の中に見つけた。

当然ながら興味を惹かれ、本を拾い上げる。

「何だ、これ？」

本を開き、中身を確認しようとするが、何故だか開かない。  
どれだけ力を強く込めようとも、開く様子は全くない。

意味が分からない。

接着されているわけでもなさそうだし、どういう事だ……？

開かない理由を、様々な可能性から考えてみるが、どれも決定打には欠けていた。

結局今は開けないだろうと、そう判断するしかない。

だが開けはしないものの、記憶を取り戻す手掛かりかもしれないと、持ち帰る事にした。

「やっぱり、もう少しだけ探すかな」

思わぬ収穫とも言えない様な収穫を手に入れ、少し気分が高揚する。するとまだ他にも何かあるかもしれない、そう考え終了しかけていた探索を再開する。

勿論、長く探索するつもりはない。

葵さんを待たせているのだから。

後数分、探索して何か見つかるか、見つからないかは関係なしに、その時点で探索を終え葵さんの元へ戻る事にした。

また少し移動していると、何か小さな物を踏みつける。

瓦礫等とはまた違った感触。

それが何かを確認する為に、足元に目を向ける。

すると視界が――反転した。

「うん、  
」

胃の中の全てが、口内まで逆流してくる。

異様な吐き気と、激しい頭痛に立っていられなくなり、その場に膝をつき、倒れこむ。

胃の逆流は止まる事を知らず、遂には耐え切れず嘔吐する。朝食も、昼食も、何もかもが胃液と共に吐き出されていく。

吐いた後の口に残る、独特の味が気分を不快にさせる。

一体何を見たのか。

分からない。

分からないのに吐いたのか。

いや違う、拒絶したのだ。

脳が、網膜が、視神経が、その物に対して『見る』という事を拒絶したのだ。

みたたくないミタクナイ見たくない視たくない観たくない診たくない  
看たくない。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

得体のしれない恐怖が僕の脳を支配する。

踏みつけた物が一体何なのかと確認する気など、既に失せていた。それより一刻も早く、一分も、一秒も早くこの場から逃げ去りたいという気持ちの方が、圧倒的に強かった。

ふらつきながらも、立ちあがる。

奇跡的に汚れる事もなく無事だった本を片手に、僕は脳の命令する

がままに、その場から早々に立ち去った。

「僕は、何を見たんだ……？」

自分へと問い詰めてみたが、返事が返ってくるわけがない。

どれだけ思い出そうとしてみても、脳がそれを拒否していた。

記憶を取り戻す手掛かりである可能性は、今右手に持っている本なんかよりも、十分高い。

だがそれを取りに戻る事は、先程の二の舞になってしまいそうなので、諦めた。

葵さんに取りに行ってもらうという手もあるのだが、これ以上迷惑は掛けたくない。

確かに記憶は戻ってほしいが、ここまで辛い思いをして戻ってほしいとは思わない。

そもそも記憶が戻る事は、今の僕にとって、第一に優先すべき事ではない。

記憶が戻る事以上に、瑠璃を悲しませたくない、皆に迷惑を掛けたくないと、そう考えている。

だから僕は今回の事は、忘れる事にする。

忘れ、何事もなかった様子で、葵さんの元まで戻ろう……。

そして僕はようやく、葵さんの元まで戻った。

「遅い！」

戻るなり、葵さんはいきなり僕を怒鳴りつけてきた。  
予想通りと言えば、予想通りだ。

むしろいきなり殴られなかった事に、少し驚いた。

「一体いつまでいるつもりだったのよ！ 人を待たせてるって自覚、ちゃんと持ちなさい！！」

「ごめんなさい！」

悪いのはどう考えても僕だ。

結局かれこれ数十分は待たせていたのだから。

「それで、結局どうだったのよ？ 何かあったわけ？」

「いえ、それが何もありませんでした……」

本は葵さんには秘密にしておく事にした。  
出来れば自分で調べたいからだ。

本は今、僕の服の中にあり、葵さんからは見えないようにしてある。

「何もなかったって、あなたねえ！ あんだけ人を待たせておいで、それはないでしょう！？」

「ひっ！？ ごめんなさい！！」

今にも襲いかかってきそうな葵さんに、素早く謝罪する。  
でないとこの人の場合命がもたない。

「……もういいわ。怒るも疲れた」

「えっと、本当にすいません……」

「私はこのままアモスまで戻るけど、才人はどうする？」

「あ、僕はもう家に帰ります。時間も時間なんで」

もうすっかり日も落ち、夜になっている。

姉さんに夕飯をどうするかまでは伝えていなかったなので、多分心配しているだろう。

一応後で電話は入れておくつもりだが、やはり帰らないと不味い。

「そう、じゃあまた今度ね。今度会うまでに一応グロウシェイドの能力も調べておくわ」

「はい、ありがとうございます！」

そして僕は葵さんと別れた。

葵さんと別れ、早速姉さんに電話をかける。

姉さんに電話をかけるとは言っても、正確には自宅にかける。

『はい、もしもし？』

この微妙に間の抜けた様な声は、姉さんだ。

ただ何故だろう、微妙に鼻声になっている気がする。

「もしもし、姉さん？」

『その声は、サーくん！？ うわあああああん、サーくんのバカーーーーー!!』

「え、何！？」

声の主が僕だと分かるなり、姉さんは突然泣き出してしまった。  
何が何だか、全く分からない。

『ながなががべつてこないがら、じんばいでじんばいで……うわあ  
あああああん！！』

言いたい事は分かるのだが、上手く喋れてないよ、姉さん……。

「ゴ、ゴメン。ちょっと色々忙しかったんだ」

自分の命を守るのに。

「グスッ……じゃあ、もう帰ってくる？」

「うん、今から帰るよ」

「うわああああん！！　よかった、よかったよおおおお！！」  
安心した所為か、姉さんは余計泣きだしてしまった。

「サーくんが中々帰って来ないから、誘拐されたかと思って、警察  
に電話しようと思ってたの……」

マジかよ……。

「と、とにかく急いで帰るから、もう切るね！」

と、これ以上話していたら更に泣きだされそうなので、急いで電話

を切った。

心配はしているだろうなと思ったが、泣かれるのは流石に予想外だった。

しかも警察に電話までしかけたと言う、今まさにその警察署に行つてたんですが……。

早く帰らなければ不味い。

僕はこの際仕方がないと、金を惜しまずタクシーに乘せてもらった。そして家に帰ると、姉さんに泣きながら抱きしめられ、また窒息死してしまいそうになったのは、言うまでもない。

## 第十五話「二人の実力」

ある日、僕は葵さんに呼ばれ、アモスへと行った。

「何の用ですか？」

「今日は訓練以外をやりうと思ってね、ちょっと待ってて」

と、言われた通りしばらく待っていると、

「才人、いるか？」

誠さんがやってきた。

ただどうやら、恭介さんはいないようだ。

「ヤッホー、誠。ハロハロー」

「なつ、葵、何でここに！？ 才人だけじゃなかったのか！？」

「そんなのウ・ソ、に決まってるでしょ。それより——」

葵さんは誠さんの腕に抱きつき、まるでカップルにでも見られそうな状態となった。

だが誠さんの表情は全く嬉しそうには見えず、むしろ化け物を見たように恐れている。

傍から見ているから冷静なもの、かくいう僕も何故だが、怖い。

「あの時、私<sup>が</sup>来るからって逃げたらしいわね？」

「あ、あれはだな、これ以上俺達が才人に出来る事もないから立ち去っただけだ!!」

あの時とはどうやら、葵さんと初めて会った時の事らしい。

「へえ〜？　じゃあそれについては、そういう事にして上げるわ」

「……え？」

誠さんは心底意外そうな顔で葵さんの顔を見る。

僕も意外だった。

葵さんの性格からして、こんな簡単に引き下がるとは思えなかった。

「それはいいとして、あなた『下手な事を言つと殺されかねないんだ』って、言つたらしいわよね？」

「何故それを!？」

誠さんの表情が今までに見た事がない程の、驚愕の表情へと変わる。

「私の情報網を、舐めない方がいいわよ……?」

「し、知らん！　そんな事を言つた覚えはない!」

「あら、おかしいわね。……ねえ、才人？」

「は、はい!？」

葵さんは笑顔でこちらに向き直る。

だが笑顔だからといってそれで安心出来るはずがなく、下手すると

僕の命まで獲られてしまいそうだ。

「あなたなら、言っただかどうか、分かるわよね？」

「え……？」

誠さんの目が、顔が、僕に対して懇願しているのが分かる。

「助けてくれ」と。

僕だって嘘をついてでも、誠さんを救ってあげたい。

上げたいのだが、残念ながら人間は、何よりも自己の防衛を最優先としてしまう。

そう、生物全てに備わっている本能で。

「言つて、ました……」

「才人おおおおおおおおお……！！！」

限りなく憎悪の籠った声で誠さんは叫ぶ。

憎むべき仇がまさに目の前にいるような、そんな錯覚に襲われる。

だ、だって仕方がないじゃないか！？

「やっぱり言っただわよねえ。それで、何か言いたい事、ある？」

自分はいくまで寛大だと、そう言いたいのか、誠さんの遺言を聞くとする。

「……頼む、許してくれ……」

「却下」

誠さんの最後の願いさえ、聞き入れてはもらえなかった。

その後誠さんはどこかへ連れて行かれ、帰って来た時には、それはもう誠さんではなかった……。

そうして誠さんが復活するまでに、いくらかの時間を要した。

「全く、あんまり時間取らせないでよね」

「誰の所為だよ……」

もうすっかり復活した誠さんは、葵さんに対して恨み事を呟いていた。

この二人の間には一体何があるのか、知りたいような、知ったら後悔してしまうような。

触れてはいけない事だと、心のどこかで言っていた。

「それで、結局俺を呼びだした用とは、何なんだ？」

「後で恭介も呼ぶつもりだけど、ちょっと才人と一緒に、仕事に行つてきてほしいのよ」

「「はあ!?!」」

「いやね、訓練ばっかしてても仕方ないじゃない? やっぱ実践とか、体験しないと成長はしないかなあ、って思つて」

「待て、確かに言う通りも分かるが、聞いた話だと才人の能力は大分落ちているんだらう? 流石に危険すぎる」

「そうですよ、僕だつてとてもじゃないですけど、犯罪者とか相手に出来ませんって!!」

今の實力だと、頑張れば一人や二人、多く見積もって三人までならどうにか出来るかもしれない。

でも本来その程度の実力では、アモスに入る資格がない。

僕は例外として置いてもらっているだけなのだ。

だと言うのに、今の状態で実戦などしたら、場合によっては大怪我してしまうかもしれない。

「だからそこで、あなた達シロクロコンビの出番ってわけ。ようは才人を護衛しながらやってくれたらいいわけ。ね、簡単でしょう?」

意外にも誠さんは、葵さんにシロクロコンビと言われる事を拒まなかった。

いや、拒む勇気がないだけか。

「簡単とは言うが、相手にもよるぞ……。流石に強すぎる相手だと守りきれぬ自信はない」

「大丈夫よ、ちょっと最近強盗や傷害で暴れまわってる奴ら捕まえてくれるだけだから」

「ああ、あの犯罪者グループか」

「ええ!?!」

そのの一体どこが大丈夫なのか。

犯罪者グループという事は、相手は少人数ではないという事になる。

さらにおそらくその一人一人が凶器を持っている上に、中にはマジシャンだっているかもしれない。

そうなるかどうか考えても、僕という存在は足枷になってしまふのは明確だ。

「ふむ……やつらなら、大丈夫だな」

「大丈夫なの!？」

僕の基準と、アモスでの基準は大きく違っているらしい。その事に少しばかり体を震わせる。

「とりあえずごちゃごちゃ言っでないで、さっさと行っけなさい。当然恭介も呼んで、ね」

「葵さんは行かないんですか？」

「私が行って、もし逆にやられちゃったら、どんな目にあうかわからないじゃない」

大丈夫ですよ、あなたなら負けませんから。

思っではいても、言っで代わりに僕がどんな目にあうかわかったものではないので、言わない。

「ま、葵の言う事も一理あるからな。仕方がない。才人、行くぞ」

「あ、はい」

その後恭介さんと再会し、事情を説明して一緒に行ってもらった。

「で、ここつてわけか」

問題の犯罪者グループが、アジトにしているという建物の前に立ち、恭介さんは言った。

建物は廃墟となっており、以前は何かに使われていたらしいが、詳細は分からない。

更に周りにも民家等はなく、隠れるには恰好の場所とも言える。

「あの、それで……どうするんですか？」

アモスの存在自体を忘れてしまっていた僕に、アモス流のやり方が分かるはずもなかった。

だからこそ事前に知っておく必要がある。

そうでないとどういう行動を取ればいいか分からなくなり、混乱してしまうからだ。

「どうするも何も、向こうは既に問題起こしてんだ。乗り込んでぶっ潰すだけだ」

「いきなり暴力振るったりして、こっちが悪者になる事とかないんですか？」

勿論多少の実力行使なら認めて貰えるだろう。だが恭介さんの場合、多少で済む気がしない。

そんな僕の疑問には、誠さんが答えた。

「今の世の中だと、アモスより偉い立場のところなんてないんだ。その一番偉い立場の者が何をしていようと、それに逆らえる者はいない。つまりはそういう事だ」

「そんな……」

それはアモスなら何をしてもいいという事になる。  
昔、絶対王政という政治制度があった。

アモスは聞く限り、それとなら大差がない。

それはどこか、おかしくないか？

本来はそれも一つの国としての形だ、と割り切ればいいのだろう。  
だが僕にはそんな事、到底出来そうにはなかった。

葵さんや、シロクロコンビは納得しているのだろうか。

「とりあえず、まずは恭介、お前が行け。その後に俺達も続く」

「あいよ、了解」

面倒臭そうにしながらも、建物の入り口まで歩いて行く。  
恭介さんは息を深く吸い、そして――

「おらぁ――!!」

入口である扉を、体当たりで吹き飛ばした。

扉は勢いよく飛んで行き、丁度部屋の真ん中に、その体をひしゃげ  
させて落ちていった。

「な、何だ、お前達!？」

中に居た人物達は、当然の事ながら、目を見開き仰天していた。  
だが数人はあまりの出来事に、全く反応出来ないでいる。

もし今の僕が同じ状況に陥った場合、おそらく後者だろう。

「アモスって言ったら分かるかあ？」

恭介さんは余裕の笑みを見せながら、自分達が何者か名乗った。

すると中に居た人物達は、先程まで臨戦態勢を取っていたにも関わらず、アモスの単語を聞くなり、みるみる逃げ腰へと変わっていった。

「なっ……！」

「お前達、何故こういう状況に陥っているか、分かるな？」

誠さんが歩み寄り、犯罪者グループに自分達のかした行為を、おそらくは再認識させる目的で、質問する。

「く、くそっ、やっちゃまえ！」

中からリーダーらしき人物が現れ、声を発する。

「でも相手はあのアモスだぜ！？」

やはり相手がアモスとあってか、命令におとなしく従うものは一人としていなかった。

「馬鹿野郎！ アモスが相手だからこそ逃げられないんだろぅが！  
！ 幸い相手は三人だ。全員で掛ければ負けねえよ！！」

ほんの少し、グループの人物達は考え込んだ。

そしてリーダーの言っている事が正しいと判断したのか、グループの人物達は一斉に襲いかかってきた。

「ちっ！」

恭介さんはそれに素早く対応し、容赦なくその拳を、集団の中の一人に叩きつけていた。

拳を食らった人物は呻き声を上げる事すら叶わず、床に伏せ、それ以降起き上がる事はなかった。

そんな仲間を気遣う事もせず、グループ全員が或いはその自らの拳を、また或るいは隠し持っていた刃物を、恭介さんに対して振るう。

しかしその一つも恭介さんに当たる事はなく、ただの一撃で全員が全員、意識を失わされている。

「すごい……」

目の前で繰り広げられる光景を、僕は呆然と見ていた。行われている行為自体はただの喧嘩と言ってもいい。

ただ恭介さんだけは、一人で戦争をしているかのように、無類の力を発揮させていた。

恭介さんが犯罪者グループとやりあっている中、一つ、建物の二階へと上がる人影があった。

それは、先程のリーダーらしき人物だった。

「追うぞ、才人！」

「はい！」

誠さんに言われ、まだその形を形成させていない剣を片手に、人影の後を追う階段へと向かう。

階段には僕の方が近かった為、僕が先頭する形となった。

そして階段を上り、今まさに上りきろうとしたその瞬間、耳を塞ぎたくなるような音が鳴った。

それと同時に、僕の目の前に何かが横切り、直ぐ横の壁に減り込んだ。

「うわっ!？」

それを何かと判断するよりも早く、僕は素早く階段から下へと跳び降りる。

そして改めて何かが減り込んだらしい壁を見ると、見た記憶がなくても分かる。

銃痕だった。

「どうした、才人!？」

先程まで前を走っていた人物が、突如後ろへ跳んだ事に異変を察知したのか、誠さんは僕に何事かと聞いてくる。

「誠さん、あのリーダーらしき人物、銃を持っています!」

「く、来るんじゃない! 来たら撃つぞ!？」

僕の言った事が正しいと証明するかの様に、男は叫ぶ。

「誠さん、どうします!？」

僕にはこういう時、どうすればいいか分からない。

それならば、と僕よりも経験のある誠さんに指示を仰いだ。

「銃、か」

少し不味いな、と誠さんは小さく舌打ちをした。

「銃を持っている可能性も予想していたが、ここで出されるとはな……」

誠さんは少し下を俯いたまま、手で口を覆い、考え込んだ。

近くではまだ恭介さんが戦っていた。

何人もの声が乱雑し、それがまだ争っている事を悟らせた。

そして誠さんは手を口から離し、顔を上げる。

「ならここは、俺が行こう」

「だ、大丈夫なんですか？」

「安心しろ、俺はマジシャンだ。俺自身も、武器を持っているんだよ」

その言葉が意味する事とはつまり、魔法を使う、という事だ。

「誠さんの魔法って……？」

「見れば分かるさ」

誠さんは何の躊躇もなく階段が上がっていく。

心配かどうかと問われれば、当然心配だと答える。

だが誠さんの自身に満ちた表情を見ると、任せてもいいと、そう思えた。

「お前、来たら本当に撃つぞ!？」

銃なんて何の問題もないと向かってくる誠さんに、男は恐怖をあらわにしていた。

「撃つなら、撃てばいい」

誠さんは余裕の表情で、相手を挑発する。

その挑発に、男は応えた。

「し、死ねええええ!!」

男の両手の人指し指が、手に持っていた銃の引き金に、力を加える。それと同時に誠さんは右手を自分の体の前で、大きく横に振る。

すると引き金がかかれ、銃弾が飛ぶよりも先に、男の持っていた銃の上半分が、切断された。

「なに!？」

男が突然の事態に動揺し、大きな隙を見せた。

そこを誠さんが、人間ではあり得ない程の速さで男に迫り、取り押さえる。

僕は僕で、予想外の出来事に脳が判断しきれていなかった。

「誠さん、今の何ですか!？」

「魔法だよ。俺の魔法は、風を操る魔法なんだ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、それでまず風の刃を作り、銃を切り裂いた。そして次に風で急加速して、相手に近づいた、というわけだ」

それならば先程の異様な速さも納得だ。

「でももし撃たれていたら、どうしてたんですか？」

「様子からして明らかに素人だった。素人がまともに銃を扱えるわけ、ないだろう？」

……凄い。

誠さんも恭介さんも、僕が予想しているよりも遥かに強かった。

僕が足枷になるかもしれないとか、そういうのは全く気にする必要はなかった。

僕は二人の強さに、感激していた。

その後、誠さんと共に下へと降りると、既に恭介さんが全員気絶させていた。

そして犯罪者グループは全員、僕ら、というよりもシロクロコンビによって捕まえられる事となった。

「よくやったわね。私の思った通り、何の心配もなかったみたいね」

アモスへ帰り、葵さんに報告すると、称賛の言葉が送られた。

「それで、誠と恭介の活躍は聞いたけど、才人はどうなのよ？」

「え……？」

僕の、活躍？

「……ん？」

僕今回、何か活躍したか？

一人や二人しか倒せない以前に、一人もまともに相手にしていなかった。

はつきり言って、僕が居ても、何の意味もなかった。

「まさか、何もしてないの？」

「え、あ……はい」

「ま……と」

葵さんは顔をゆつくりと、誠さんの方へと向かわせる。

誠さんはビクツと体を震わせた。

「何の為に才人を行かせたと、思ってるの？」

「あ、いや、それは、その……」

しどろもどろになる誠さん。

この時点で、僕は誠さんがどうなるか、悟ってしまった。

「おい、才人。俺らに行くぞ」

恭介さんは僕の肩を掴み、立ち去ろうとする。  
僕もそれに続く。

「恭介も才人も、ちょっと待ちなさい」

今度は僕と恭介さんが、二人して体を震わせる。

「な、なんででしょうか……？」

恐る恐る葵さんに問う。

その答えは、予想通りのものだった。

「あなた達だけ見逃すと、思ってるの？」

僕と、誠さんと、恭介さんは、三人仲良く——しばかれた。

## 第十六話「再会、そして後悔」

シロクロコンビと共に、仕事へいったあの日から数日。

僕はもう何度目かも分からない、アモスへ行くという行動のついでに、街をうろついていた。

基本的に暇があれば訓練をする気である。

今の僕には、それしかする事がないのだから。

「——とは言っても、どうしたものかなあ」

訓練ばかりしていたところで、現状は何も変わらないのは分かっている。

それよりも記憶を取り戻す方法を考えるべきだ。

考えるべきなのだが、何かすれば確実に元に戻る、とかいう方法があるわけでもなく。

研究所から持ち帰った本は、相も変わらず固く閉ざされたまま、開く様子は微塵もない。

結局は低回しているだけだった。

「はあ……ん？」

溜息をつき、再び顔を上げたところで、一人の人物を見つけた。人混みの中でも映える金髪と、その美しい顔。

間違いない、彼女は——

「アシュリー！？」

僕が数日前出会った、アシュリーだった。  
アシュリーは僕の声に反応し、振り向いた。

「え？　さい、と……？」

僕と再び会う事が予想外だったのか、アシュリーは目を見開いた。

「うん、久しぶり」

長ったらしく話しているつもりはなかった。

少しの間世間話でもし、直ぐにアモスに行こうと考えていた。

「丁度良かったわ。ちょっと協力してくれる！？」

「へ？」

だからこんな事になるなんて、思ってもいなかった。

突如アシュリーに腕を引っ張られ、それと同時に腕に抱きつかれた。

「な、なな、何を！？」

「いいから！」

ただでさえ女性にそれほど慣れているわけではない。

その上抱きつかれるなんて、以前の手を繋いだ時とは、比べ物にならない気恥ずかしさだった。

アシュリーの大きいとも小さいとも言えない、ふくよかな胸が、僕の腕に抱きついた事で押し潰されている。

その感触と光景に、鼻血が出そうになった。

「アシュリー、待ちなさい！」

僕が気恥ずかしさで悶えていると、一人の男性が僕、というよりはアシュリーの元へと、やってきた。

「どうしてそんなに避けるんだい？」

男性は悲しそうな表情で、アシュリーに問う。

「えっと……誰？」

「お父様」

「お父様あ！？」

お父様って言う人、初めて見た……じゃなくて。目の前男性は確かにアシュリーと同じ金髪で、顔もどこか似ているところがある。

だが男性の年齢は、どれだけ多く見積もっても、精々二十代後半程にしか見えない程の若々しさだ。

お兄様、の聞き間違いじゃなかるうか？

「ん、誰だい君は？ 親子の間に入らないでくれないか？」

聞き間違いじゃなかった……。

「それに、君にお父様と言われる筋合いはないよ。私にはリアトリスという名前があるんだ」

アシュリーのお父様らしい、リアトリスと名乗る人物は、隠す気もなくあからさまに、僕を邪魔者だという顔で見てくる。

「あ、いや、僕は……」

「私の彼氏。これからデートだから付いて来ないでくれる？」

「なにい！？」「」

あまりの爆弾発言に、声を上げる。

しかもお父様に至っては、顔色を真っ青にし、今にも倒れそうで心配になる。

「あ、アシュリー？」

「お願い、あわせて」

僕が問うよりも早く、耳元に呟いてくる。

そして一応だが理解した。

事情は分からないが、アシュリーはこのお父様から逃げ出したいみたいだ。

「ど、どういう事だい、アシュリー？ パパに内緒で彼氏なんて……」

パパ……。

もうどこから突っ込んでいいのか分からない。

「不良に絡まれた事があって、その時に助けてもらったの。それ以

来付き合っているわ」

前半は嘘ではないから困る。

「そ、そんな……」

最早この世には絶望しかない。

そんな表情でお父様はその場に崩れ落ちた。  
流石に可哀想な気がしなくてもない。

「さっ、行きましょう」

アシュリーは気に留める様子もなく、立ち去ろうとする。  
すると、先程まで崩れていたお父様が突然立ち上がった。

「待ちなさい。待って。待ってください、お願いします!」

あまりの必死さに、可哀想を通り越して、哀れだ。

「……何ですか?」

それでもアシュリーは止まりこそしたものの、振り向きはしなかった。

アシュリー、それはいくらなんでも酷いぞ……。

そして僕の存在が完全に無視されている事に薄々気づき、泣きそっ  
だ。

「えっと、その少年——」

「才人です」

良かった、無視されていなかった。

「才人……！？」

僕の名前を聞くと、お父様は何に驚いたのか、声を上げた。

「えっと、何か……？」

もしかして、記憶喪失になる前に知り合った事あるのか……？

「いや、何でもないよ……。それよりも才人君。君はアシュリーと付き合っているらしいが……」

嘘ですけどね。

「私やアシュリーがどういう身分の者が、分かっているのかい？」

「ええ、まあ……」

アシュリーがお嬢様だという事は聞いた。

だがおそらく聞いているのは、そういう事ではないのだろう。ないのだろうけど、取り合えず知っている事にした。

「なら分かるだろう？ 君がどういう人物か知らないが、身分違いというものだ」

いくらアシュリーと別れさせる為とはいえ、その物言いには流石にカチンときた。

何か反論しようと思ったその時、

「待つて下さいお父様！」

アシュリーが割って入ってきた。

「アシュリー、彼がどれだけ優しかろうと強かろうと、身分が違うという事実には変わりはないんだよ？」

「いえ、そんな事ありません。お父様は知らずに言っているのです。ようから、言っておきますが、才人はこう見えてこの若さでアモスに所属しています」

こう見えてって何だよ……。

僕そんなに頼りない見た目か？

「それは本当かい！？」

アシュリーの言葉に、お父様は思わず驚き、こちらを改めて見直す。というより、今初めてまともに見られたかもしれない。

「は、はい……」

持っていたアモスのカードを、取り出し見せた。

「これは……確かに本物だ。まさか君の様な若さで入っているなんて、驚いたよ」

先程までの少し見下した様な態度が、一変してなくなっている。その事にこちらの方が驚いてしまう。

「どう？ お父様、これでも身分違いかしら？」

「確かに……。身分違いというのは撤回するよ。悪かったね」

「い、いえ……」

こつも急に態度を変えられると、こつちが困ってしまう。

「だが、それとこれとは話が別だよ。アシュリーとの交際は認めない！」

あ、結局そうなるんですね……。

予想はしていたが、いい加減面倒くさいと思う。  
というか何ですかそのポーズ。

「異議あり！」みたいな、感じの。  
本当にこの人、アシュリーの父親か？

「じゃあ、どうすれば認めてもらえますかね……？」

もう何でもいいから、さっさとアモスに行かせてくれ。  
今なら大体の言う事なら聞いてしまいそうだ。

「そうだな……」

お父様は暫くの間、手を顔に当てながら、考え込んだ。  
そして、改めてこちらを見、こつと言った。

「私はね、娘を誰かに嫁がせるとしたら、娘を守れる、頼りのある  
男性の元へ嫁がせたいと思っているんだ」

「はあ」

何故に結婚の話になっているんだ？

自分で話をかなり飛躍させている事に気付いていないんだろうか。

「だから君が頼りのある男性かどうか、試験させてもらつよ」

「ええええええ！？」

「なに、心配する事はないよ。アモスに入っているのなら、それ相応の実力はあるんだろう？ なら大丈夫さ」

「それは、その……」

相応の実力を持っていたのは前の話であつて、今はもう目も当てられない程に弱くなっている。

どういった試験かは知らないが、認めてもらえる気がしない。

アシユリーに救いを求めてみても、

「それならいいわね。分かりました。その試験、受けます！」

この様に、受ける気満々だ。

頼むから少しは僕の意味と言つものを尊重してほしい。

「では早速準備するのでしょうか」

お父様はそのまま去つていった。

「期待、してるわよ？」

「……はい……」

うう、何でこんな事に……。

そこから先の事は、あまり記憶に残っていない。

気が付けば近くにある、アシユリーの別荘らしい場所に呼ばれ、その庭に立たされていた。

庭とは言っても、お金持ちとあってか、その広さはとてつもなく広大だ。

眼前には、僕と然程歳が変わらない見た目をした青年がいる。

確かお父様の知り合いの息子で、歳にしては優秀なマジシャンだとかどうか。

僕はその青年と、よく分からないが決闘する事となった。

勝負の方法は人命に関わらなければ基本的に何をしてもいい。

魔法も当然使っていい。

武器は鈍器のような、用法上の凶器までなら許可された。

だがグロウシエイドは刀や鉄砲等、性質上の凶器なので、使えない。もつとも、まともに扱える気がしないのだけだ。

しかも僕は記憶喪失の所為で、魔法も使えないときた。

つまり、素手で戦って、負かさないといけない、という事だ。

「本人が負けを認めるか、私が勝負は決したと判断を下したら、その時点で終わりだ。さあ、才人君。君の力を見せてもらおうよ」

そんな期待されても困るんですけど……。

本当、何でこんな事になったんだ？

僕の予定だと、今頃アモスで訓練を受けているはずだったというのに。

アシユリーに話しかけた事が間違いだったんだろうか……？

「おい！」

後悔で落ち込んでいる中、いきなり呼びかけられた。

呼んだのは、これから僕と戦う事になっているらしい青年だった。

「は、はい！」

「俺様もよく分かってないけどよ。やるのか、やらないのか、どっちなんだ！？」

いい加減待ちくたびれたのか、いらついた顔でこちらに話しかけてきた。

「え、えっと……」

チラリと横目でアシユリーを見る。

アシユリーは自信満々の表情と、期待に満ちた目でこちらを見ていた。

この時点で、僕には逃げ場がないと、悟ってしまった。

「やり、ます」

僕の返答を聞き、青年はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「ハッ、じゃあもう、やるぜ？」

「え……？」

何を、と聞くよりも早く、身体が反応した。

地面を蹴り、右へ跳ぶ。

直後、元々自分が居た場所には、青年が殴りかかって来ていた。

僕がいなくなった事で、代わりに殴られたのは、大地だった。

青年がその拳を叩きつけた瞬間、大地が唸り、その体を割っていく。そして、小さなクレーターが、出来あがった。

「いいっ！？」

「ほう、よく俺様の攻撃を避けたな。流石はアモスって事か……」

青年は僕に避けられたというのに、悔しがるどころか、むしろ喜んでいようだった。

「ハッ、おもしれえ……」

いや、こっちは面白くないから！

「俺様の名前は蘇芳すおう 鷹たか。今からお前を倒す奴の名前だよ！」

言い終わると同時に、蘇芳と名乗る青年は、再び殴りに掛かってくる。

「何で……こーなるの……!？」

僕の叫び声は、ただただ虚しく、辺りに響き渡っただけだった。

## 第十七話「少年の感情」

アシュリー

目の前で、二人の男性が戦っている。  
ある意味では私をめぐって、という事になる。

戦っている二人の内、片方は蘇芳鷹と言って、私の遠い親戚のようなものだ。

もう片方は、白銀才人と言う、最近知り合った不思議な青年だ。

そんな二人が、今戦っている。

鷹は確かに優秀なマジシャンだけれど、それはあくまでその歳にしては、という意味だ。

アモスに入るほどの実力は、ハッキリ言って、ない。

つまりまともに戦って鷹が才人に勝てる可能性は、万に一つもない。

ないはず、なのに、

「ひいつ!?!」

「オラッ、逃げんな!」

「逃げるに決まってるでしょうが――!」

どうして才人の方が、逃げ回っているのだろう。

「一度信じた私が言うのもなんだが、彼は本当にアモスに入ってい

るのかい……？」

先程まで信じていた父ですら、今は疑いの目を向けている。

「お父様も見たでしょう？ それともあれが偽物だったとでも？」

私にも把握出来ていないが、強気に出る。

信頼している、これで良い、これが普通だ。

そういった態度を取っておかないと、嘘の交際を認めて貰えなくなってしまうかねない。

まあ、認めて貰えなかったら貰えなかったで、手はあるのだけど。

「いや、そんな事はないのだが……」

確かに父の気持ちも分かる。

アモスに入れる程の実力者が、高々少し強い一般人から逃げ回っているなんて、周りに言ったところで誰も信じないだろう。

それほどまでに強さの世界が違うのだ、アモスは。

もしかして親のこねで入ったとか、そういう類のものなんだろうか。いや、アモスはそんなもので入れる世界じゃない。

じゃあ一体何で……？

考えても、考えても、納得のいく答えは全く出なかった。

才人と言う人間は、本当に分らない。

アモスにまで入っていて、実力は一般人とは比べ物にならないほどのはず。

はずなのに、それを自慢する事も、偉そうな態度を取る事も全くな

い。

今だってその力を見せずに逃げ回っている。

その上、変に律儀というか、お人好しだ。

今回の事だって、断る事は出来たはずなのに、私に付き合ってくれている。

本当に、不思議……。

「えつとだね、アシュリー……」

「……何ですか？」

「分かっていると思うが、彼が負けた場合、交際は――」

「分かっています。承知していますから、黙って見ていて下さい」

今の私には、信頼する事しか出来ない。

ならその信頼を、余す事なく注ぐ事が、私に出来る最良の選択だ。

「そうかい。それならいいが……」

「ところで、お父様」

「何だい？」

「この庭、誰が後処理するんですか？」

鷹が魔法を使う事によって、庭の地面は抉れ、草木は散り、元の綺麗さなど、微塵にも残っていなかった。

いくら父がだらしのない人物でも、全くの考えなしではないはずだ。ちゃんと後の事も考えて――

「ん……まあ、どうにかなるんじゃないかな？」

「……」

才人

「ひいつ!？」

「オラッ、逃げんな!」

「逃げるに決まってるでしょうが――――!」

もう何度目かも分からない、同様のやり取り。

いい加減諦めてくれないかと、叶わないと分かっているにもかかわらずにはられない。

だが同様のやり取りをしている中で、分かった事がある。

蘇芳と名乗る青年は、魔法を使っている。

おそらく身体能力の強化か、触れた物を破壊する等といった、そういう類の魔法だろう。

だから彼の攻撃を、絶対に食らうわけにはいかない。

もし食らってしまったら最後、僕の意識は間違いなく、シャットダウンしてしまうだろう。

危険な魔法だが、唯一安心出来る点があるとすれば、使用者が使いこなせていない事だろうか。

魔法を使っている分、破壊力等は恭介さんよりも凄まじいのかもしれない。

でもその攻撃は単調だ。

おそらくその破壊力に怯え、反撃される事があまり無かったのだろう。

葵さんの攻撃に比べれば、十分に避けられる。

もつとも、それはあくまで、拳は、という話だ。

「ぐっ——」

彼が大地を抉り、それによって吹き飛ぶ小石や、砂粒までは避けられず、体に直撃する。

それが一度や二度の事ならば、さして支障はない。

ほんの少し、痛いと感じる程度だ。

しかし何度も、となるとその度に疲労が蓄積し、少しずつだが、動きが鈍くなっていくのが分かる。

不味い、な……。

そろそろ何か得策を見出さないと、いつ攻撃を食らってしまうか分からない。

「おい！」

先程まで嵐のごとく続いていた攻撃が、突然止んだ。

叫んだ蘇芳の表情を見ると、最初は楽しんでいた表情が、イラついたものへと変わっていた。

「何……ですか……？」

疲労により、呼吸もままならない。

近くにあった木まで寄り、体を預ける。

「お前、何で魔法使わねえんだよ!？」

「どういふ——意味ですかね……」

「どういう意味も何もねえよ! さっきから逃げるだけで……俺様を馬鹿にしてんのか!？」

「それは……」

舐められていると、そう思ったのだろう。

相手からすれば、そう考えるのも当然の反応かもしれない。

何故なら相手は、僕が魔法を使えない事を知らないからだ。

実はルーザーで、身体能力だけでアモスに入ったという可能性は、体格から見て考えて貰えなかったのだろう。

魔法が使えない事を話すわけにもいかず、どう返答すべきか思考に思考を重ねていった。

そしてその結果、行きついたのは、

「それは——あなた如きに、わざわざ魔法を使うまでもありませんから!」

これだった。

よし、完璧!

「ふ、ざ、け、やがってえええええええ!!」

だが思いの外、相手は先程以上にその怒りを、高まらせていた。  
な、何でだ……!!?

「死ねえ!!」

「うわっ!？」

憤怒の形相で迫り、攻撃して来る。

怒りで我を忘れている分、簡単に避ける事が出来た——筈だった。

外れた攻撃は、僕の体を預けていた木に当たり、代わりにその体を、  
脳にまで響く轟音と共に散乱させた。

「な!? ——ぐあっ!!」

明らかに威力が、先程までと全く違う。

凄まじい勢いで散っていく木片を、避ける事が出来なかった。

あまりの衝撃に吹き飛ばされ、それと同時に服も裂ける。

木片は身体の様々な場所に刺さり、全身のほぼ半分が、赤く染まった。

「才人っ!!」

遠くでアシユリーが叫んでいた。

そりゃあそうだろう。

いきなり全身が血まみれになって、心配しない方がおかしい。

「大、丈夫……」

本当は全然大丈夫ではない。

痛い、泣き出しそうな程に。

葵さんに殴られた時とは全く違う。

体中が悲鳴を挙げている。

思えば初めてかもしれない、記憶を失ってから血を流すのは。

一体どうしてこんな事になったのか。

自分の不運さに、憐みを感じる。

「これでえ——！」

蘇芳はこちらの事情など気にもせず、とどめを刺しに来ていた。

彼自身も先程の木の散乱で体に怪我を負っている筈なのに。

全く、どうしてこうも僕の周りには、人の事を気にしない人が多いのだろう。

「全く……」

誰にも聞こえない声で、呟く。

記憶を失ってから、僕は引つ張り回されてばかりだ。

確かにいくつかは自分から行動した事もある。

でもそれは、既に制限されている行動範囲の中で、僕が選んだというだけだ。

僕の頭は未だに整理がついていないのだから、少しぐらい、待っていてくれてもいいじゃないか。

足元にあった、握り拳程の大きさの石を拾う。

「どいつも、こいつも——」

理不尽だ。

本当はアモスがどうだとか、記憶がどうだとか、今はどうでもよかった。

取り合えず何よりも先に、落ち着きたかった。

それだけなのに……。

どうしてこうも、落ち着かない生活をしなくちゃいけないんだ！

「終わりだぁ！」

「ふざけんなあああああああああああああああ——！」

殴ろうとしていた蘇芳の右手に、拾い上げた石をぶつける。

木や、地面と同様に、石も激しく、そして粉々に散る。

それは僕と蘇芳、両方の体にぶつかっていく。

「ちいっ！——！」

予想外の反撃に、蘇芳は怯んでいた。

僕も十分に痛いのだが、最初から分かっていただけ、怯む時間は短かった。

怯む蘇芳の顔面に、今まで感じてきた理不尽への怒りを、全てぶつけた。

「ぐおっ！？」

蘇芳の体は吹き飛び、自分で作っていった荒れ地に、倒れ伏した。

「この野郎……!!」

だが完全には倒せていなかった。

蘇芳はより一層怒りの感情を高ぶらせ、立ちあがろうとする。

「そこまで!!」

そこで、アシュリーの父、リアトリスから制止の声かけられた。  
お父様はそのまま、蘇芳の元へ歩み寄った。

「もう分かったよ。鷹、悪いけど、君の負けだ」

蘇芳は考えもしていなかったのであろう言葉に驚愕する。

「ふざけんな！ 俺は、俺様はまだ——」

「もう無理だ。いくらなんでも君は、自分の体を気にしなさすぎる」

確かに、僕と同じぐらい破片等を浴びていて、これ以上派手に動き  
回るのは危険だ。

そもそも今の今まで、どうしてあれだけ動いていたのか、不思議で  
ならない。

「それに、彼はまだ魔法を使っていない。つまり、本気を出してい  
ないんだよ」

「っ!？」

本気を出していない、その事実にも、蘇芳は激しく落胆した。  
魔法を使えない以上、僕は本気を出していた事になる。  
だがそれを今ここで言うのは、賢い選択ではない。

「分かるね？ 君の、負けだ」

「ち、くしょおおおおお!!」

そうして最後、蘇芳は何も喋らなかった。

蘇芳の状態を確認し、お父様は、今度は僕の元へとやってきた。

「おめでとう。君の勝ちだ。君の方が傷も酷いからね。先に手当てしよう」

「ありがとうございます」

傷も、勝ち負けも、今はどうでも良かった。

今までのストレスを全部ではなくても、発散する事が出来て、少し清々しさを感じていた。

その清々しさに、しばらく浸っていたと思った。

「どうも様子がおかしいと思ったら、まさか魔法無しで勝つ気でいたとはね。恐れ入ったよ」

「いえ、そんな……」

もしここで僕が魔法を使えない事を話したら、お父様はどういう反応をするのだろう。

やはり娘は任せられないと、交際をより一層反対するのか。  
それとも、魔法無しでも相当な実力である事に、賛美の言葉を送ってくれるのか。

どちらにしても、面白い反応が見られそうだ。

そんな事を考えていると、自然と笑みがこぼれていた。

「ふっ、余裕そうだね。じゃあ治療はなくてもいいかい？」

「それは困ります！！」

治療もなしに家に帰ってしまったえば、瑠璃が心配する。

姉さんに至っては気絶するんじゃないだろうか。

そもそも家に帰る事すら困難だ。

「ははっ、冗談だよ」

慌てる事が分かっていたのか、お父様は軽く笑い飛ばす。

「それじゃあアシュリーに案内してもらいなさい。私にはまだする事があるからね」

「はい、分かりました」

おぼつかない足取りで、アリユリーの元まで歩く。

「ちょっと、大丈夫？」

あまりの有様に、アシュリーは心配そうに声を掛けてくれた。  
人として当然なのかもしれないけど、その優しさに、思わず涙が出

そうになった。

「ほら、行くわよ。歩ける?」

「うん、なんとか……」

そして僕は、アシュリーに連れられ、治療を受けさせて貰った。

リアトリス

「……悔しいかい?」

アシュリー達が居なくなっただのを見届け、私は彼、鷹にそう話しかけた。

「悔しくないわけ、ねえだろ」

先程まで怒り狂ったりしていたものの、今はもうすっかり落ち着きを取り戻していた。

「相変わらず君は口が悪いね」

小さい頃から見てきたが、この口の悪さが治る様子はない。  
人の言う事も素直に聞かず、自分の子供だったら体罰を与えていたかもしれない。

「強く、なりてえ……」

それは心からの叫びだろう。

鷹は喧嘩等を、それはもう頻繁にしていたが、負けた事が無かった。そんな彼が、初めて負けたのだ。彼の言う通り、悔しくないわけがない。

「なら、どうすればいいか、分かるね？」

鷹は無言のまま、小さく頷いた。

才人と言う少年に感謝しなくてはならない。これedyouやく鷹は、本当に優秀なマジシャンとして、成長するかもしれないのだから。

「しかし、才人、ねえ……」

ある一人の人物を、頭に浮かべる。

「彼の言う通り、面白い子だね」

一人の人間に、ここまで興味を持ったのは、久しぶりかもしれない。この興味が、期待通りなのか、期待外れなのかは定かではない。だが久しぶりに感じた興味の対象に、心を躍らせた。

## 第十八話「変化は常に」

「いたたたたたたっ!？」

「ほら、じつとする!」

僕は今、全身の痛覚に喚きながらも、アシュリーから治療を受けている。

どうやら見た目ほど大した傷ではなかったらしく、簡単な治療で済まされた。

「全く。よくあれだけ血流しておいて、貧血にもならなかったわね」

「同感」

もしもなっていたら、今頃負けていただろう。

そうでなくてもお父様が止めてくれていなければ、負けていたかもしれないというのに。

本当に運が良かったとしか言いようがない。

いや、こんな状況に陥る時点で運が悪いのか……？

「と、とにかく勝ってくれた事には、その……一応、感謝しとくわ。ありがとう……」

アシュリーは照れ臭そうに、手でその美しい髪を、クルクルと弄りながらそう言った。

「へ?」

「だから、えつと、お礼……とか……」

「いや、待って。何の話？」

「……え？ 何って、交際の……」

「……ああ、そういえばそんな理由で戦っていたんだっけ」

すっかり忘れていた。

傷の痛みやら、戦いが終わった安堵感やらで、そんな事はずっと記憶の外に行っていた。

僕の言葉を聞くと、アシュリーの顔が途端に呆れた表情へと変わった。

「あなた、馬鹿？」

「ち、ちがうよ!!」

多分。

完全に否定しきれないのが悲しい。

「やあ。付き合っているだけあって、仲は良いみたいだね」

そんな風に話していると、今回の件の張本人とも言える、お父様がこちらにやって来た。

「才人君、傷は大丈夫かい？」

「あ、はい。そんなに大した傷じゃなかったみたいです」

痛みなどはあるものの、動かす分にはさして支障がないと、体の感覚で分かる。

「そうか、それは良かった。流石はアモスに入っているだけあるね」

「お父様、そんな社交辞令は結構です。それよりも――」

長つたらしい話は嫌いなのか、アシュリーは簡潔に話を終えようとする。

「ああ、言わなくても分かるよ。交際について、だね？」

「……はい」

考えている事など、全てお見通しといった態度にアシュリーは少し、不服そうにしていた。

「確かに才人君は鷹に勝った。その強さは認めるよ。だが、それだけではまだ交際は認めない！」

「お父様、それでは約束が違います」

お父様の発言に驚愕しながらも、アシュリーはあくまで食い下がる。言葉は静かだが、明らかな怒りの視線を、お父様に向けていた。

「アシュリーこそ何か勘違いしていないかい？ 確かにパパは試験をすと言ったけれど、試験があれで終わり、とは一言も言った覚えがないよ」

まるで子供のような言い訳に、僕は怒るよりも何よりも、呆れるしかなかった。

それと同時に、それ程までに娘の事を思っている父親の愛情に、心温まるものがあつた。

しかし当の本人は、意地悪されているとしか、思っていないのだから。

愛情と言うのは、注がれている本人は存外気付かないものだからだ。

「では、最終的に何を、どうすれば、認めてもらえるのですか」

「そんなに怒らなくても次で最後だよ。なに、簡単さ。今度はアシユリーが才人君と戦えばいいのだからね」

「……………はあ？」

一体この人は、いやこの親子は何度、僕を驚かすと気が済むのか。

「もしいざという時、女性に守られる様な男性は、交際相手にはふさわしくない。才人君もそうは思わないかい？」

「え？ ま、まあ、そうです……………ね？」

いきなり話を振られた事に、若干戸惑つたものの、お父様の言う事に納得出来るものがあつたので、同意した。

「だからアシユリーと戦い、アシユリーに勝つたなら、今度こそ交際を認めよう」

こちらもその考えは理解出来る。  
納得もいく。

だが、

「あの、リアトリス……さん」

耳打ちをする為に、お父様の耳元へと歩み寄る。  
そして、囁く。

「もし、アシュリーがわざと負けたら、どうするんですか？」

囁いた途端、お父様の顔は「しまった」といった表情に変わった。  
阿呆だろ、この人……。

「だ、大丈夫だよ、才人君。アシュリーは負けず嫌いなところもあるからね。そういう事には手を抜かないさ」

「じゃあ、僕がアシュリーを傷つけても、いいんですか？」

「だ、駄目だ、駄目だ、駄目だ！！ あゝ……傷つけずに勝ちなさい！！！」

無茶言うな……。

「それに、アシュリーって優しいですよね？」

「ああ、優しいね！」

何で自信満々なんだ……。

僕もどうせこう答えてくるのが、分かっただけで質問したのだけど。

「そんな優しい子が好きな人と戦いたいと思いますか？　もしかす

ると戦わせようとした、という理由で『お父様何て大嫌い!』ってなるかもしれませんよ」

「っ!？」

実際に言われる事を想像したのか、お父様の顔は最早泣きそうになっていた。

流石にちよつと言い過ぎたかもしれないと、後悔する。

「分かった、もういい。アシュリーとの試合は無しにする!」

だがその甲斐はあったようで、概ね期待通りの結果に至った。

再びアシュリーの元へと戻る。

「あなた、一体何言ったの……?」

想像もしていなかったであろう事態に、流石のアシュリーも動揺していた。

「問題点の指摘を、少々」

「どういう事?」

「あゝ、気にしないでいいと思うよ」

「……分かったわ。気にしないで置いてあげる」

アシュリーはあくまで公言しようとしないうちに、不満を募らせている様子だった。

「それよりもお父様。結局交際は認めて貰えますか？」

「む、むむ……」

一体どうしたものかと、お父様は困り果てていた。

一度アシュリー側に味方した以上、これからもそうするつもりだが、お父様の方にもフォローを入れるべきか、悩む。

「……仕方がない。今だけは、認めよう……」

そして考えに考え込んだ末、遂に、お父様の方が折れた。

「い、今だけだからね！？ パパは完全に認めたわけではないからね！！」

せめてもの抵抗。

しかしそれすらも、アシュリーは軽く払い飛ばした。

「分かっています。さあ、才人。お父様にも認めて貰えた事だし、デートに行きましょうか」

アシュリーは僕の腕に、見せつける様に抱きつき、そう言った。

「え！？」

アシュリーの突然の行動と発言に、お父様ではなく僕が驚き、声を上げる。

「だって付き合っているんですもの。デートをしたところで、何も

おかしくはないでしょう?」

「それは、そうだけど……」

それはあくまで、本当のカップルならば、という話だ。

嘘の交際で平静とした態度でデートを公言出来るほど、僕は出来た人間ではないし、女性慣れもしていない。

チラリと横目で、お父様を見る。

お父様は悲しみや怒り、様々な感情が入り混じった何とも言えない表情で、僕とアシュリーを見ていた。

その視線に耐えられなくなり、顔を背ける。

「どうしたの? 行かないの?」

おそらくアシュリーには僕がどう答えるか、分かっている質問しているのだろう。

「行き、ます……」

このような空間に、いつまでも耐えて居られるほど、僕は強靱な精神を持ち合わせていない。

「良かった。じゃあ早速行きましょう」

「アシュリー……!」

娘を取られたショックに、お父様は今度こそ泣き崩れてしまった。そんなお父様を見向きもせず、アシュリーは僕を引っ張り、外へと連れ出した。

綺麗な薔薇には棘がある、というのはまさしくこの事を言うんだろ  
うか……？

いや、微妙に違う気がする。

外へと連れ出された後、僕はアシュリーと二人、並んで街を歩いていた。

「あのさ……」

その間終始無言だったのだが、別に無言の空間が辛くて話し掛けたわけではない。  
ただ少し、言っておきたい事があっただけだ。

「……何？」

「流石にちょっと、可哀想だった気が……」

今頃どうしているのか、怖くて想像もできない。

「別にいいのよ。昔からあんな感じだったもの」

昔から、と言う事は娘に近づく男達には皆、あんな調子だったのだ  
ろうか。

「私はよく覚えてないけど、私が三歳ぐらいの頃から、近づいてく  
る男の子は払っていたらしいわよ。払わなかったのなんて、鷹ぐら  
いじゃないかしら？」

流石にそれは、親として正しいのか、どうなのか……。

ここまで理解に苦しむ人物も、そうは居まい。

「本当、昔から変わってないわ。反抗期でなくても鬱陶しく感じるくらい……」

と、言葉は否定的なのだが、その表情は本当に微かにだが、笑っていた。

おそらく本人には自覚していないだろう。

それで、口ではああ言っている、父親を嫌っていないのだと悟る事が出来た。

「何、その顔。妙に腹立つんだけど」

「え、僕何か変な顔してた？」

「ええ、とっても気持ち悪い顔していたわ。……ってこのやり取り、前にもあったわね……」

「確かに……」

以前にもあった同様のやり取りに、二人して既視感を感じた。

しばしの沈黙。

しかしそれは、アシュリーによって直ぐに破られた。

「そういえば、才人はこれからどうするつもり？」

「どうする、って？」

「本当は何か、用事あったんでしょう？ 私が無理矢理巻き込んだ

から、今はここにいるけど」

確かに、当初の予定では僕はアモスに行くつもりだった。そのつもりが、様々な出来事が折り重なり、今に至っている。

ただ、アモスには本来行かなくてもいい

自主的に葵さんに訓練をつけてもらっているだけだからだ。

そう、だから必ずしも行かなければならない、と言う事ではない。

葵さんに、連絡さえしていなければ。

「——とまあ、その、色々ありまして……遅れました。ゴメンナサイ」

正座をさせられたまま今までの経緯を、掻い摘みながら葵さんに説明した。

「へえ、人を散々待たしておいて、そっちは彼女とイチヤイチヤしていたわけ……」

「いや、だから彼女じゃありませんって」

因みにあの後、アシュリーと別れ急いでアモスに向かったものの、許しては貰えなかった。

まず着いた時点で一発、遅れた理由を説明している途中で数発、殴られた。

蘇芳との戦闘でついた傷が、いくつか開いたのは言うまでもない。

「全く、こっちにも用事とかあるのよ？ それに携帯で連絡するとか、事前に出来る事もあったでしょうが」

「ゴメンナサイ……」

こちらが全面的に悪い以上、何も言い返す事は出来ない。  
飯に出来たとしても、葵さんの場合はそれを聞きもせず殴ってきた  
うで、結局は出来ない。

「ま、これ以上同じ事言っても変わらないか。それよりも才人、あ  
なたに任務的な事、来たわよ」

そう言つて葵さんは、僕に何かの衣類を、投げつけてきた。

「これ、何ですか？」

「近くにある学園の制服。あなたそれ着て、来週からそこに通いな  
さい」

「へ？ な、何で……？」

「理由はいくつがあるわね。まず一つは、記憶喪失で失った知識を  
また学んでくる事。で、次に、これが一番大きな理由なんだけど、  
いわゆる『潜入捜査』をしてほしいのよ」

葵さんによると、とある大きな事件に、その学園が関わっているか  
もしれないという情報が、入ってきたらしい。

だがその事件がどういうものは、教えて貰えなかった。

「でも学生として潜入しただけで、そんな簡単に分かるものなんで  
すか？」

「十中八九無理ね。実際に調べるのはあくまで私達。あなたはその間を繋ぐ回線みたいなものね」

大した成果は、期待されていないと言う事だろう。

勿論そんな事は自分でも重々承知しているし、一々落ち込んだりはしない。

「実際に入学したら、必要に応じて私達が指示を出すわ。それ以外は基本的に好きにしていっていいわよ」

「学園生活を満喫している、って事ですか？」

「まあそういう事ね。彼女を作ったりしても、勿論オーケーよ？あ、でも既にいるわね」

と、葵さんはからかいながら言うてくる。

ここで向きになっては葵さんの思う壺だ。

一言言いたい衝動を無理矢理に抑え、平静な態度で対応する。

「どうせ出来ないでしょうし、変な期待しても無駄ですよ？」

すると案の定、葵さんはつまらなさそう顔をしていた。

「取り合えず用件はこれで終わり。訓練は……今日は止めておいた方が良さそうね。詳しい説明は今度するから、さっさと帰って休みなさい」

「は、はい」

僕は葵さんに言われるがまま、アモスを去り、家へと帰った。

葵

才人が去っていくのを見届けて、直ぐ様ある人物へと電話を掛ける。

「あ、もしもし？ 才人に伝えといたわよ」

『そうか、ありがとう。これで一応仕込みは完了した事になるね』

相手はうちの上司だ。

誠や恭介の馬鹿が、数少ない苦手としている人物。

まあその数少ない人物の中には、私も入っているのだけど。

「だけどいいの？ よりにもよって才人に潜入させて」

『……どういう事かな？』

「才人なら、私達に指示された事以外は、相談するよりも先に、自分で解決しようとするわよ。多分それに関しては、記憶を失ってか  
らでも変わってないと思うわ」

『それならそれで、こっちが楽でいいさ。ともかく彼には期待しているんでね。やりたい放題やってくれて構わないさ』

この上司が一体何を企んでいるのか、私でも分からない。  
いや私どころか、他の誰も知らないだろう。  
そういう人物なのだ。

誰にも明かそうとせず、何を考えているか分からない不気味な奴と、  
わざと周りに思わせようとしている。

本当に、嫌らしい奴。

「何を期待してるのかは知らないけど、そうそう期待通りにはならないわよ。記憶を失ってから、すっかり丸くなったもの」

『ふむ……見た限りだと、俺にはとてもそうは思えないな』

「……会ったの？ いつ？」

本当にいつの間に。

あまりの抜け目のなさに、思わず感心してしまう。

『ちよつと前にね。気付かれない様に観察してただけだよ』

つまり見られている事に才人は気付いていなかった、という事だ。いくら相手と同じアモスのメンバーで、相当な実力者とはいえ、気配に全く気付かなかったというのはあまりに情けない。

今度は目隠しさせて訓練をつけてやろうかと、少し嫌がらせじみた案が、頭に浮かぶ。

「それで、そうは思えない理由って？」

『確かに、表情や性格はそうかもしれない。けど彼の眼はまだ丸くなっていなかったからね。何かを決意したような、強く鋭い眼をしていたよ。それについては本人も気付いていないだろうさ』

「へえ、じゃあその強く鋭い眼とやらを、今度会った時にでも観察させてもらおうかしら」

『ああ、そうするといい。ではこちらにも忙しいから、そろそろ切ら

せてもらつよ  
『

「ええ、また」

それ以降携帯が喋る事はなかった。

辺りを静寂が包む。

何か大きな出来事が動き始めている。

そのような感覚を私は、心の中で微かに感じ取っていた。

## 第十八話「変化は常に」（後書き）

というわけで、ここまで読んでくださって、ありがとうございます！  
次回からは『学園編』（。。。編がしたかっただけ）が始まります。  
以降も読んで頂けると幸いです。

## 第十九話「その少年、主人公」

僕がこれから通う学園は、ラウングロース学園と言う。

その学園はマジシャンとルーザーの両方が通っており、それぞれ魔法科と一般科に分かれている。

マジシャンである以上、僕も当然魔法科に通う羽目になった。

しかし最悪な事に、僕は魔法を使えない。

どうやら僕を通わせる上で、そればかりは誤魔化しようがなかったらしい。

そもそもそれなら何故、僕を潜入させたのか。

文句を言っても仕方がないのは分かっている。

けれどどうして、よりもよって僕なのか、それだけが腑に落ちずにいた。

「はあ……」

僕は度々吐いている溜息を、その学園の校門前で吐いた。

厳しい残暑が、より一層気分を重くさせる。

今日からここに通うというのに、嬉々とした感情は表れなかった。

「どうしたの、お兄ちゃん？ そんなに最初から落ち込んでたら駄目でしょ。もっとシャキッとしなきゃ！！」

「瑠璃……」

そう、僕の隣には瑠璃が立っている。

葵さんに言われたまま家に帰った後、僕は姉さんと瑠璃に学園に通う事を話した。

これから毎日学園に通う上で、それを悟られないのは難しいと判断したからだ。

だが当然、潜入捜査については秘密にしている。

アモスの仕事上で、とだけ話すと、意外にも二人は深く追求してこなかった。

そして更に意外だったのは、その学園には瑠璃も通っていたと言う事だ。

どうやら初等部から高等部までエスカレーター式で、その中等部に瑠璃は通っていたらしい。

因みにその時瑠璃に、「私の通ってる場所忘れちゃったの!？」と怒られたが、どうにか切り抜けた。

——とまあ、そんなこんなで今に至るわけだ。

「お兄ちゃん、何ブツブツ言ってるの?」

「な、何でもないよ!」

「ふうん。それよりもお兄ちゃん。私こっちだから、もう行くね」

「うん、行つてらっしゃい」

中等部と高等部の校舎は別になっている。

その為僕は瑠璃と校門で別れる事となった。

無論僕だって立ち尽くしたままというわけにもいかず、高等部の校舎へと歩いて行く。

学園内の地図を完全に把握出来ているわけではないが、職員室だけは率先して覚えた。

職員室に行く事さえ出来れば、後は教師の指示に従うだけでいいからだ。

職員室まで歩いている途中、多少周りの生徒の注目を浴びていたが、やはり転入生だと分かるもののだろうか。

風景を見慣れていない場所を歩くと言うのは、新鮮味と同時に、不安も感じる。

そんな感覚のまま、職員室に着くと、僕の入るクラスの担任である、若い男性に出会った。

その担任に軽く説明を受け、その後に行く。

「ここが、君の入るクラスだ。先に僕が行くから、呼んだら入って来なさい」

「はい、分かりました」

言われた通り、教室の前で待機する。

中で担任の音がする。

僕の事も含め、連絡事項を生徒達に伝えているのだろう。

少しの間暇を持て余していると、意外にも直ぐにお呼びの音が掛かった。

その呼び声に応じ、扉を開け、教室の中へと入る。

途端、先程まで担任、または友人や、窓の外へと向けられていた視線が、扉の開く音がするなり、全員が僕へと注目した。

それは想像していた以上に、僕の体をより硬くさせた。  
悟られる程ではないが、小刻みに足が震えている。

震えた足で、ゆっくりと教卓の隣の位置まで進む。  
傍から見たら数秒程度の出来事も、僕にはそれが何倍にも感じられた。

黒板の前に着くと止まり、黒板に自分の名前を書く。

「今日からこのクラスに入る事になりました。白銀才人って言います。よろしくお願いします」

特に何か挨拶を考えていたわけでもなく、面白味のない平凡な挨拶をする。

何人かの生徒は僕の挨拶が終わると、ヒソヒソと話していた。

それは明らかに、自分に対しての事だと分かった。

だからこそ一体何を話しているのか、尚更気になって仕方がない。

担任からの僕の紹介も終わり、僕は自分の席となった場所に移動し、座った。

担任からの紹介には、僕がアモスに入っていると言う話は無かった。  
やはり潜入捜査とあって、秘密にされているのだろうか。

その後大した話も無く、ホームルームは終了した。  
そして次の授業まで、少しの時間が空く事となる。

ならば当然、突然の転入生に生徒達は集まって来るわけだ。

何人もの生徒達が、席を立ち、僕の元へと向かって来る。

予想は出来ていたので、驚く事はなかったが、大勢の人物に詰め寄られるのは、あまり慣れているものではなかった。

そんな中一人、飛び抜けて早く向かって来た人物がいた。

「なあ、転校生。俺と勝負しようぜ！」

瞬間、僕含め、辺り一帯が沈黙の空気に襲われた。

「……はい？」

あまりに突拍子もない言葉に、何をどう反応すればいいのか、全く分からなかった。

ただ周りの生徒は、「またか……」と言った様子で、呆れているだけだった。

つまりこの栗毛の青年の突発的な行動は、日常茶飯事と言う事だろうか。

「だ〜から〜。俺としよう——ぶっ!？」

栗毛の青年が言い終わる前に、その頭が凹型に変形した。

そしてそのまま床に倒れた。

よく見ると誰かから、手刀を食らっていたみたいだ。

「何言ってるの、あんたは。転入生の彼、困ってるでしょうが！」

栗毛の青年に手刀を食らわしたのは、赤髪にポニーテールと、明るい印象が持たれる少女だった。

「ごめんね、えっと……才人君。こいついつもこんな感じだから、無視してくれていいわよ」

「あ、うん……」

脳が未だに状況の判断を仕切れていない為か、気の抜けた返事しか出来なかった。

「あたしの名前は火野原 雅。こっちの馬鹿は一色 佑助。呼び捨てで呼んでくれていいわよ。その代わり私達も呼び捨てにするから」

「うん、よろしく。みや、び」

状況の整理は出来ていないものの、挨拶をされた以上、こちらも返さないわけにはいかない。

「——ってえな！ 何すんだよ！？」

挨拶を終えたところで、先程まで倒れていた佑助が、ようやく起き上がった。

変形していた頭は、既に元に戻っていた。  
いきなり手刀を食らわしてきた雅に、当然ながら怒っていた。

「何って、こっちが聞きたいわよ。いきなり勝負って、何考えてんの？」

「ふっ、よくぞ聞いてくれた……」

雅の質問に、佑助は不敵な笑みを浮かべた。

初対面の僕でも、今からろくでもない事を言うのだと、安易に予想がついた。

「こんな時期に突然現れる謎の転校生！ 俺は確信したね。こいつが俺の永遠のライバルになると……！」

いや、何それ……？

「はぁ？ あんた、またそれ？」

「えつと……どういう事？」

僕を置いて、二人で話が勝手に進んでいたので、近くにいた男子生徒に説明を求めた。

「ああ、あいつ……あ、佑助の方な。よく分からんけど、『主人公』ってやつになろうとしてるんだ」

「そう、その通り。俺は主人公になる。まず世界を救って、そして——ハーレムエンドを目指すのさ！！」

突っ込み所が多すぎて、どこから突っ込めばいいのか分からない。

ただ一番突っ込みたいのは、世界を救う事よりも、ハーレムが主目的である事だ。

堂々とし過ぎていて、逆に清々しい。

「その時のハーレムには雅、お前も入れてやるよ」

「別にいいわよ。そもそも謎のつて、ただの転入生じゃない」

雅が至極真つ当な意見で反論する。

「いーや、俺には分かるね。才人は絶対、どこかの組織から潜入を命じられたスパイだ！！」

「そんなわけないでしょ。ねえ、才人？」

「う、うん……」

実は当たっているだけに、反論のしようがない。

「それにこの学園のどこに、潜入してまで調べる様な事があるのよ？」

「あゝ……女子生徒の個人情報？」

「そんなの調べるの、あんたぐらいよ!!」

と、雅が再び佑助に手刀を食らわせる。

その夫婦漫才の様なやり取りに、既に慣れそうになりつつある僕が居た。

突然の事で最初はよく分からなかったが、今は愉快的カップルだな、とそう思えた。

「「カップルじゃない!!」」

「え、そうなの!？」

「そうよ。あたしとこいつはただの幼馴染。付き合っただけなんかないわよ」

「全くだ。俺はハーレムを目指してるから、一人じゃ終わらねえよ。大体こんな暴力女、誰がいるかっての。どうせ三十路になっても、相手がいなくて一人寂しく――」

言い終わる寸前、時間がスローモーションで動いていた。

佑助の顔の頬に、雅の拳が当てられ、そのまま拳に押されていた。顔は先程以上に酷く変形していき、首が折れるんじゃないかと思う程だ。

雅の腕が伸びきると、佑助の体が、まるでドリルの様に回転し、飛び、舞った。

わあ、人間って、飛べるんだね。

衝撃すぎる出来事に、それしか思考する事がなかった。

そして時間は、元の速さへと戻った。

「ねえ、何か言った？」

「びびべ、ばびばびつべばべん（いいえ、なんにも言ってません）」

床に倒れた佑助が、体をピクピクと震わせながら答える。  
本気で痛そうだ。

「そう、それならいいの」

何故だろう。

凄く似たやり取りが、アモスでもあった気がする。

「雅って、葵さんと凄く気が合いそうだね……」

「葵さん？」

「いや、こつちの話……」

気は間違いなく合うが、二人を会わせてはいけない。  
そんな直感が、僕を襲っていた。

「それよりも雅。えっと、学園の案内、頼んでもいいかな？」

僕のここに来た本来の目的は潜入捜査だ。

ただ単に学園生活を楽しむ事が第一目的ではない。  
だからこそまずは、学園の地図を把握する事が、最も優先すべき事項だ。

「ああ、そっか。まだ転入初日で分からないもんね。いいわ、私に任せなさい！」

「うん、ありがとう」

「うわ、その笑顔反則……」

「何が？」

「いえ、分からないならいいわ。ただ私は良いとして、何人かは既にアウトね……」

言葉の意味が上手く理解出来なかった。

ただ女子生徒の視線が少し強くなったのは、気のせいだろうか。

「学園の案内なら、俺も行くぜ！」

「復活早っ！？」

最早再起不能かと思っていた佑助が、見事なまでの短時間で、復活していた。

「ま、慣れてるからな！」

慣れだけで、こうも早く復活出来るものだろうか。

拓郎と言う人間の異常なまでの根性に、僕は感心せざるを得なかった。

「あんたも来るわけ……？」

「才人は俺の、永遠のライバルになる男だからな。そのライバルについて、知っておくのは当たり前だろ？」

「いや、だから何それ……？」

「永遠のライバルだか何だか知らないけど、まあいいわ。ゴメンね、皆。才人借りていくわ！！」

と、雅はクラスメート達にそう言った。

何人かの生徒達から抗議の声が上がられたが、雅は構わず僕を連れて教室を出た。

主人公に憧れる愉快な少年、一色佑助。

少し暴力的だけど、佑助を止める良い突っ込み役の少女、火野原雅。新たに始まった学園生活に僕は、予想以上に忙しそうだと思ったが、でもそれ以上に楽しそうだと感じた。

「ほら、佑助も来るんだったら、さっさとしなさい！」

「でも雅、まだ一限目も始まってないぞ？」

「「あ……」」

## 第二十話「シスコンでラスボスで大魔王」

四限目までの少しばかり長く感じた授業も終わりに近づき、学園はようやく昼休みを迎える。

昼休みには今度こそ佑助と雅に、学園を案内してもらおうと思う。

それまでの休憩時間には、クラスメート達からの質問が絶えず続いた。

休憩時間の短さも相まって、案内など、とてもしてもらった時間は無かった。

学園全体に、四限目終了のチャイムが鳴り響く。

教師が教室から去ると、何人かの生徒もそれに続くかのように教室を出る。

おそらく食堂にでも行ったのだろう。

「才人、俺達も昼飯行こうぜ！」

少し離れた席から、佑助が声を掛けてくる。

僕と佑助は今日知り合ったばかりだ。

それなのに余所余所しさの全くないその接し方は、朝からの僕の緊張も、いつの間にか解いていた。

「うん。でも僕、弁当なんだけど」

「ならそれ持って食堂行こうぜ。ついでにいくつか味見させてくれよ！」

いい終わると佑助は、体をクルリと別方向に向かせた。

「当然雅も行くんだろ？」

「勿論行くわ。ま、あたしも弁当だけどね」

「んだよ。弁当じゃねえの俺だけかよお」

佑助は愚痴とも言えない様な愚痴を溢しつつ、僕と雅を連れて、食堂へと向かった。

食堂は初等部から高等部まで、全て共有であるらしく、その広さは相当なものだ。

アモスと言ひ、この学園と言ひ、大きくすればいいと言っわけじゃないと思うが、気にしても仕様がなにか。

「なあ才人。そっぴやその弁当、誰が作ってんの？」

三人で昼食を取りながら雑談していると、佑助がそう尋ねてきた。

「うん、これは瑠璃……えっと、妹が作ったんだ」

基本的に余程忙しくない限り、瑠璃が僕の分も一緒に作ってくれると言っ。

姉さんに任せると、どんな物を食べさせられる羽目になるのか分からず心配だ、と瑠璃は言っていた。

姉さんは料理が下手というわけではないが、たまにドジを踏んでとんでもない物を作るらしい。

それはさながら、ロシアンルーレットのようだ、とも瑠璃は言っていた。

「瑠璃っ！？ お前、あの瑠璃ちゃんのお兄ちゃんか！？」

僕にとっては何気無い一言に、佑助は異常なまでに取り乱していた。

「何、佑助。あんたその瑠璃って子、知ってるの？」

雅は僕と全く同じ疑問を質問にし、佑助に問い掛ける。

「知ってるも何も、ミスコンの優勝候補だぞ！！」

「ミ、ミスコン！？」

「つつても中等部じゃミスコンないけどな。ようは期待のホープってやつ」

何という事だろう。

瑠璃が可愛いと言うのは、前々から自分でも思っていた。だがまさか皆にもここまで評価されているとは、考えもしていなかった。

「いや、ミスコン候補が中等部で注目されてる、ってあたし、聞いた事ないわよ？」

「そりゃそうだろ。俺が勝手にチェックしてるだけだし」

「……あんた何やってんの……」

「何ってお前、女子生徒のチェックしたら、ハーレムエンドのヒロイン探しに決まってるだろー！！」

「決まってるわいよ！」

「……まあそれはどうでもいいけどよ」

雅との口論はどうでもいいと、そう言い放ち佑助は僕へと向き直った。

「どうでもよくない!!」

佑助は横で説教してくる雅を無視しながら、僕と会話しようとする。

「ところで……」

「何？」

「才人、いや——お義兄さん！」

ブツン。

お義兄さん。

その単語に、僕の中の何かが切れた。

佑助

俺はただ、冗談で言ったただけだった。

「才人、いや——お義兄さん！」

本気で認めて貰えるとは思っていない。

あくまで場を盛り上げようと、ふざけただけだ。

ただそれでも認めて貰えるのなら、儲けものだと思い、発言した。

「今直ぐじゃなくていいんで、瑠璃ちゃんが成長したら俺に――」

話している最中、才人に、頭を掴まれる。

あまりの速さに、反応する事すら出来なかった。

「え？」

才人の予想外の行動に、俺だけじゃない、雅までも、キョトンとしていた。

「佑助……」

才人が話す。

だがそれは、今までの声質と、明らかに違っていた。  
少し低くなったその声は、聞く者を不気味に思わせ、震え上がらせるには十分だった。

「誰が誰のお義兄さんだって……？」

「あゝ、それはだな……」

本気ではなかった為に、どう返して言いかわからず、口籠ってしま  
う。

原因はなんとなく分かるが、才人は今、怒りすらも超越した境地に達している。

「ねえ、誰が、誰の、お義兄さんだって……？」

俺の頭を握る手の力が、徐々に強くなる。

才人は目をギラリと光らせ、更にとてつもないオーラの様なものを、身に纏わせていた。

その様子はとてもまともな人間とは思えなかった。

この気迫、流石は俺の永遠のライバル……じゃねえ！

あれ、もうライバルじゃねえよ、ラスボスだよ！！

俺まだ成長しきってないのにラスボス戦！？

無理無理無理無理無理無理！！

「み、雅……！？」

俺ではどうしようもないと悟り、雅に助けを求める。

だが雅も、これは無理だと首を左右に振るだけだった。

俺はどうやら、パンドラの箱を開けてしまったみたいだ。

「ねえ、佑助……」

「いつつ！？ 痛いつて、マジ痛いつて！！」

才人の手の力が、とうとう声を我慢できない程まで強まった。

引き剥がそうとしても、手はピクリとも動かず、尚も力は上がり続けていた。

俺の頭が激痛と共に、本来鳴るはずのない音を鳴らしている。

「マジ許して。もう言わねえから。見逃して。本当ヤバいんだって。何でもするから。お願いiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

頭は今にも割れそうだ。

俺は必死に才人に懇願する。

「瑠璃に手を出す者には、死を……」

俺は悟った。

才人には今、魔王が取りついている。

そして魔王は、勇者を見逃してはくれない。

パキッ、と頭のどこかが、鳴った。

「ぎゃあああああああああああああ……！」

後の事はよく覚えていない。

気がついたら俺は食堂の床に倒れていた。

「佑助、あんた大丈夫？」

流石の雅も、見ていて悲痛だったのか、心配の声を掛けてくれた。

「ああ、死んだばあちゃんが手振ってら……」

「大丈夫じゃないわね……」

「なあ雅、俺一つだけ分かったんだ。才人は――」

「ええ……そうね。才人は――」

「シスコンだ」「シスコンね」

珍しく俺と雅の意見が合った。

明日は雨だな。

「瑠璃ちゃんに手出すのは、止めた方がいいな」

「私が手を出すわけないけど、それには賛成」

また珍しく意見が合った。

明日は嵐だな。

「やべえ、意識が……」

視界が徐々に闇へと染まっていく。  
脳の働きも遅くなり、今にも気を失いそうなのが分かる。

「ちよつと、本当に大丈夫!？」

「俺はもう駄目だ。だから最後に、一つだけ言わせてくれ……」

もう助からない。

だがせめて、これだけは、これだけは雅に伝えないといけない。

「な、何？」

俺の様子から只事ではないと察してくれたのか、雅は唾を飲みながら俺の言葉を待っていた。

「次はTバックとか履いて——ゲホオ!？」

「ずっとそこで死んでなさい!」

腹に一発、凄まじい衝撃が走る。

そのまま視界は完全な闇に染まる。

俺が最後に見たのは雅の、ピンク色をした可愛らしい下着だった。そんな物が最後に見られるなら、俺の人生に一片の悔いも無い。

そして俺は、天国のばあちゃんに、会いに行った。

才人

「えーと、これはどういう状況……？」

目の前には佑助が、生きているのか死んでいるのか分からない状態で、倒れていた。

「どういって……覚えてないの!？」

僕は至極普通の質問をしたつもりだが、雅はそれに目を丸くしながら驚いていた。

「何、が……？」

確か僕はここで二人と昼食を取っていた。

そして……駄目だ、思い出せない。

気がつけば今に至っていた。

これはもしかして、記憶喪失!？

「覚えてないのね。才人、あんたある意味幸せ者よ……」

「え、何で？」

雅の言っている意味が分からない。  
一体この短い間に何があったのか。

どれだけ思考を重ねていても、皆目見当がつかない。

「まあ気にしなくていいわ。それよりも、昼食終わったけど、学園の案内、どうしようか？」

今に自体に気を取られ、頼んでいた学園の案内など、記憶の奥底に仕舞われていた。

「ほら、佑助がこんな状態でしょ。放っておいても、いいとは思うけど、こんな所放置にしておいたら、食堂の皆が困るじゃない？」

佑助についての心配は、微塵もしていないみたいだ。

状況把握が出来ていない為に、佑助に同情すべきか判断に悩むところだ。

案内をしてもらうか、否か。

必ずしも案内してもらわなければ、分からない訳ではない。  
二つある選択肢の中で僕は、

「じゃあ……案内はいいよ。自力で覚える」

こちらを選択した。

「そう？　ゴメンね。今は無理だけど、言ってくれたらいつでも案内するわ」

「うん、ありがとう。じゃあもう行くね」

と、そう言い残し、僕は食堂を去った。

食堂を出て、僕は人目のない所を見つけ、移動した。  
僕が案内を断ったのには、訳がある。

それは、僕の携帯がポケットの中で震えたからだ。

誰が見当は付いている、葵さんだ。

大方潜入捜査の内容でも、報告するつもりなんだろう。

携帯は先程から絶えず震え続けている。

それはつまり、メールではなく電話だと言う事だ。

「はい、もしもし」

携帯を取り出し、電話を取る。

勿論その前に、周りに誰もいないか、そして誰も来ないか、細心の注意を払っている。

「あ、才人。早速で悪いんだけど、任務よ」

相手は案の定葵さんだった。

「何ですか？」

「こっちで色々調べてたら、その学園の生徒の名前が、数人出てきたのよ。だからそっちで接触してみてる？」

相変わらず事件の内容は教えてくれそうにもない。  
一体何故秘密にされているのか。

それだけ外部には漏らせない事なのだろうか。

「接触つて、主に何をすればいいんですか？」

「何かおかしな様子があったら、それを報告してくれればいいわ。周りの生徒におかしな様子は無かったか、聞いてもいいわよ」

「おかしな、様子……ですか」

「そうね、例えば、『前に比べて性格が変わった』とか、『急に魔法が強くなった』とか、そういうの」

「……分かりました。それで、誰に接触すればいいんです？」

「今から一人ずつ言っていくから、メモ取つときなさい」

そして葵さんは、生徒の学年、組、名前を、順々に挙げていく。僕は言われた通り、それらを聞き、紙に書き写す。

「——蘇芳鷹。以上よ」

「蘇芳鷹、と……え!？」

「どうしたの？ 知り合いでもいた？」

「いえ、何でもありません……」

まさかここでその名前を聞くとは思ってもしなかった。

葵さんにはアシュリーについては話したものの、蘇芳の事は言って

いない。

だから僕が蘇芳と知り合いだという事は、知らないはずだ。

今話しても良かったのだが、咄嗟の判断で秘密にしてしまった。

どうせ後で接触したら知り合いという事になるだろうし、わざわざ話す事でもないだろう。

そう判断し、僕は黙っておく事にした。

「とにかくそれで全員だから、頼むわね」

「あ、はい！」

言い終わるなり電話は切れてしまった。

この誰もいない静寂した空間に僕は、一人たたずみ、悩んでいた。

僕は人と接する事はどちらかというと苦手だ。

だからこの任務はハッキリ言って、上手く遂行出来る気がしない。

それに蘇芳に関しては、以前一度倒してしまったが故に、報復してくる可能性だってある。

つくづく嫌になる任務だ。

この任務を辞退出来るものなら是非したい。

「はあ……おし！」

くよくよしていても何も変わらない。

僕は自分に掛け声を掛け、気合いを入れ直す。

まずは蘇芳に接触する。

報復されないか非常に心配で、不安が胸を襲うが、一番接しやすい

と言つもの確かだからだ。

記憶を失つて初めて受けた任務。

自信はないが、確実に遂行してみせる。

その決意を胸に、僕は教室へ戻つた。

## 第二十一話「姓は勇者」

その日の放課後、僕は蘇芳に会いに向かった。

時間が時間なだけに、既に帰っている可能性が十分に高いというのは、承知した上での行動だ。

だけど直接会えないまでも、せめて本人についての情報収集ぐらいは、しておきたいと思ったのだ。

そうして三年生の教室が並んでいる廊下に着く。

当然廊下を歩くのは三年生ばかりで、格好は変わらないと言つのに自分だけ浮いた気分させられる。

正直言つと、今すぐにでも帰りたい。

予想以上に後悔してしまった自分の行動に、深く落ち込む。

「どうしたんだよ。溜息なんかついて」

「いやね、ちょっと色々ありまして……え？」

聞き覚えのある声。

誰かは直ぐに分かった。

分かったのだが、どうして今ここでその声を聞くのか。

自分の後方に顔を向け、声の主を見る。

それは案の定の人物だった。

「佑助!？」

「ん、何だ？」

「『何だ？』って、それこっちのセリフなんだけど……」

「だってよお、お前、まだ俺と勝負してねえじゃん」

「まだする気だったの！？」

いい加減諦めたのだと思っていたが、とんだ勘違いだったようだ。

「本当よ。あんたいつまでそれ言い続けるつもり？」

佑助の後ろに目をやると、驚く事に雅も付いてきていたらしい。  
二人共気配を消すのが妙に上手い。

どちらも声を発するまで気付かれずに居るなんて……。  
それとも単に僕が鈍いだけなんだろうか。

「勝負、勝負って、勝てる自信あるわけ？」

「ない！」

雅の質問に、佑助は何故だか自信満々に、そう答えた。

「才人の実力も分からないってのに、勝てるかどうか分かるわけないじゃん。雅、お前馬鹿か？」

「あ・ん・た・ねえ……！」

「わああああ、ストップストップ！ 雅、落ちついて……！」

今にも佑助に襲いかかってしまいそうな雅を、必死になってなだめ

る。

明らかに佑助の方が悪いのだが、このまま放っておくと佑助の命が危ない。

僕の説得が通じたのか、雅は未だ佑助に殺意の籠った視線を向けているものの、どうにか行動に移す事だけは、やめてくれたみたいだ。

「じゃあ、何でわざわざ、勝負しようとするのよ？」

雅は多少の怒気を帯びた声で、佑助へと問い掛ける。

「はあ、分かってないなあ、お前も」

佑助は今にも殺されてしまいそうな状況が分かっているのか、雅を小馬鹿回しにして返答した。

「俺が勝とうが負けようがどっちでもいいんだよ！ 取り合えず戦えばフラグが建つわけだからな」

「ふらぐ？」

佑助の放った単語の意味が分からなかった。

フラグと言えば旗、と言う意味なのだが、一体何の旗が建つと言うのか。

「そ、フラグ。まあ面倒くさいからフラグについての説明は無しなで、俺が才人と戦った場合——」

佑助の話を纏めるところだ。

佑助が僕と戦って、佑助が勝ったとする。

その時点で佑助は成長を果たし、強くなる。

一方、僕は佑助に負けた悔しさから、佑助へ異常なまでに執着するようになる。

それがつまり永遠のライバルの誕生、と言う事だ。

これで佑助のなるうとして、『主人公』の条件を一つクリアした事になる、らしい。

逆に僕が佑助に勝った場合、佑助は何か特別な訓練をするようになる。

そして僕との再戦時に、新たな必殺技を使って僕を倒す。

僕の方と言うと、また悔しさから執着するようになるらしい。

つまり、どっちにしても佑助は強くなり、永遠のライバルも出来あがると言う事だ。

「あの、ハッキリ言うと、意味が分からない……」

説明を受けた今でも、理解は出来なかった。

勝っても負けても強くなり、更に僕が佑助に執着するようになる、と言う根拠はどこから来ているのか。

新たな必殺技と言うけれど、今既に必殺技がいくつかあるのか。

考えれば考えるほど、生み出されていく疑問の数々を、とてもじゃないが処理しきれない気がしなかった。

「勝ち負けが重要じゃないんだよ。戦う事、その経験に意味があるのさ！」

何やら格好いい事を一人で言っているが、それ以前の発言が意味不明なので全部台無しだ。

「才人、あの馬鹿は放っておいて、さっさと行きましょう」

雅は佑助に聞かれないよう、僕の耳元で囁いた。

アシュリーの時もそうだったのだが、女性がここまで近付いて来ていると、心臓の鼓動が異様なまでに激しくなってしまう。

「う、うん……」

そもそも僕は、蘇芳の情報を集める為にここに来た。

その筈が、佑助達が付いて来た事により、中々行動に移せないでいる。

この際仕方が無い。

どうにか極力悟られないようにしながら、情報収集するという選択肢しか無さそうだ。

雅と共に、速やかにその場を去る。

佑助は未だ一人で語っており、僕らの行動には全く気が付いていない様子だった。

このまま今度こそ、蘇芳のいる教室に行こう。

そう思い廊下を歩いて行く。

廊下で一人語っている佑助を、その場に放置したまま。

「——とまあ、そんな感じで俺の主人公ロードは完結するわけよ。  
……って、二人共いねえ!？」

あ、気付いた。

「二人共待てって! どこ行くんだよ?」

「どこって……才人、どこ行くの？」

「えっと、知り合いがいるから、会いに……」

嘘は言っていないつもりだ。

だが向こうはそう思っていないのかもしれない。

だから果たして知り合いと呼んでいいものか、少し判断に迷った。

「へえ、知り合いって誰？」

「それは——」

佑助達に教えるべきか迷った。

それにより一人の男性が近づいて来ていた事に気が付かなかった。

「おい、お前！」

「……僕？」

理由はないのだが自分の事かと思い、振り返る。

するとそこには、まさに今から会おうとしていた、蘇芳がいた。

蘇芳は僕がここに居る事に、目を見開いて驚いていた。

そして実を言うと、それには僕も当てはまった。

葵さんから名前を聞いたあの時から今まで、実は同姓同名の別人ではないかと、心の奥底、いや片隅では思っていた。

だから実際に現れた現状に、僕も驚きを隠せなかった。

「やっぱりか！ 確か、さ、さ——」

「才人です。白銀才人」

「そうだ、確かそういう名前だ！ お前、この学園の生徒だったのか！？」

「ええ、まあ……」

今日転校してきたばかりという事は、あえて黙っておく事にした。怪しまれて警戒されると、調査し辛くなるからだ。

「まさかお前がこの学園の生徒だったとはな……。今ここに居るのも、もしかして俺様に会いに来たのか？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど……」

咄嗟の判断で偽った。

ただ僕はこの判断が、間違っているとは思わない。

自分にわざわざ会いに来た等と知ったら、その場合もおそらく警戒されてしまうだろう。

それを考慮すると、やはり今の咄嗟の判断は正解と思える。

「なら何でここに居んだよ」

しかしこうも立て続けに質問をされると、咄嗟の判断も出来なくなってしまう。

なら何故ここにいるのか、という質問。

わざわざ上級生の所まで来る理由など、上級生に会いに来たと言う他にない。

だがこの学園の上级生に、これ以上僕の知り合いは居ないはずだ。そもそもこの学園自体に、他の僕の知り合いはもう居ないはず……ん？

そういえば……

「アシュリーならいねえよ」

「え？」

僕がその疑問を抱くより先に、蘇芳が先読みし返答した。もしかして僕は思っている事が顔に出やすい性質なのか……？

「残念だったな。お前の彼女はこの学園に、いや、そもそも学校に通ってねえよ。てかそれぐらい聞いてねえのか？」

だって彼女じゃありませんし。

「まあそんな事はどうだっていい。それよりも、俺様ともう一回戦え、今直ぐにだ!!」

予想通りと言えば予想通りなのだが、出来れば予想通りになって欲しくなかった事態に、激しく落胆せざるを得なかった。

「いや、僕は——」

「ちょっと待ったあ!!」

断ろうとそう思い、口にしたところで、何者からか邪魔が入る。それは、佑助だった。

「さつきから黙って聞いてたら才人！ お前、彼女持ちだったのかよ！？」

「突っ込むところ、そこ！？」

争い事になるのを止めようとしてくれたと、少しでも思った僕が馬鹿だったみたいだ。

「彼女については後でたっぷり聞かせて貰うからな！？ それよりもその——」

「蘇芳だ」

「蘇芳、先輩？ 才人と戦うならそれよりも先に、俺と戦ってもらいましょうか！」

「は？」

「あん？」

「ちょ、何考えてんのよ、あんた！？」

佑助の発言に対して、僕、蘇芳、雅は三者三様の反応をする。

「全くだ。お前、どういっつもりだ？ そもそも誰だよ」

「先輩、あんたは才人以前戦って、多分だけど、負けたんですよね？」

佑助は蘇芳を挑発する様な物言いで、話しかける。

一方蘇芳は「負けた」という単語に反応し、表情が歪んだ。

「ああ、そうだよ。俺は才人と戦って、負けた。後お前誰だよ」

「先輩、才人は俺の永遠のライバルだ」

そっちが勝手に言っているだけなんだけどね。

「才人に勝つには、俺にも勝つぐらいの実力がないと駄目だ」

「ほう……。で、誰だよ」

「つまり！」

「聞けよ」

佑助はとことん人の話を聞かない、と言うより周りが見えていない人間らしい。

「おい、こいつ殺していいか？」

「い、一応最後まで話聞いて上げて！！」

僕も蘇芳の立場なら同じ気分になっているかもしれない。

もし蘇芳が今直ぐ殺しに掛かって、助ける理由が見つからない。

「俺に戦って勝たなきゃ、才人に挑む資格すらないって事ですよ！！」

ようやく佑助の長い自論が終わり、僕らに発言する権利が与えられ

た。

だが蘇芳は直ぐに返答する事はせず、暫くの間考え込んだ。そして、返答する。

「ハッ、いいぜ。その勝負、乗ってやるよ」

何故だか分からないが、蘇芳は勝負事が好きなのか、実に楽しそうな笑みを浮かべる。

「おっしや、そう来ないと！」

勝負事が好きと言えば、佑助もそれに当てはまるかもしれない。痛い思いのする行為のどこが楽しいのか、今の僕には全く理解出来なかった。

いや、これからもきつと理解出来る事はないだろう。

「ああゝもう！ 才人、どうにか出来ないの！？」

最早雅にすら、佑助を止める事は出来ないらしい。涙目になりながら僕に助けを求めてくる。

「どうにもならないんじゃないかなあ？」

だが残念な事に、今の僕にはそれに応じられる程の能力はない。自分の不甲斐無さを情けなく思う。

「じゃあ先輩。どこで戦います？」

「近くに空き地があっただろ。そこなら人通りも少ないから、思いっきり殺りあえるぜ」

物騒な漢字使わないで下さい。

「よし、じゃあ早速行きますかあ！ 才人も雅も、さっさと行くぞ  
！！」

振り回されるこちらの身にもなつてほしい。

僕がこの学園に来るまでは、雅は一人で佑助の面倒をさせられていたのか。

流石に同情してしまう……。

そして場所は、例の空地へと移り変わった。

蘇芳と佑助はお互い五メートル程離れ、向かい合っている。  
僕と雅は完全に観客となっていた。

「じゃあ、先に降参した方の負けだ、いいな」

蘇芳がルールの確認をする。

ルールの確認と言っても、ハッキリ言つて喧嘩と一緒だ。

「こっちはいつでもオーケーですよ。ただ戦う前に一つ、良い事を  
教えて上げますよ。才人もよく、聞いとけ！！」

「良い事……？」

どうせまたロクでもない事だろうと、真面目に聞く気にはなれなかった。

「俺の名字は一色。伸ばすとヒーロー、勇者つて事になる。勇者つてのは主人公だ。つまりこの名字は、俺の為にあるようなものなん

だよ！！」

予想通りロクでもない事だった。

「ハッ、勇者か。おもしれえ、相手が勇者なら、不足はねえ！！」

だが意外にも蘇芳はノリが良いらしく、楽しそうだった。  
もしかして僕がおかしいだけなんじゃないかと、自分を疑いたくなる。

「さあ、勇者の實力、とくとその目に焼き付けな！！」

佑助が駆ける。

そして僕は、凄い結末を見た。

## 第二十二話「初めての敗北」

「……参りました」

佑助のその一言により、勝敗は決した。

「「早っ!?!」」

僕と雅は同様の反応をする。

そりゃあそうだろう。

勝負が開始されてものの一分も経たない内に決着がついたのだから。

先程、佑助が蘇芳に突撃しに行った時点で、勝負は開始した。

佑助は高校生の標準よりも速い足で、拳を構えながら蘇芳へと突っ込んで行く。

だが一度蘇芳の実力を見ている僕からすると、当たる事はないと、先の結末が容易に想像出来た。

蘇芳は佑助から振るわれた拳を避け、代わりにその拳を腹部に食らわせる。

「ゲホオ!?!」

「佑助!」

僕は蘇芳の魔法の特性を知っている。

それだけに触れられた時の危険性もまた、重々承知している。

佑助は殴られた事により、よろめき、その場に膝をつく。

だがただ殴られただけで、魔法が使われた様子ではなかった。

僕の際は容赦なく魔法を使って来たのに、佑助には使わなかった。僕がアモスだと知っていたからこそ、最初から本気で掛かってきたのだろうか。

「佑助、生きてる？」

雅が縁起でもない事を言う。

「いててて……」

佑助が腹をさすりながら立ちあがる。

佑助の顔は苦痛に歪んでいた。

魔法を使われなかったとはいえ、やはり痛い事に変わりはないらしい。

「どうしたよ。お前の力、見せてみな、後輩」

蘇芳は危険性等二の次で、どれ程の力を見せてくれるかという事に興味津々なようだ。

当然佑助もこのまま黙ってはいないだろう。

僕も気になる、佑助の実力が。

一体あれ程の自信を持たせられる力とは、どれ程のものなのか。

だが佑助は暫くの沈黙の後、その場に両膝をついた。そして、こう言った、

「……参りました」

と。

「お前、俺様を馬鹿にしてんのか!？」

「そうよ、佑助。いくらなんでもふざけすぎよ!！」

二人から当然とも言える非難を浴びる佑助。  
僕だって同じ気持ちだ。

「いやいやいや、無理だって！　一発パンチ食らったけど、マジで痛いって!！」

「何言ってるの、あんた主人公になるんでしょ!？　だったら直ぐ諦めずに、主人公らしく最後まで戦いなさいよ!！」

「だから無理だって！　俺の魔法喧嘩だと大して役に立たないし、喧嘩割と強いけど、この先輩もつと強いし!！」

「佑助の魔法って?」

雅に尋ねる。

「佑助の魔法は、私もよく分かってないんだけど、体を変化させる魔法よ」

「違い、変身する魔法だって言ってるだろ!！」

「うるさい。黙ってて」

「はい……」

雅の容赦ない一言に、佑助は言う通り黙り込む。

「変化させるって、どんな風に？」

「多分才人の想像してる通りよ。姿形を変えるだけ。ついでに言えば質量も一応変化させられるわね」

「え、でもそれって……」

上手く使えば喧嘩にも活用出来るのではなからうか。

勿論喧嘩に使って良いわけがないのだが、大して役に立たないとは思えない。

「言いたい事は分かるわ。あたしも同感。でもあいつ、いつつもある一つの姿にしか変化する気がないの」

「その姿って？」

「昔テレビで見たヒーローの格好」

「……」

そこまで徹底していると、もう主人公でいいんじゃないかと思えてくる。

「因みに、雅の魔法は？」

「あたしは炎を出して操る魔法。相手が佑助なだけに、喧嘩になると大抵あたしが勝ってるわ。ま、相手が佑助じゃなくても負ける気

はないけど」

雅のそれは、おそらく絶対的な自信等ではないだろう。  
プライドからの覚悟の様なものと、彼女の瞳が語っていた。

「おい才人、こいつマジでもう俺様と戦う気無いみたいだ。だから  
今度こそお前が、俺様と戦え!!」

「え、ええ……」

結局そうなってしまうのか。  
依然として変わらぬ展開に、自分の不運さを呪いたくなる。

「もう負けねえ。今回も、それ以降もずっと俺様が勝つてやる!!」

蘇芳は以前負けた事が余程悔しかったのだろう。

仮に今戦って勝ったとしても、一度負けた事は、この先一生引きず  
っていくのではないか。

そんな考えが胸によぎった。

「蘇芳……先輩。気分を害する様で悪いんですけど、僕はあなたと  
戦う気は鼻からありません」

「何？ お前、勝ち逃げするつもりか!!」

「そういうわけじゃ……」

「なら戦え、今直ぐにだ！ お前と戦って付いた俺様自身の黒星を、  
今直ぐにでも消さないと治まらねえ!!」

蘇芳は自身の感情を全て爆発させる勢いで、僕に不満をぶつける。僕からすればたった一回負けただけ、だ。

だがこの蘇芳と言う青年にとっては、たった一回の負けすら許せないのだろう。

どれほどプライドが高ければ、そう考えられるのか。

つい先程雅もプライドが高い方だと感じたばかりだと言つのに、蘇芳はそれ以上だった。

「ちょっと、黙って聞いてたら、いくらなんでも身勝手すぎるんじゃない？」

どう対処していいものか悩んでいるところに、雅が助けに入ってくれた。

彼女は少し暴力的で、血の気が多いところが問題だ。

しかし助けてくれる事には有難みを感じずにはいられない。

「邪魔だ、雑魚は引っ込んでろ！」

「なっ——」

雅はカチンという音が、今にも聞こえてきそうな表情をしていた。

こんな事を言われると、怒って当然なのだが、出来れば事は穏便に済ませておきたいと言つのが本音だ。

ただ彼女の性格からして、それは叶わないだろう。

「……いいわ。なら、満足するまで、遣り合ってやろうじゃない！」

「み、雅、喧嘩は——」

「才人が——」

「僕が!？」

一体どうしてそうなったのか、雅に激しく問い詰めたい。

別に決まっているわけではないが、これは普通雅が戦う流れじゃないのか？

これではますます戦わなくてはいけない状況に、なってしまっただけじゃないか。

「ああ、ハナからそのつもりだ。さあ才人、やるぜ」

蘇芳は足元の小石を拾った。

その行動から予想される先の展開は、一つだけだった。

小石を投げ、それと同時に小石を破壊する。

そうする事で簡易的な散弾を作り、放つ事が出来る。

以前の僕との戦いで、閃いたに違いない。

もう何があっても、蘇芳は戦いを止めようとしないだろう。

それなら僕も精々大怪我をしない様、全力で相手をするしかない。

そう覚悟し、ポケットに隠し持っていたグロウシェイドに手を掛ける。

出来れば凶器をあまり振り回したくはないが、今回は止めてくれる人物もいない。

仮に雅が止めたとしても、二人の性格からして今度は雅が蘇芳と戦ってしまうはずだ。

二人を争わせるわけにもいかないし、それならもう、是が非でも勝つしかない。

「あら、散々嫌がってた割に、結構やる気じゃない」

「そつちがやるしかない状況にしたんじゃないか……」

「いいじゃない。コテンパンにしちやいなさいよ」

どうやら本人に悪気はないみたいだが、それでも困る事には変わりがない。

「才人ー、俺以外の奴に負けんなよー!」

遠くで佑助が、地面に座り込んだまま声を掛けてくる。

「もし才人が勝っても、あんたが勝てるわけないでしょうが!」

「ぬ……」

雅の正論に、佑助は返す言葉もなく黙り込む。

蘇芳が佑助に勝って、僕がその蘇芳に勝ったとする。

そして佑助が僕に勝つ等という、じゃんけんの様な強弱の関係は、滅多にない。

「なら、才人負けろ!」

「何て最低な奴……」

佑助のあまりのみつともなさに雅はほとほと呆れ返っていた。最早放っておくが何故そこまで僕をライバル視するのか。僕以外にもライバルとして相応しい相手はいるだろうに。

「おい、いい加減始めるぞ」

蘇芳は待ちくたびれたのか、急かす。

「はい、いつでも、いいですよ」

敢えて先攻は譲る事にした。

こちらから仕掛けようにも、仕掛けた瞬間散弾を放たれたら避けようがないからだ。

先ずは蘇芳に散弾を使わせ、それを全て防ぐ。

そして次にまた石を拾うよりも早く仕掛けなければならない。

言葉にするのは簡単だが、実際は相当難しい。

いくら手が分かっているにしても、散弾を防ぎきる事は容易でないからだ。

神経を集中させる。

全て避けられそうなら避けるが、駄目ならグロウシェイドを使う。使いこなせているわけではないが、適当に振っていれば多少は防いでくれるだろう。

「なら遠慮なくいくぜ!!」

僕の予想通り、蘇芳は石を破砕させながら投げつけてきた。だがそこまでの速度はない、これならば避けられる。

そう思ったのも束の間、一つだけ凄まじい速さで迫って来る石があった。

明らかに他のものに対して大きい。

つまり散弾に注意を惹かせ、隠し持っていた石を当てて怯ませるのが本当の目的だったみたいだ。

「まっず!?!」

完全に散弾の方へと気を取られていた。避けられないと悟り、ポケットからグロウシェイドを取り出し剣の形を造る。

そして素早く剣を振って石を切り裂く。と、そうしようと考えた瞬間、

「あ、あれ瑠璃ちゃんじゃね？」

という佑助の言葉により、その考えはどこかへ消え去ってしまった。

「嘘、瑠璃！？」

現状を、飛んでくる石の存在を忘れ、僕はそれ以外の別方向へと顔を向けた。

だが瑠璃はどこにもいない。

一体どこにいるのかと尋ねる為に、佑助の方を見る。

すると佑助は、悪戯小僧の様な笑みを浮かべ、こう言った。

「スマン、アレ、嘘」

「……………は？」

佑助の言葉に脳が硬直した。

そのまま一秒どころか一瞬も経たない内に、現状を思い出す。だが時は既に、遅かった。

ゴッ、というにぶい音と共に、凄まじい速さで迫ってきた石が、僕の頭にめり込み、脳を揺らす。頭が真っ白に、視界は真っ黒になった。

抵抗する事も出来ないまま、僕は体を地面へと倒れさせていく。  
そして地面に倒れると共に、僕の意識はなくなった。

僕が意識を失った直後、

「ちょっと何してんのよ!？」

「いやあ、どうにか負けてくれないかなあって思ってたんだが、まさか本当に決定打になるとは……」

「おい、こんな勝ち方納得いかねえぞ!!」

等々のやり取りがあっただけに、詳しくは知らない。  
いや、知りたくもない。

目が覚めると、僕はベッドで寝ていた……ってこの文章、前にもあったな。

「あ、お兄ちゃん、大丈夫?」

僕は何故か自分の部屋のベッドで寝ており、傍には瑠璃が居た。

「もー、心配したんだよ? お兄ちゃんのお友達が近くに居なかったら、今頃どうなってたか……」

どうやら佑助達が、僕を家まで運んでくれたみたいだ。

段々記憶も思いだしてきた。

僕は佑助の嘘に引っかかり、石を避けられずそのまま気絶したのだ。

「何があっただかは聞いたんだからね」

「ゴメン……」

瑠璃の性格からして、喧嘩や争い事は嫌いなんだろう。  
大した言い訳も思いつかず、ただ謝る事しか出来なかった。

「全く、どうして頭で石を割ろうとなんかしたの？」

待て。

色々とおかしい。

「瑠璃、それは誰に聞いたんだい？」

「えっとね、確か男の人の方かな。でもその後直ぐに女の人に引っ張られて行ったよ？」

「そうか、それならいいよ」

僕が制裁を下す必要はないようだ。

「とにかく、私もお姉ちゃんも心配するから、そんな事二度としないだね？」

「うん、分かったよ」

そもそも一度もしていないのだけど。

「じゃあ思ったより大丈夫そうだし、夕飯の支度してくるね」

「ああ、行ってらっしゃい」

瑠璃が部屋から出ていき、一息つく。

確かに瑠璃の言う通り、体に異常はない。

ないのだが、入学初日でいきなりこんな怪我を負って、どうも先行きが不安になる。

明日学校へ行ったら、雅にお礼言っておかないと。

佑助は一発ほど殴っておこう。

自分の鞆から、携帯を取り出す。

葵さんに電話をする為だ。

念の為毎日連絡するように、葵さんに言われていたのを、たった今思い出したのだ。

携帯を開き、葵さんへと掛ける。

その行動によって僕が後悔するのに、然程時間は経たなかった。

## 第二十三話「後悔する現実」

「はぁ……何でこんな真夜中に……」

音という音が何一つしない闇夜の中を、僕は一人静かに駆けていた。現在時刻は十一時半。

警察に見つかったら当然補導されてしまう時間帯だ。

僕は先程葵さんに電話を掛け、今日の報告をした。

入学初日の成果など期待出来るはずがないと、葵さんも分かっていたのだろう。

別段咎められたりする事もなく、本当にただ報告をしただけで話は終わった。

だが問題はその後だ。

報告をするだけで話は終わるかと思われたその直後に、葵さんはこう言った。

「悪いけど才人、今から学園に潜入してくれない？」

学園の生徒達についてどうしても知りたい事があるらしく、僕を潜入させようと思ったらしい。

僕ならば最悪見つかっても、言い訳が出来るからという理由もあるそうだ。

僕は出来る事ならば行きたくない。

だから当然多少の反論ぐらいはした。

例えば学園のセキュリティシステムに引っ掛かったりするのでは、

とか。

しかし葵さんは、僕が何を言ってくるのか完全に予想していたんだろうか。

学園のコンピューターに侵入して、セキュリティは解除した、と返してきた。

そんな簡単に侵入出来るのか、そもそも侵入出来るぐらいならそこから知りたい情報を盗んで来られないのか、等色々と思うところはあった。

だが何をどう反論しても、葵さんには無駄だと悟り、僕は敢えて追求しない事にした。

そうして僕は嫌々ながらもその指示に従ったと言うわけだ。

多少急いで向かった為か、大して時間が掛かる事もなく学園に着く。昼間に見た時は非常に大きく、立派な校舎だと思った。

しかし今の時間帯に見ると、その大きさはただ不気味に感じさせる以外の役割を、はたしていなかった。

「う……」

学園に着き、いざ中に入るとなったところで、足が止まった。

何かあるかもしれないという不安に、足が入る事を躊躇ってしまっている。

だがその抵抗を必死に払い、覚悟を決めて学園内に入る。

学園にはすんなり入る事が出来た。

葵さんの言う通り、セキュリティは作動していないようだ。

葵さんは本当に学園のコンピューターに侵入出来ていたらしい。

情報収集の速さや技術、更にはあの誠さんや恭介さんよりも強いと言う。

全く、葵さんの凄さにはつくづく恐れいる。

記憶を失ってから今まで、おそらく一番敵に回すと怖い人物だろう。

昼間に記憶した高等部の校舎内を壁伝いに移動する。

懐中電灯等で辺りを照らすわけにもいかず、視界がよく確保されていない中で移動しようとした結果だ。

目指すは学園長室。

学園長室の位置は把握できている為、焦らず着実に足を進める。

目的地である学園長室の前に着き、中へと入る。

学園長室に入ると同時に、校内は更に闇をより濃いものにさせた。

月がその身を雲に隠し、光を照らさなくなった為だろう。

普段はそんな事で怖がる筈がないのだが、今は状況が状況だ。

視界の確保が更に難しくなったという事実は、自分が考えていた以上に不安や恐怖を加速させていた。

早く事を終わらせてしまおうと、手袋を付け、早速作業に移る。

学園長室のどこに生徒の情報が載っている資料があるのか分からない。

もしコンピュータ内にある場合は、僕だけでは侵入する事が出来ない為、面倒だが葵さんに連絡しないといけない。

早々に終わるよう、出来れば直ぐに見つかるような場所にあつて欲しいと願うばかりだ。

あれから数分程経っただろう。

全く見つかる様子もなく、いい加減物色を諦め、携帯電話を取り出した。

そしてそのまま葵さんに連絡しようと、指を動かした瞬間、それは何者かによって阻まれた。

携帯電話が、弾丸の様な物に射抜かれ、破壊されたのだ。

「……え？」

現状を直ぐに把握する事が出来なかった。

おそらくその後何も起こらなければ、僕は何も分らず、立ち尽くしていただけたらう。

だがそれは、右の頬から感じられる痛みが許さなかった。

弾丸の様な物は携帯電話を破壊したあとに続けざまに放たれ、僕の右の頬を掠めたのだ。

僕はわけが分からないまま、学園長の机を盾に素早く隠れた。

それで危険が完全に回避出来たわけではないが、少なくとも落ち着いて頭を回せられるくらいの安全は確保出来ただろう。

「貴様、そこで何をしている」

若い青年の声だった。

僕と然程年齢は変わらないだろう。

「こんな真夜中にこのラウングロース学園に侵入。その上、よりもよって学園長室で何かをしているという事は、当然それ相応の覚悟は出来ているんだろう？」

青年の顔は暗闇の所為で見られない。

だがおそらく、この学園の生徒である事は間違いないだろう。

しかしただの生徒ではないと、僕の直感が告げていた。

どうにか言い訳でもすれば見逃してもらえるだろうか？

いいや、無理だ。

これもまた直感に過ぎないが、どう言葉を取り繕ったとしても、彼は僕を見逃さないだろう。

「五秒数える内におとなしく出てこい。そうしたら命だけは見逃してやる」

青年は言った。

つまりそれは、おとなしく出てこない場合、即座に僕を殺しに掛かると言うわけだ。

「いち……」

僕の命を左右するカウントダウンが始まる。

おとなしく出て行って、警察に突き出されるのならまだいい。アモスにいる葵さん達に言えば、直ぐにでも解放してもらえるだろう。

しかし命を奪おうとすらしている彼が、そんな普通の行動を取るとは思えない。

「に……」

ならば一体どうすればいいのか。  
五秒というあまりに短い時間で、僕は生への道標を見つけ出さなくてはならない。

扉の前に青年は立っており、扉は塞がれている。

その上、おそらく先程の弾丸の様な物は魔法だと思うが、青年がどういった魔法を使うのかも分からない現状で、正面から迎え撃つのは無謀と言っている。

さらにここは三階。

窓から飛び降りるなど、以ての外だ。

前も駄目、後ろも駄目。  
上下左右は床、壁、天井。  
まさに袋のねずみだ。

「さん……」

刻々とタイムリミットは迫っている。  
最早悩んでいる時間はない。

「し……」

意を決し、ポケットに手を入れる。  
そして中に入っていた物を掴み、急いで引き抜く。

「じ。時間切れだ！」

「ごめんなさあああああい!!」

青年が数え終わったと同時に、精一杯の謝罪と共に僕は青年に攻撃を仕掛ける。

謝罪と言っても、青年に対してではない。  
グロウシェイドで斬って飛ばした机の、持ち主である学園長に、だ。

「なにっ!？」

まさか机が飛んでくるなど、思ってもいなかったのだろう。  
突然すぎる出来事に、青年は驚きを隠せていないと、たとえ暗闇で見えずとも分かった。

「くそっ!!」

ようやく暗闇にも目が慣れたのか、青年の行動がハッキリと分かるようになった

青年は慌てた様子で、大きく後ろに跳躍していた。

机もそれを追うかの様に飛んで行く。

そしてそのまま青年の体に直撃——しなかった。

机は青年の直ぐ目の前で多方向から何かに貫かれ、勢いが完全に静止した。

「くっ……」

出来れば直撃して、そのまま気絶でもしてくれればと思ったが、流石にそこまで甘くはないようだ。

だが本来の目的は果たせられた。

青年を学園長室の外へやり、退路を作る。

それと同時に時間も稼いでより逃げやすくする。

青年が飛んでくる机を対処している間に、僕は素早く学園長室から抜けだしていたのだ。

廊下を全力で駆け抜ける。

体力の配分など考えている余裕はない。

一刻も早く、この学園から抜け出さなくてはならない。

ただそれだけを考え、僕は走っている。

「逃がす——ものか!!」

叫び声が聞こえると共に、僕の脇腹を先程の弾丸の様な物が掠める。

「ぐあっ!!」

激痛と衝撃に耐え切れず、僕はその場に転倒してしまった。  
痛みが感じられる場所を抑えると、ヌルリとしたものが僕の手に触れる。

これが何なのかは直ぐに分かった。

血だ。

頬の時とは比べ物にならないほど出ている。  
血とはこれほどまでに嫌な感触だったのか。  
ただ触っているだけで、様々な負の感情を起こさせる。

中でも最も大きいのは、恐怖だった。

但しそれは、血だけの所為ではないだろう。

何故だか僕は今、青年から命を狙われている。

以前のチンピラ同然の犯罪者グループなど比ではない。

人を殺す事に何の躊躇いもない、本当の殺意だ。

この世の全てをも呪いたくなる。

どうして命を狙われなくてはならないのか。

どうして僕がこんな目に遭わなくてはならないのか。

コツ、コツ、という足音が近づいてくる。

僕の考えなんてお構いなしに、青年は僕の命を狩り取ろうとゆっくりと、しかし確実に近付いて来ていた。

脇腹をやられ、もう本気で走る事は不可能だ。

それに仮に走る事が出来たとしても、彼の魔法を避けながら、逃げられるという保証はない。

激痛に耐えながら、直ぐ近くの教室に飛び込むように入る。

このまま廊下で倒れているよりは、安全だと判断したからだ。

「グッ——、ハア、ハア……」

脇腹を抑え、ふらつきながら再び机の影に隠れる。

そして机に背を預け、大きく息を吐く。

どうする、一体どうすればいい？

おそらくこのまま逃げていても、そう簡単に逃げさせてはくれないだろう。

それならば、迎え撃つしかない。

使えそうな物と言ったら、今手に持っているグロウシェイドぐらいだ。

数少ない魔具の一つであるから、能力を発動する事さえ出来れば、もしかすれば青年を倒せるかもしれない。

だがその肝心の能力を、発動させる方法が未だに分かっていない。

発動するか分からない能力に賭け、無謀にも向かっていくか。それとも来るか分からない助けを待ち、ひたすら逃げ惑うか。二つに一つ、どちらか選ばなくてはいけない。

「僕は、どっちを……」

「選ぶ必要はない。何故ならここで死ぬんだからな」

「っ!？」

油断していた。

正確にはまだ来ないと思い、気配を感じ取る事を怠っていた。青年の方も気配を殺し、僕に近付いて来ていたのだろう。

こちらは気配を感じ取ろうとせず、もう一方は気配を気付かれぬよう消していた。

そうなれば僕が気付かないのは至極当然の事だった。

誰の目から見ても分かる、僕の負けだ。

青年は僕を完全に捕えており、即座にグロウシェイドを振ったとしても、それよりも早く僕の息の根を止めるだろう。

「あ——」

最早声も出なかった。

僕の運命は既にそのまま死へと直結している。  
文字通り、手も足も出ないのだ。

「これでチェックメイトだ。最後に遺言ぐらいは聞いてやる」  
遺言？

そんなものあるはずがない。  
元々ここで死ぬ気など、なかったからだ。

あまりにも唐突すぎる。

その所為で、先程まで感じていた死への恐怖すらも忘れている。

「どうした、何もないのか？　なら……」

青年は手をゆっくりと振り上げる。

その行動が何を意味しているのか、直ぐに分かった。

僕は、ここで終わりなんだ。

そう悟った瞬間、様々な後悔が胸に押し寄せる。  
しかしそれも全て、今となってはもう遅い。

もしも、もしも最後に、願いが一つだけ叶うのならば、皆に会いたい、そして、謝りたい。

まあでも、そんな願い事すら、叶えてくれないみたいだけど。

「死ね」

そして、青年の手が、無情にも、振り降ろされた。

## 第二十四話「現実はそんなに甘くない」

一体、何が起こったのか。

一時は死をも覚悟していた。

だと言うのにどれだけ待っても、何故だかそれが訪れない。

「ふう、ギリギリセーフ、ってどこかしら……?」

既に耳に焼き付いている、聞き慣れた声がする。

ただその声は本来、今この場で聞けるわけがないのだ。

そのはずなのだが、どうやら聞き間違いというわけでもないらしい。

「中々連絡がつかないから心配になって来てみたけど、正解だったみたいね」

こんな状況でも余裕な様子を見せているのは、葵さんだ。

「なっ——、誰だ、貴様!? 何をした!?!」

青年は突然の参入者に、動揺を隠せていなかった。

しかしその中でも後ろに素早く下がり、体勢を整えていた。

一方葵さんは、僕らの反応を予想していたらしく、得意そうな笑みをしているのが目に浮かぶ。

彼女は本当に葵さんか?

もしかや偽物だとか、そういう事はある得ないだろうか。

「ふふっ、悪いけど、あなたなんかの名乗る——」

「葵さん、何っ——ゴフッ!？」

よりもよって負傷している脇腹を、容赦なく蹴られた。ただでさえ受けた傷も痛むと言つのに、あまりに酷い。

「あのねえ、人が折角格好付けようとしてるんだから、それ邪魔するんじゃないわよ!」

間違いない。

このノリはどう考えても葵さんだ。

「携帯に掛けても繋がらないから、もしかしてっと思って来たのよ」

確かに携帯電話は、先程青年の手によって破壊されている。

だがあの時から然程、時間は経過していないように思われる。

しかしそれにしては葵さんの対応が、早すぎる気がしないでもない。もしかして葵さんは、こうなる事を見越していたんじゃないだろうか。

そんな考えすらよぎってしまうのは、あまりにも状況が、出来過ぎているからだろう。

「どこの誰かは知らないが、覚悟は出来ているんだろうな? こいつと一緒に、死んでもらう!」

馬鹿なやり取りをしている間に、青年は再び僕らの元へ近付いていた。

青年も一時は動揺して見せたものの、素早く現状を把握し、直ぐにでも僕たちを殺せる体勢に入っている。

僕や葵さんが行動するよりも確実に速く、仕留める事が出来る状態だろう。

つまり、また絶体絶命の状態に追い込まれたというわけだ。

そのはずなのだが、葵さんは変わらず、

「あら、それ誰に言ってるつもり？ まさか私に、って事は、ないわよねえ？」

と余裕綽々の様子を見せていた。

葵さんの実力は重々承知しているつもりだが、この状況は流石に危険でないのか？

そう危惧せずにはられない。

「その、まさか、だとしたら？」

「どうもしないわよ。だってあなたに、私達を殺すのは不可能だもの」

「何……？」

突如、耳をつんざかんばかりの轟音が、辺りに響く。

それと共に教室の廊下側の壁が、文字通り崩壊した。

さらにその瓦礫が真っ直ぐ床へと落下するよりも早く、凄まじい暴風が巻き起こり、それによって瓦礫全てが青年の方へと飛んで行く。

「くっ、さつきから何なんだ一体！？」

青年は最早軽いパニックに陥っていた。

当然と言えば当然かもしれない。

僕だって現状を上手く把握出来ていないのだ。

飛んで行った瓦礫の一つ一つの大きさは、それ程大きいわけでもない。

それ故に青年に与えるのは、複数の切り傷程度であり、その効果何てあつてないようなものだ。だが隙を作らせる事は出来る。

たった一瞬だけ出来た隙の間に、葵さんは青年の懐に潜り込んでいた。

間近に居たというのに、僕はそれに気付く事すら出来ず、少し情けなく思う。

「悪いわね、しばらくの間眠ってもらうわ。ちょっと痛むだろうけど、我慢しなさい」

葵さんの拳が青年の体へと衝撃を、確実に与えた。

「がつ——」

相当な衝撃に、青年は呼吸がままならなくなっているようだ。

普段から食らっている僕だからこそ分かる。

葵さんのあれはもう凶器と言っている。

下手な鈍器よりも、殺傷力があるんじゃないだろうか。

「まだまだ——いくわよ！」

「くっ、くそっ——！」

そのまま追撃しようとした葵さんを振り払い、青年は窓から素早く飛び降りた。

「……って、飛び降りた!？」

ここは三階だ。

いくらなんでも飛び降りて無事で済む筈がない。

負傷している傷口を抑えながら、急いで窓まで鉛のように重い足を引きずる。

窓から下を覗くと、どのようにしたのかは分からないが、青年は傷つく事もなく、無事に着地していた。

そしてそのまま青年は、暗い闇の中へと溶け込むように消えて行く。

「ちっ、逃げられたわね……」

葵さんは言葉に舌打ちを混じらせながら、そう言った。

悔しそうにしている葵さんとは裏腹に、僕は心の底から安堵の息を漏らした。

更にはヘナヘナとその場に腰を崩してしまふ始末。

だが先程まで、いつ殺されてもおかしくない状況だったのだ。

それから助かって、気が抜けない方がおかしい。

少しの間沈黙が続き、葵さんは再び口を開いた。

「で、あなた達はいつまでそうしてるつもり？」

あなた達？

葵さんは一体、誰の事を言っているのだろうか。

それを聞くよりも早く、答えは出された。

「いつまでって、お前がいつ敵がそっちに向かうか分からないから待機してろって、そう言ったんだろっか」

「きよ、恭介さん!？」

崩壊した壁の向こう側から、恭介さんが出てきた。

その後ろには何も喋らないが誠さんもいる、つまりそれは……

「もしかして、さっきのって誠さんと恭介さんがやったんですか!？」

さっきのとはつまり、壁の崩壊と、瓦礫の強襲の事だ。

「ああそうだ。葵に命令されてな。まったく何夜中にいきなり呼びだしたかと思えば、俺のする事これだけかよ……」

恭介さんは何でもない事のように答える。

誠さんが風で瓦礫を飛ばしたのは分かる。

誠さんの魔法ならそういう事が可能だ。

ならば壁を破壊したのは、もしかして恭介さんが素手で行ったのか？

恭介さんの腕力が、壁すら普通に破壊出来る程である事に、僕は思わず身震いした。

性格も性格故に、よく今まで死人が出なかったものだ、不思議に思う。

「ところで才人、あなたの方は大丈夫なの？」

「え……?」

「傷よ、傷。もう大丈夫なの、って聞いてんの」

葵さんに指摘され、僕は再び傷口を抑える。

傷口は未だにヌルリとした感触と、焼けるような熱さが続いている。ただいい加減感覚が鈍ってきているのか、痛みはあまりしなくなっていた。

「あゝ……駄目、みたいです。おまけにちょっと気持ち悪いんですけど……」

おそらく貧血によるものだろう。

これだけ血が体内から抜け出ていたら、貧血になるのも無理はない。

「歩いて病院に行くのは……無理そうね。恭介、誠、一緒にパステイアのところまで運んでやりなさい」

「それは構わないが、お前はどうするつもりだ？」

誠さんがようやく口を開く。

恭介さん同様こんな時間に呼ばれた事に腹を立てていたんだろうか？

「私は調べたい事もあるし、残るわ。それに、これらの後処理もどうにかしないとね……」

教室の酷い有様を見て、葵さんは溜息をついた。

確かにこれらの後処理をするには、少々でなくくらい骨が要るだろう。

それに……

「あの、これ明日ニュースとかになつたりしません……？」

僕はそこが心配になった。

学園側からすれば、真夜中に何者かによって学園内を破壊されたのだ、通報しない方がおかしい。

そしてもし通報されてしまえば、僕の元まで捜査の手が伸びるのは明白だ。

日本の警察を舐めてはいけない、僕の血痕も、拭きとったとしても気付かれるだろう。

「大丈夫よ、情報の操作や隠蔽は割と得意分野なの。私に任せときなさい！」

「えつと……はい」

確かに葵さんの情報網は凄い。

その点で考えるとそっちの方面は確かに得意なんだろう。

でも、アモスのメンバーが堂々とそんな事宣言していいのか……？

何だ、僕が異常なのか？

おかしいのか？

こういうところを一々気にしちゃいけないのか？

葵さんや、その他の様々な人との出会いは、僕の中の常識を確実に崩壊させている。

何が正しくて、何が正しくないのか。

何が普通で、何が異常なのか。

こういう事を毎日考えさせられる羽目になるのは、僕ぐらいのものじゃないだろうか。

もしかしたら葵さん達が普通なのかもしれない。

記憶喪失によって僕は常識すら忘れたのかもしれない。  
いや、忘れたんだろう、忘れたに違いない、忘れたという事であつてくれ。

「うっ——」

ただでさえ貧血でまともに思考が働かないところに、無理をさせてしまったみたいだ。  
気分が悪くなり、思わず吐きそうになる。

「おいおい、大丈夫かよ……。オラッ、さっさと行くぞ！」

僕のだらしない様子に呆れながらも、恭介さんは肩を貸してくれた。  
恭介さんの体にここまで触れたのは初めてかもしれない。

触れて分かった、恭介さんはただ筋肉質なだけじゃない。

贅肉に限らず、筋肉に関しても一切無駄が無い。

その肉体は本当に岩のように硬かった。

ナイフを突き付けても傷一つ付かないんじゃないか、そう思えるほどだった。

「いつまた敵が襲ってくるか分からないからな、一応俺は護衛という形で付いていく事にする」

誠さんはそう言い、僕らの後を付いてくる。

「ああ、俺も流石にこいつ抱えながら戦うのはキチイしな。頼むぜ」

「んじゃ、さっさと行ってきなさい。私も後で行くわ」

そうして、葵さんの言う通り、パスティアさんの元へ向かった。

「……俺の仕事を増やすなど、前に言っただろう……」

「すみません……」

パスティアさんの元へ運びこまれた僕は、早速治療を受けた。

驚いた事にパスティアさんは医師としての技術は相当なようで、気がついたら治療は終わっていたと言う感じだ。

最初は手を抜いたのかとも思ったが、傷ももう痛まないし、そういう事でもないらしい。

因みに運び込まれたと言うのは間違いではなく、途中で歩けなくなった僕を、恭介さんがその腕力で軽々と持ち上げ、運んでくれたのだ。

その運び方自体はかなりずさんなものだったが……。

「幸い見た目の割に怪我は軽い。日常生活にそれ程支障はないし、一週間もすれば完治するだろうさ」

「はい、ありがとうございました」

「全くこんな夜中に仕事させやがって、高く取らせてもらっからな」

「は、はは……」

本気で言っただけなのにところがまた、ある意味で僕の恐怖心を煽った。

因みにシロクロコンビはここに着くなり、直ぐに帰ってしまった。

二人共眠気の所為か、かなり辛そうにしていたが、大丈夫だろうか？

「しかしまあ何だ。記憶喪失の所為だろうが、こんな簡単に怪我を負って、実力が落ちているとしか思えんな」

「そう、ですね……」

それは紛れもない事実だ。

葵さんやシロクロコンビに比べると、圧倒的なまでに弱い。この程度でアモスに入れるとは思えないし、やはりパスティアさんの言う通り、実力が落ちていると見て間違いないはずだ。

「やっぱり今のままじゃ、ただの役立たず、ですよね……？」

それどころか葵さん達に迷惑すら掛けているのではないか。

そんな暗い方向へと、思考が進む。

思考が一度ネガティブな方向に走ってしまうと、際限なくそちら側に行ってしまう。

これはどうしようもないのかもしれない。

「そうね、今のままだとただの役立たずよ。だから少しでも使えるように色々して上げてるんじゃない」

「葵さん……」

気がつくとき葵さんが僕の背後に立っていた。

いつの間に戻って来たのだろうか。

何にせよ、あまりに落ち込んでいる僕を見かねて、声をかけたに違いない。

「漫画やアニメじゃあるまいし、強い敵に会ったからって、突然強くなったりもしないわ。今のあなたの実力じゃやられて当然よ」

「うつ……」

現実はそんなに甘くない。

それは分かっているが、あまり認めたくないと言つのも事実だ。もしかしたらいきなり魔法が使えるようになって敵を退けられる、とかそういう幻想をどうしても抱いてしまう。

いや、抱きたくなくなってしまふ。

「でも、何だかんだで助かったわ。おかげで私も潜入できたしね」

「そうなんですか？」

もし本当に少しでも役に立てたのなら、これ程嬉しい事はない。

「ええ、そうよ。本当にありがとう！」

……嬉しいのだが、何故だろう。  
先程から葵さんの様子がどこか、

「……怪しい」

驚く事に、パスティアさんと同時に同様の感想を口にしていた。

「え、何よ、二人共！？　そ、そんな事ないわよ？」

「いや、どう考えても怪しいだろう。むしろ怪しさしかないぞ」

パスティアさんの言葉に、僕も首を上下に振る。

「あゝもう、気の所為よ、気の所為ね、気の所為に違いないわ！  
才人、傷はもう大丈夫なんでしょ！？」

「え！？ 大丈夫、です、けど……？」

「だったらさっさと帰りなさい！！！」

凶星だったのだろう。

焦る葵さんににべもなく部屋から追い出されてしまった。

仕方がないので、葵さんの言う通り家に帰るとしよう。

姉さん達にも黙って家を出てきたわけだし、気付かれる前に早く帰らなければならない。

「はぁ……今日はもう散々だな……」

もう誰かの肩を借りる等の必要はないが、普段より辛い事には変わりが無い。

本当に散々だ。

こんな調子で明日、学校にいけるだろうか？

そんな事を呑気にも考えながら、僕は二人がいるあの家に、帰宅した。

結局黙って外出していた事が二人にバレ、説教を食らったのは言うまでもない。

「お前、あいつがああいう目に遭うの、予想してたろ？」

才人を追い出ししばらく経つと、パスティアが私にそう言った。

「あら、どうしてそう思うの？」

「どうにも引つ掛かって、な。わざわざシロクロコンビだけこちらに送って、お前だけ学園に残ったのが何だか腑に落ちん」

「……」

相変わらず勘の良い奴ね。

誠と言い、あの上司と言い、どうしても頭のキレル人間ばかりが私の近くにいるのだろう。

もしかしてアモスには実は頭脳も必要とされていた、何て事はないわよね？

いや、それなら恭介の馬鹿が入れるはずないか。

「ま、お前がどういう考えを持って動いているのか俺には分からんし、あいつに特別な思い入れもない俺としては、好きにしろって感じだな。ただ一つだけ忠告しておくが、あまり使い過ぎて……壊すなよ？」

「何か、私がいつも人をこき使っているような言い方ね」

「事実だろう？」

「大正解」

そんな事は言われなくても分かっている。  
才人を壊す事だけは、絶対しない。

記憶喪失前の才人も今の才人も、何だかんだで気に入っているからだ。

それに、

「あいつがいなくなったら、弄り甲斐のある相手がいなくなっちゃうじゃない」

シロクロコンビの二人は、最近慣れてきたのか、つまらない反応しか見せない。

やはり才人の新鮮な反応の方が私は好きだ。

「あゝ……そっちの方向でも、壊すなよ？」

「ふふん、私を誰だと思ってるのよ」

「はあ、もう何を言っても無駄だな……」

パスティアの言葉は最早私の耳に届いていない。

さて、今度はどういう風に弄ってあげようか。

それを考えるだけで、私は楽しくてしょうがなかった。

（第二十五話へ続く）

## 第二十五話「妹はアイドル？」

学校へと潜入した日の翌日、怪我はまだ完治していない。それでも僕は何事も無かったかのように登校していた。単純にそうそう休んではいけない、という気持ちもある。そして任務であるから、という理由もある。

先日学園内で僕を殺そうとした人物は誰なのか。

それを調べなくてはならない。

葵さんが言うには、以前接触して欲しいと言った生徒の内の誰かで間違いないらしい。

僕もその解釈に誤解があると思っではない。

あの時挙げられた生徒は十数名。

この時点でかなり絞られているわけで、特定するのは案外簡単なのかもしれない。

特定さえすればいいのだから、早めに終わらせてしまおう。そう意気込んで僕は教室へ向かった。

「よ、才人！」

途中、背中を思い切り叩いて挨拶してきたのは佑助だ。

あまりに強い衝撃で、完治していない傷口に痛みが走る。

痛みと言っても大したものじゃないが、別に痛覚を好むマゾヒストではないので、出来ればもう少し優しく叩いてほしいものだ。

「あんたねえ、もうちょっと普通の挨拶しなさいよ」

佑助の後ろから雅も着いて来ていたのが目に留まる。

「佑助、それに雅も、おはよう」

「ええおはよう。学園にはもう慣れた？」

「いや、それはまだかな」

ハハハ、と笑いながら返す。

そういった取留めのない話をしながら、僕達三人は揃って教室へ向かった。

その間、周りの様子で何となく察したのだが、どうやら昨夜の騒ぎの痕跡は全くなっているらしい。

おそらく葵さんが昨晚の内に手を回したのだろうが、それにしても対応の速さに驚かざるを得ない。

「ところで才人、頭の方はもう大丈夫なの？」

「頭……？」

「ほら、昨日この馬鹿と、知り合いの先輩の所為で……ってもしかして記憶吹っ飛んだ？」

「いやいやいや、意識失う瞬間はともかく、それまでの経緯は流石に覚えてるよ……」

そもそも僕の記憶がこれ以上無くなる事はそうそうない。こつ言つのを不幸中の幸いと言っただろうか？

……いや、違う気がする。

「大丈夫だよ。ただちよつと瑠璃に怒られたけどね」

と、そこまで言ったところであるとある記憶が掘り起こされた。

「そう言えば瑠璃には『頭で石を割ろうとした兄』って事で説明したらしいけど――」

そう口になると、佑助の体がビクツと震える。

佑助だろうと言う予想はズバリ的中していたみたいだ。

佑助であつた事を確信すると、先程まで湧き起こっていた少しの怒りの感情も、最早呆れるばかりで消え去ってしまった。

「あ、それについては安心して。ちゃんと、躰けたから」

雅の発言に、佑助は声も無くただガタガタと体を激しく震わせるだけだった。

何をしたかは知り得ないが、流石にやり過ぎているんじゃないかと思ってしまう。

「ま、まあ程々にね……？」

言つて聞いてもらえるとは思っていないが、慰め程度には言葉を掛けておく。

そんなほのぼのとは言えない事もあつたが、それでも朝は何事も無く過ぎていった。

チャームが四限目の授業の終わりを告げ、学園は昼休みを迎える。この時間になると大半の生徒達は各々仲の良い者同士で共に昼食を取る。

教室で机を移動させて団を作る者達。

あるいは食堂まで移動し、そちらで食事を取る者達。

そしてまたあるいは、誰とも接せず一人で黙々と食事を取る者達。

僕と雅と雄介はおそらく二番目に該当する。

おそらく、と言ったのは、僕が二人と昼食を取ったのが昨日だけ、ただの一度きりだからだ。

だが食事場所を変える事もそうそうないだろう。

だから僕は、今日も三人、食堂で昼食を取るのだとばかり思っていた。

「おい、才人ー！」

「うん、分かってる。食堂行こうか」

「は……？ 今日食堂行かねえよ？」

「え……？」

思わぬ発言に、脳の判断が一瞬停止してしまう。

「じゃあどこに行くって言うのよ？」

しかし僕の疑問は、同じく頭に抱いたであろう雅が大弁してくれた。

「ああ今日はな、中等部の校舎まで行こうと思う」

そう、このラウングロース学園は初等部から高等部までエスカレーター形式になっており、全ての校舎が一つの場所に集まっている。

三つの校舎が集まり、ただでさえ広い土地を要求されるのだが、更にはこの学園、校舎一つ一つの大きさも相当なのだ。俗に言うマンモス校と言うやつで、高等部だけでも三千人はいるらしい。

初等部と中等部の生徒数も合わせると、万すらも超えると言う。

この学園にここまで生徒が集まる最大の理由は、何と言っても就職率、進学率の高さだ。

この学園は他と違い、マジシャンとルーザーを完全に分けている為、それぞれに合った教育が出来ていると言う話だ。

大抵の学校は進学、就職出来る者がどうしてもマジシャンかルーザー、どちらか一方に偏ってしまうみたいだ。

ならば他の学校も同じく分ければいいのではないか、と思ひもするが、どうも人件費等の問題でそう簡単に出来るものでもないらしい。

他にも学費の安さ、校風の魅力等、様々な好条件が重なり、この学園は晴れてマンモス校にまでなる事となっている。

僕の妹、瑠璃も僕と同じこの学園の中等部に通っている。

「どうしてまた中等部なんかに行くのよ？」

雅が僕の思っていた事をそのままに代弁してくれる。

雅の問いに、佑助は不敵な笑みを浮かべた。

「ふっ……何を隠そう、瑠璃ちゃんに会いに行こうと思う！」

声高らかに佑助は言う。

佑助の言葉が直ぐには理解出来なかった。

そんな僕の態度を何か勘違いしたのか、佑助は言葉を続ける。

「おっと、そんな警戒すんなって。折角知り合えるきっかけもあるんだし、一度会ってみたってだけだ。別に瑠璃ちゃんを狙ってるとか、そういうのはねえから安心しろ」

「いや、でも……」

そういう理由なら僕は別に構わない。

瑠璃と仲良くしてくれる人が増えるならそれ程喜ばしい事は無い。ただ、それはあくまで僕個人の考えであるわけで、瑠璃にとって迷惑ではないと言い切れないのだ。

「そう、ね。あたしも瑠璃ちゃんとは一度会ってみたいかも。才人の妹なんだったら、そりゃあもうとびつきり可愛いだろうし」

雅はチラリと横目で僕を見る。

「え、それって僕が女の子みたいに可愛いって事!？」

「どうしてそうなるのよ!？ 普通に考えて顔が整っているとか、そういう意味でしょうが!」

そうは言うものの、僕自身、自分で自分が格好良い等と思う程自惚れてはいない。

自分の評価では精々「悪くは無い」程度だ。

だから良い評価をされたところで、気持ちは嬉しいが実感としては湧かない。

「で、どうなんだよ才人？ 別に会っても良いだろ？」

「うーん……まあ良い、かな？」

そもそも、わざわざ僕に許可を取る必要はない。  
これはハッキリ言って瑠璃がどう考えるかの問題で、そこに僕に介入する余地はないのだから。  
そう言った諸々の関係で、断る理由がなかった。

「おっし、じゃあ早速行こうぜ！ 瑠璃ちゃんみたいな可愛い子と知り合えるんだ、一分一秒が勿体ねえ！！ むしろタイムスリップして小さい頃から知り合いたかったぜ！！！」

「あ、ちよつと——！！！」

雅の制止の声も聞かず、佑助は走って行ってしまった。

色々不安要素はあるものの、佑助の性格ならきつと瑠璃とも仲良くしてくれるだろう。

そして瑠璃も、きつと佑助と雅を受け入れてくれるだろう。

そんな三人の姿を想像すると、自然と笑みがこぼれた。

……等していると、佑助が再び、こちらまで走って戻ってきた。  
全力疾走で多少疲れたのだろう。

佑助は少し切れた息を整え、こう言った。

「はあ、はあ…… そっぴや俺、瑠璃ちゃんのクラス知らねえわ……」

「ちよつとは後先考えなさいよ！！！」

直後、雅の激しい突っ込みが佑助へと繰り出された。

あまりにも正論で、フォローが全く思いつかない。

こうも万人に同じ感想を抱かせるなんて、ある意味で佑助は凄い人物なのかもしれない。

幸いにして、瑠璃のクラスについては僕が事前に本人から聞きだしていた。

勿論こうなる事を予期して、などではない。

ただ単にもし学園内で用事が出来たら、と言っのを見越しての事だ。だがもし僕が思い出せなかったら、今頃わざわざ職員室まで聞きに行っていた事だろう。

普通ならその時点で諦め後日に回すのだろうが、佑助がそうおとなしく引き下がる性格とも思えない。

わざわざ職員室まで聞きに行っている姿を想像すると、何だかみっともなく、思い出せて良かったとつくづくそう感じた。

「おーっし、ここが瑠璃ちゃんのいるクラスだな!？」

そう声を上げる佑助を、僕と雅……だけではない、更に大勢の生徒が注目する。

おそらく僕達の身につけているのが、中等部の制服ではないからだ。中等部の生徒達も、僕達の服装が高等部の物である事ぐらいは知識としてあるのだろう。

だとすればこちらに注目するのは、一体高等部に居るはずの学生が、何用でこんな所まで足を運んでいるのか気になって仕方がない、と言う理由がほとんどだろうか。

「やっぱり、目立ってるわね……」

こうも注目を浴びると、流石に落ちつかないものがあるのか、雅は少し居辛そうにチラチラと周りに視線を向ける。

「さつてと、早速入つか！」

ガラガラと、少々乱暴な扱いで佑助は扉を開けた。

その瞬間に浴びた生徒達の視線は、どういった偶然か、僕が転入性として初めて教室に入った時のものと、全く同一であった。

教室内は突然の来訪者に、ほんの一瞬だけ沈黙し、その後騒然とした空気を作り上げていった。

僕個人の意見としては、一刻も早くこの場を去りたいのだが、おそらく佑助はそれを良しとしないだろう。

「えっと、瑠璃、はいるかな……？」

おとなしく諦め、近くに居た生徒に尋ねる。

しかしその生徒が答えるよりも早く、

「お兄ちゃん!？」

と僕を呼ぶ声がした。

僕の事を「お兄ちゃん」と呼ぶ人物には、一人しか心当たりがない。声の方向へと目を向けると、それは案の定瑠璃だった。

「どうしたの？ 何か忘れ物でもしたの？」

僕達に話し掛けて来る人物は瑠璃しかおらず、自然と注目を浴びるようになっている。

ただその中でいくつかの男子生徒の視線は、ただの好奇心と言うには明らかに違う、熱烈なものを向けていた。

血縁である事の鼻屑目無しに見ても、瑠璃は間違っ事なき美少女なのだ。

その上、成績も優秀で、誰にでも気兼ねなく接する。

そんな人物が同じ教室と言う、決して広くない空間の中で過ごしていれば、心惹かれるのも当然の道理と言える。

だからと言って、瑠璃をそう易々と渡す気は毛頭ないのだが。

「そついうわけじゃ、ないんだけど……」

一体どう説明したものか。

いきなり「瑠璃と友達になりたがっている人達を連れて来たんだ！」等と言っても、警戒されるのが目に見えている。

仮に僕の紹介でなければむしろ、通報すらされたっておかしくない。

そんな事を考えも無しに言い出すのは、相当な馬鹿ぐらいだが、

「実は俺達、瑠璃ちゃんと友達になろうと思って来たんだ!!」

そんな相当な馬鹿が直ぐ近くに居たね。  
すいませんでした、馬鹿は僕でした。

「アホか！ もうちょっと考えて発言しなさいよ!!」

雅が当然の突っ込みを入れる。

頭蓋骨が割れたんじゃないかと思う程の鈍い音がしたが、佑助なら大丈夫だろう。

慣れとは恐ろしいもので、佑助を心配する気持ちは、僕の中には微塵も存在していなかった。

一方瑠璃はと言うと、状況が今一呑み込めていない様子で、呆然と立ち尽くしている。

それに気付いたのか、雅は慌てて取り繕う。

「ごっこ、ゴメンね瑠璃ちゃん！ 私達、お兄ちゃんから瑠璃ちゃんについて色々聞いてて、それで一度会ってみたいなあ、って思ってた連れてきてもらったただけなのよ！！ だからね、この馬鹿の言う事は完全に無視していいから！！」

経緯の説明として間違っではないが、果たしてそれで瑠璃が納得してくれるかどうか……。そう危惧していたが、

「あ、そうだったんだ！ 初めまして、お兄ちゃんの妹の瑠璃です。いつも兄がお世話になってます！」

思いの外、瑠璃はあっさりと納得してくれた。現状においてはありがたい。

しかしいずれ悪意を持った人間にすら、簡単に騙されるのではないかと、兄としては心配でならない。

満面の笑みと共にペコリ、と礼儀正しく頭を下げる瑠璃に、雅は、

「うわっ、何この子。可愛すぎ……」

と呟きながら頭を撫でていた。

誰に向けて言ったわけではないのだろう。

だがその発言に、佑助を含むこの教室にいる生徒全員が、「うんうん」と同意するかのように首を縦に振っていた。

男子生徒だけではない。

女子生徒から見ても、瑠璃と言う人物は可愛く映るのだろう。

やはり僕がシスコンのではなく、瑠璃が可愛過ぎるだけなのではないか？

そんな疑問を胸に抱いている中、瑠璃は、

「？」

唯一人、事情が分からず首を傾げているだけだった。

## 第二十五話「妹はアイドル？」（後書き）

長らくお待たせ致しました。（次話投稿の度に言ってるのかない）

今回も話として大きな進展はないのですが、瑠璃が出るのが僕は満足です。

今更ながらに説明させていただきますと、こつも一話一話の投稿が遅い理由は、

プロットを作らず、その場の勢いで書いているからです。

ええ、馬鹿です。馬鹿ですとも。

本来すべき事をしていないのですから、馬鹿にされても仕方ありません。

しかしプロットを作ってしまった場合、

「この展開やめたい、これだと矛盾が起きる」

「あれ、こんな展開良くね？ヤバイ、早速やりたい！！」

等と思った時に編集するのが困難になってしまうんです。

それでも最初に決めた筋書き通りに終わらせた方が安定性があるのは、重々承知しております。

おそらくプロ、またはある程度の熟練者の方からすれば、

「まだまだ経験が浅いのには愚の骨頂」

と言った感想しか出てこないでしょう。

それでも僕はプロットを作成しようとは思いません。

自分の創り出す世界が、ふとした事で大きく変化するから面白いと考えているからです。

自分でも予想出来ない部分があるからこそ、楽しんで書けるんだと思います。

今回は長々と申し訳ありませんでした。

出来る限り早めに一話を書き上げられるよう、尽力するつもりです。

地味な宣伝

<http://twitter.com/#!/vied|rebellion>

ツイッターやってます。

「投稿おせえよ」等の文句とか遠慮なく受け付けております。

フォローしていただける際、「小説家になろうから」等のコメントを下されば確実にフォローを返すつもりでいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2965m/>

---

銀色世界

2011年10月7日12時54分発行